

せ
か
い
の
あ
な
た

目次

花吐き病 【嘔吐中枢花被性疾患】	3
ヴァンパイアの恋 (R18G)	31
Absolute (R18)	133
Bouquet	210
あとかぎ	240

花吐き病

【嘔吐中枢花被性疾患】

(2016- 09- 26)

「青い花びら？」

蝉の声が洪水のように押し寄せる真夏日。極秘施設での面会を終えた伊奈帆が外に出ると、熱い風が通り抜けた。伊奈帆のから青い欠片が風で飛ばされ、しばらく宙返りを繰り返した後地面に落ち、張り付いた。伊奈帆は不思議そうに呟く。

「花びらなんて、いつ、ついたんだろう」

「少し痩せたね」

いつもの面会室で、伊奈帆は開口一番そう言った。スレインはむっとして、にらみつけるように伊奈帆を見る。実際は少しではなく、かなり痩せて見える。元々肉付きの良い方ではない彼は、この一月で頬骨が目立ち、目の占める表面積が増えたように見える。大きな碧の目の下には、濃い隈ができていた。

「どうしたの。自殺願望？ ハンストじゃ死ねないよ」

「…そんなつもりじゃない」

「限もできてる。眠れないの」

「…君は、僕の何だ」

問い詰める伊奈帆にいらいらと言いつ返すスレインの顔は青白かった。唇が乾いてひび割れている。

「…そうだな。…味方、になりたいと思っている」

「…そう、か」

「辛そうだ。休むかい」

伊奈帆の言葉で立ち上がったスレインは、よろけてテーブルに手をついた。指まで青白い血管がはつきり浮かんでいる。伊奈帆はその指の形を凝視して、眉を顰める。

ふらつく足でスレインは、面会室から独房への道のりを歩き出した。

薄暗い独房。冷たい床には、無造作に散らばる青い花びら。

体調の悪いスレインが気になって、伊奈帆は許可を取った上で、独房を訪れた。嘔吐く声がして手早く独房の扉を開け駆け込む。中ではスレインが一人蹲っていた。

噎せ返るような、花の香りがする。

「これは？」

足元の花びらを拾う。中には、散る前の原型を留めているものもたくさんあった。

床一面の、青い薔薇。

「誰かが花を？」

これだけ買うとなると、かなりの金額だろう、と関係のないことが口から出そうになった。スレインは肩で息をしながら、伊奈帆を振り返る。苦しさからか、目元が滲んでいたし汗が額を濡らしていた。

「…違う」

スレインは体を折り曲げ、胸を押さえて喘ぐ。伊奈帆は大きく上下する骨ばった背中をさすった。

「大丈夫？ 苦しそうだ」

背骨が浮き出た背中の肉は肋骨の数もわかるくらいだった。汗で濡れた囚人服の下は肌は熱い。

「あ…触るな。…うっ」

ごぼごぼと噎せ、背中が大きく痙攣する。止まらない咳は、このまま死んでしまうのではないか、と思うほどだ。そして、スレインの口から次々に青い花びらが吐き出された。

「…これは、どうして？花を食べた？」

目を丸くする伊奈帆に、荒い息の合間でスレインが返答した。

「そんなわけ、ない」

「どうして、花を吐くの」

「わからない」

スレインが吐き出した花は、床一面の色を青く塗り替えていた。青い薔薇の香りの中、スレインの背を伊奈帆は撫で続けた。

「最近、顔色が悪くて心配していた。痩せたようだし。このせいか」

落ち着いたスレインを独房のベッドに寝かせ、伊奈帆もベッドの端に腰かけた。青い薔薇はもつたないが、ダストボックスに捨てた。背中越しに、咳払いする声が聞こえる。

「いつから？」

「…三か月くらい前」

「そんなに…なんで言わなかった？」

振り返って見下ろすと、ばつが悪そうなスレインの顔が目に入った。彼は左右に目を泳がせた後、おずおずと口を開いた。

「…その時は、花びらが一枚口の中に入っていただけだった。変だとは思ったけど、それから何もなかったから、何かの拍子に口に入ったんだろうと思った」

「…監獄で、花なんて口に入るわけない」

首を振る伊奈帆の言葉に、スレインが力なく笑った。

「…それから何日か経って、独房で急にせき込んだんだ。その時は、せり上がってくる感じで少し吐いた。花びらが三枚、口から出てきた。」

天井を見て話すスレインの上に屈みこんで目を合わせる。スレインは瞬きをして目を伏せた。

「変だ、変だと思ったが、特に体の調子が悪いわけでもないし、放っておいた」

少し間をおいて、その後、スレインは言った。

「…この一月、よく吐くようになった」

「今日は、何回吐いたの。あの一回じゃないよね」

「八回…だったかな。」

睨みつけた伊奈帆に、スレインは申し訳なさそうに笑った。

「気味が悪いから、できるだけ君に会いたくなかった」

どうして、いつも憎まれ口しか叩かないのに、こんな時は何も言わないのだろうか。

「馬鹿だな」

本当はこんなこと言いたいわけではないのに、と思いながら伊奈帆はベッドに深く腰掛けた。
「最近、また食事を取らなくなったと聞いた。そのせいだね」

そっと、胸骨の浮き出た胸に手を乗せる。びくりと体が強張った。心臓の鼓動が、規則正しく手のひらに伝わる。

「軍医に診てもらおう。申請する」

「すまない」

こんなに素直で殊勝だと、調子が狂う。伊奈帆は言葉を探す。

「…気づかなかった、僕も悪い」

スレインが眉を下げて微笑んだ。ゆるゆると首を振り、金の髪が枕に広がった。

「君は何も悪くない。迷惑をかける」

伊奈帆は立ち上がり、ドアノブに手をかけた。が、振り向いて、スレインを見た。目が合う。碧の目が丸くなる。

「…ねえ、僕は。君を大事にしたいんだよ。わかってくれるかな」

「…」

伊奈帆は戸惑った視線を背中に感じながら、独房を後にした。

「嘔吐中枢花被性疾患」

耶賀頼蒼真が病名を告げた。

「いわゆる、花吐き病だね」

「そんな病気があるんですか」

そう言って、椅子を回転させる。極秘施設内の診察室のパイプ椅子から腰を少し浮かせて、伊奈帆は耶賀頼に聞いた。スレインは、診察が終わると面会室へ連れて行かれた。

うん、と柔らかく返答し、耶賀頼は数枚の写真を示す。そこには、色とりどりの花々と、患者らしい、多様な国籍の少年少女の写真があった。写真の日付を見ると、歴史と言っていいほど昔のものもある。

「昔から、潜伏と流行を繰り返してきた病気だ。片思いを拗らせると口から花を吐き出すよう

になる。それ以外の症状は確認されていない。どうして花が吐き出されるのか、そのメカニズムも不明だ。吐き出された花に接触すると感染する。根本的な治療法は未だ見つからない」治療法がない。顔を曇らせる伊奈帆に耶賀頼は付け加えた。

「ただし、両思いになると白銀の百合を吐き出して完治する」

「両思い……」

白銀の百合なんて、メルヘンチックでロマンチックな話だが、実際の光景はグロテスクだ。物を吐き出すという行為は、自己防衛の手段だ。体力を消耗し、精神的にも追い詰められる。この写真の患者たちは、完治したのだろうか。それとも。

「患者の様子は良くないね。体力も落ちてる。今の状態が続くと、命に関わるよ」

カウンセリングをしようか、と言う耶賀頼に、申請しますと返答し、伊奈帆は彼の待つ面会室へ向かった。

「君の診察結果だけだよ」

面会室のテーブルをはさんでいつものように向かい合う。伊奈帆は、座ると同時に口を開いた。

「嘔吐中枢花被性疾患、というそうだ」

スレインは、じっと伊奈帆を見ている。頭の中で、病名を反芻しているようだ。

「通称花吐き病。片思いをこじらせると、花を吐くようになるらしい」

「はあ？」

「恋の病だそうだ」

「…」

スレインは間拔けな声を出した後、伊奈帆の言葉に顔を真っ赤にさせて俯いた。

伊奈帆はテーブルの上に指を組んで、肘に体重を預ける。これしかない、という心当たりは、口に出すのも馬鹿らしいが、話を進めなければいけない。

「セラムさん？」

「…」

スレインは唇を噛みしめて黙ったままだ。伊奈帆は、どうして自分は知っていたことにこんなにも面白くない思いをしているのだろうと驚く。きっと、いわゆる恋敵、というやつだったからだろうと自分の感情を分析する。

「彼女、夫がいるしな」

「そんな大それたこと、思っていない」

きつ、と目を吊り上げて、スレインが言った。やつれた輪郭の中で、碧の瞳がやけに大きく映る。

「でも、このままだと君が死んでしまうよ」

「花を吐いたくらいで、死なない」

いい加減腹が立ってきた。

「そのせいで食事を取らなくなつて、寝られなくなつたら死ぬ。この一か月でどれだけ体重が落ちてるか知ってる？」

伊奈帆に対して、少しは申し訳ないと思つていいのか、スレインはぐつと言葉を詰まらせて顔を伏せた。

「…食事はする」

「眠れないんでしょ」

「…夢を見なければ、平気だ」

「…僕はいやだよ。花に埋もれて死んでいる君を見つけるのは」

花を抱いて眠る。言葉にすると綺麗かもしれないけれど、人が吐いたり、生きたり、死んだり

するのは決して綺麗なばかりではない。あのごつごつした、大きく上下する汗ばんだ背中。汗と胃液と薔薇の噓せ返るような香り。ぐったりと力が抜ける生白い体。生々しくて、ちっともきれいじゃない。

「次に来るまで、ちゃんと生きててよ」

生きようとしている彼は、きれいだと思う。

「叶わぬ恋、か」

家に帰って、夕飯の支度を終えた伊奈帆は、ソファに寝転んで天井を見上げた。

「そんなに人を好きになるものかな」

自分も、セラムに対して好意を持っていないと言えど嘘になる。間違いなく、陳腐な言葉で言う恋をしていた。愛していた、と言ってもいい。アナリティカルエンジンに、自己と同一視している時まで分析され、勝手に告白までされたのは伊奈帆にとって大いなる痛手だ。しかし、自分は花を吐いたことなど一度もない。

「青い薔薇か」

ふと思ひ立ち、タブレットを手取る。検索ページを開き、単語をいくつか入力した。

「遺伝子組み換え技術によって誕生した。人工的に生み出された物ゆえに、当初花言葉は、『不可能・有り得ない』であったが、開発が進みブルー・ローズの誕生を実現させた事から、『奇跡』

『神の祝福』という花言葉が新たに充てられた」

不可能だと思っているのか。それでも、奇跡を願うのか。

「どっちだ。全く、矛盾だらけのやつだな」

カチャリと鍵の回る音がして、姉の明るい声が聞こえた。

「…えっ」

数日後の朝、なんとなく胸がむかむかして、洗面所でうがいをすると、口の中から白とオレンジの鮮やかな色彩が飛び出した。

「…まいったな…」

鏡には、普段は不愛想で自分の、困り切った顔が映った。

「これは？まさか…」

面会室のテーブルに置かれた透明なビニール袋の中身を見て、スレインが口を開いた。

「僕も吐いた。まいった」

透明な袋の中には、白色とオレンジ色の花びらが数枚、茎から先の形をはっきりと残すアネモネの花が二輪入っていた。

「…」

気の毒そうな表情で花を見つめるスレインに、伊奈帆は背もたれに体重を預けて言った。

「君、よく正気でいられるよね」

「大丈夫か」

スレインは心配そうに尋ねた。なんだかんだ言って、スレインも伊奈帆のことを気にかけているのだと分かり、伊奈帆は言いたいことを言うことにした。

「…恋の病か。花を吐くというかなり強引な方法で自覚を迫ってくる。吐いた花を見ることで、より一層相手への思いを自覚し袋小路に陥りまた吐く。身をもって体験して分かった。これはきつい」

「…こんな時でも、冷静だな」

スレインが今度は呆れたように息を吐いた。

「問題は、前途多難だということだ」

「前途多難？」

「両想いにならないと治らない。しかし、その見込みがなければ、どうしたらいい」

重苦しい空気が二人を包む。これはいわゆる恋バナというやつかもしれない、と能天気なことが頭の端に浮かぶが、当事者には生きるか死ぬかの一大事だ、と伊奈帆は続ける。

「これまで罹患した人々が、全て両想いになったとは考えにくい。おそらく、心変わりがあり、次第に症状がなくなっていくんじゃないか」

スレインが半分くらいは聞き流している表情で伊奈帆を見る。お前のことなんだからもっと真剣に聞け、と怒鳴りたくなる。

「しかしそれには、時間か出来事が必要だ。このままだと、業務に支障が出てしょうがない。君の命も危ないし」

「僕のことは、別に」

伊奈帆はスレインを睨みつけた。スレインは居心地悪そうに目を逸らす。

「そこで、今日は君に相談がある」

「僕に？相談？」

身を乗り出した伊奈帆に仰け反って、スレインは背もたれに背をぶつけた。

「確かめさせてほしい」

「…何を？」

「僕と君は、誰のことが、好きなのか」

誰も言葉を発しなくなった面会室で、ビニール袋が光を反射してちらちら光る。水に活けないと、このまま枯れてしまうな、とスレインは思った。自分で吐いた花はゴミだと思うが、このアネモネが枯れてしまうのはもったいないな。そこでまで考え、自分に心の中で舌打ちをした。

「不毛な会話だ」

「いや、切実だ。できるなら、今日話をつけたい」

そんな分かりきったことをどうして今さら、顔を突き合わせて大真面目に話し合わなくてはいけないのか。

「…君が言っただろう。姫様には、克蘭カインが」

「違う」

意外な返答だった。不思議に思い、スレインが首を傾げる。

「何が違う？」

そこで伊奈帆は珍しく口ごもり、しばらくテーブルの上に視線を落とした後言った。

「僕が好きなのは……」

その、一つしかない橙の瞳がまっすぐスレインに向けられた。澄んだ目で見つめられて、スレインはぐっと唾を飲み込む。伊奈帆が静かに唇を開いた。

「僕は、君が好きなのかもしれない」

「………はあ？」

スレインの口は、母音の ω の形に開かれたまま固まった。碧の瞳がまじまじと伊奈帆の橙の瞳を見つめ返す。

「……傷つくから、その顔をめてくれる」

唇を尖らせて伊奈帆が言った。スレインは天井を見上げ、目を閉じた。

「……君は、アセイラム姫を好きなんだ」

「いや、確かにそうだが、そうじゃないみたいだ。アナリティカルエンジンのお墨付きだが、だとしたら、とっくの昔に花を吐き出している。それに……」

そこで伊奈帆が目を逸らした。言い難そうにぼそぼそと呟く。

「…君が、夢の中にまで出てくるものだから。…夢見が悪くてしょうがない」

起き抜けに吐くのは嫌な気分だ、と続ける伊奈帆の顔は、彼の姉に「照れてるのね」と評されるだろう。しかしスレインは、大丈夫か、という顔で伊奈帆を怪訝に見つめている。

「…」

「だから、その顔は傷つくって言っている」

「…しかし、どうして君が僕なんかを…その、…」

俯いて口をもごもごと動かすスレインの両手は、手錠の鎖をカチャカチャと落ち着きなく玩んでいる。

「好きになるかって？わからない？」

「わからない」

そこで伊奈帆は少し笑った。スレインは驚いて目を丸くする。伊奈帆が笑うのは、それも声を立てて笑うのは初めてのことだった。今日は、驚かされてばかりだ。

「実をいうと、僕にもさっぱりわからない」

「はあ？なんだそれ」

「いつ会いに来て、君は暗いし悲観的だし、僕に対して排他的すぎるくらいがある。挨拶して

も返事が返ってこないこちらの気持ち考えたことがあるのかな？たまに喋ったかと思えば、話は抽象的で分かり辛いし。君と付き合うのは本当に骨が折れる」

「ひどい言われようだが、その通りだな」

一息に捲し立てる伊奈帆に、スレインは苦笑いした。そんな相手に付き合うなんて、本当に物好きというか、変な奴だ。

「でも」

伊奈帆が一度言葉を止めて、息を吸った。スレインは伊奈帆のその臉が閉じられ、そして開かれるのを見た。

「楽しいと思う」

面会室の壁には、蛍光灯の無神経な光に照らされたいくつかの染みがあった。こんなの気付かなかったな、とスレインは関係ないことを考えながら、伊奈帆の姿を目に映していた。

「君の言葉は分かり難いけれど、君の言わんとすることは明らかで……とても綺麗だ。僕は、君がいるってことを確かめたくて、ここに来るんだ」

伊奈帆は目を閉じて微笑んだ。スレインには、その笑顔がこれまで抱いていた印象に比べあまりに幼く見えて、背中がざわついた。目の前の少年を、じっと目に映す。その碧の双眸を、たっ

た一つの橙色が掴んだ。

「これは、きつと恋なんだと思う」

スレインは、伊奈帆の隻眼から視線をテーブルの上に移した。白と、オレンジ色のアネモネ。伊奈帆らしい色だと思った。

「僕は、君が好きなんだと思う。君は、誰が好きなの」

「それは…」

「今日は、答えてくれるまで、帰らないから」

強情な伊奈帆はきつと有言実行するだろう。スレインは、できる限り素直に、言葉を選び口から出そうと頭を巡らす。

「…僕は、誰かを好きになる資格なんてないよ」

「それ、僕に対してめちゃくちゃ失礼だと思わない？僕は今、覚悟を決めて君に告白したと思うんだけどな」

衣擦れの音までも聞こえる緊張が、面会室に満ちる。蛍光灯のかすかな電気音も聞こえるように静かだ。

「…君が」

スレインが、普段なら聞き取れないほどの声を出した。伊奈帆はそのままの姿勢で、じっとスレインを見つめる。スレインは、俯いて自分の手のひらを見ながら話し出した。手錠がシャリ、と大きな音を立てた。

「君が…、来ない日は。よく花を吐く。それは…君がもう、来ないかもしれないと思うと、言い忘れたことがたくさんある気がして、苦しくて。言葉の代わりに花が喉からせり上がってきて…」
スレインは、指を軽く曲げたり伸ばしたりしながら、掠れた声で言葉をつなげる。

「君が来たと分かると、花のことなんか忘れる。この部屋にいる時は、いつも言い忘れたことを思い出そうとするんだけど、…言いたくもないことしか出てこないんだ」

スレインはそこで、唇を噛んだ。伊奈帆は黙って割れた唇を見た。

「…君が、帰ると。あの独房に戻ると、花を吐く。突然、取り返しのことしかない気がして、ドアを見る。そこを開けても君はいないのに、手を伸ばす。苦しくて苦しくて、花が口から溢れてくる」

いつかの、青い薔薇の中に横たわる彼を思い出す。まるで花葬のような光景に、肌が粟立ち毛が逆立ったのを覚えている。

死んでいるかと思った。

触れた背中が熱くて、涙が滲んだことをスレインは知らないだろうな。

「気を失うまで花を吐き出した後、思うんだ」

低く柔らかな響きの声は、少し震えていた。

「君が、…好きだって」

伊奈帆はテーブルに手をついて立ち上がろうと腰を上げ、結局椅子に座り直した。

自分の靴の爪先を見る。土がついていた。最近磨いていない。ここに来る時は、いつも気が急いでそんなことまで頭が回らないんだ。伊奈帆は口を横いっぱいにつ張った顔が収まってから、顔を上げた。

「…ありがとう」

「…それだけだ」

視線がかち合い、お互いどぎまぎしてそっぽを向いた。伊奈帆はくすりと笑い、スレインはそれを横目で見た。

「…照れるね」

「…」

「今、僕たちは両想いになった気がするんだけど」

「…そうなのかな」

「…完治したら、銀の百合を吐き出すらしいよ」

「ふうん」

「…」

「…」

「出ないね」

「そうだな」

「ねえ、キスしようか」

「は？」

「いや、せっかくだし。もしかしたらそれで治るかも」

がたがたと椅子を揺らして立ち上がる伊奈帆にスレインは仰け反った。

「嫌だ」

「なんで」

伊奈帆はいつの間にかテーブルを回って来ていた。スレインの座る椅子の背もたれに真正面から両手をがっしりとかけた。

「忘れてくれ。そんなつもりじゃない」

精一杯顔を背けるが、何もかもがやけに近い息が肌にかかる。すぐそこに、橙の瞳があるのが分かる。

「じゃあどんなつもり。僕の気持ちを弄ばないでくれる。勇気を出して告白したのに」

「待て、待て待て待て、詰め寄るな、腕を掴むな、顔を近づけるな」

「顔が赤いよ」

「う…」

スレインの茹蛸のような耳をからかい半分に指の背で撫でてから、伊奈帆は真剣な顔で聞いた。

「ねえ…本当に嫌？」

そうだったら、すぐやめるけど。

「うう…」

スレインは、肘を曲げて胸の前で握りしめられていた両手で顔を覆った。手の下にある口から、くぐもった声が漏れた。

「…いや、じゃ、ない。」

けど、怖い。その声は泣いているように聞こえて、伊奈帆は優しい声で聞いた。

「なんで怖いの」

スレインは、顔を覆ったまま微動だにしない。手の平越しに、唇が震えているのが分かる。骨ばった手首。手錠が、痩せて肉の落ちた前腕の中ほどまで下がっている。華奢な腕も震えていた。

「君を、汚してしまうような気がして。…もう、君を傷つけたくない」

伊奈帆は額をスレインの額にこっん、と当てた。鼻にかかる息があたたかい。

「馬鹿だなあ。君は」

「ばっ…！うっ…が、あ…」

伊奈帆の言葉に勢い良く顔を上げたスレインは咳き込み、青い花びらが赤い唇から次々に零れ落ちた。苦しそうに歪められた小さな頬を両手で包む。

「好きだよ。スレイン」

「か、かい…、づか…ん…」

青い花は、苦かった。

ごくりと飲み込んで、深く深く口付ける。

「んん…、ふ…う…う…」

スレインの手が、伊奈帆の肩を掴んで手錠がカシヤカシヤと音を立てた。体重のかけられた椅子が不規則に揺れる。そしてしばらくして、二人は弾かれたように離れて大きく咳をしながら体を折った。

「う…ごほ、ごほっ…が…、はあ…」

「があ…、あ…あ…かは、あ…」

数枚の青い花びらに彩られた灰色の床の上、白銀の百合が二輪、床に落ちた。

「青い薔薇の花言葉は、不可能と、奇跡」

次の面会で、出し抜けにスレインが言った。彼から話し出すのはとても珍しいので、伊奈帆は静かに彼の話を聞くことにする。自分から話すスレインの言葉は澁みなく、優しい響きを持っていた。

いつも、困らせたり、怒らせてばかりいてはいけないな。伊奈帆はそっと微笑む。

「アネモネの花言葉は、恋の苦しみ」

「確かに、死ぬほど苦しかった」

伊奈帆の相槌に、スレインも小さく笑った。穏やかな声が、その花について語り出す。

「アネモネは、色で花言葉が違う。白いアネモネの花言葉は、真実、希望」

伊奈帆は自分が吐き出した花の姿を脳裏に描く。あの時はちゃんと見ていなかったから、今度、花屋で聞いてみようか、と思った。

スレインは続きを話す前に、少し間をおき、顎を引いて伊奈帆を見た。

「そして、オレンジ色のアネモネには、花言葉がない」

花言葉がない、と言われたオレンジ色のアネモネ。目立つ色のその花は、意外にも万人の知るところの意味を持ち合わせていないのだった。

「そうなんだ。君、詳しいね」

「別に…」

感心する伊奈帆の言葉にそっぽを向いて、スレインが憎まれ口をたたく。それには、以前のような険悪さはない。

「そうか。ねえ、どんな花言葉がつくだろうね」

伊奈帆が聞くと、スレインは目を細めて笑った。初めて見る穏やかな笑顔に、伊奈帆は目を大きく開いて眦の上がった瞼の中にある碧色を見つめた。

「君のような花だな。伊奈帆」

伊奈帆は、それがスレインなりの愛の告白だと気付いて、頭の後ろをがりがりと搔いた。スレインは、伊奈帆の赤い耳を見て照れたように笑った。

ヴァンパイアの恋 (R-18G)

(2017-10-26)

海賊船スレイプニール

風のない夜。界塚伊奈帆は、後甲板でブルワークに背を預け、ぼんやりと夜空を眺めていた。オレンジ色に塗装された彼の船は、今は闇の中で鈍く色彩を反射している。不気味なほど静かな夜の海だった。

先ほど立ち寄った村で見た光景が、彼の気分を沈めていた。村人たちの怯えた目、差し出される貢物、着飾った娘たち。敵を容赦なく殲滅する悪名高い海賊船を迎え、彼らがこの窮地を切り抜けようと頭を絞ったのだろうということはわかる。しかし、こういう扱いには慣れていない。彼は基本的に知的で紳士だった。略奪も虐殺も好まない。やられたらやり返してきただけだったが、いつの間にか評判が独り歩きして、こんなところまできてしまった。

「退屈だ」

思わず声が漏れた。そう、彼は退屈で、孤独だった。仲間はいる。手下もいる。でも、彼は腹を割って話せるような友人を持たなかった。こんな静かで寂しい夜に隣に座る相手がいれば、この退屈も紛れるだろうか。

「船長」

古い付き合いの船大工がミズンマストから顔を出した。振り向かず小さく頷く。

「霧が出てきた。指示してくれ」

「そうだね」

立ち上がり、何気なく振り向き海を見たその時、伊奈帆は不思議なものを見た。身を乗り出し、目を凝らす。

霧の海に、何かがいる。

霧でぼやけているが、何だろう。人影のようなものが見えた。

雲間から月が覗いた。

月の光が白く広がる。

風は吹いていない。

霧の中、それは動いた。

ゆっくり。

人だ。

皺ひとつないシーツのような海面を歩いている。

黒い服。

黒いマント。

まるで、コウモリのような…。

海の上？

この黒海のど真ん中に？

本当に人だろうか？

「カーム、あのコウモリが見える？」

「何？」

船大工が怪訝そうな顔で近づき、船長の隣で舷牆から身を乗り出す。アッと声を上げた。

「なんだあれ、人か？」

どうやら、夢ではないらしい。伊奈帆の橙の双眸がきらりと光った。

「捕らえて。面白そうだ」

「へ？」

カームは間の抜けた返事をした後、ぎょっとして口を噤み、慌ただしく甲板を走っていった。

「月夜の海に、一羽の蝙蝠。詩的だな」

一人残された船長は、そう言って月を見上げた。白い半月が雲間に隠れるところだった。伊奈帆は前甲板に向かって駆け出した。

カームは船首楼で船員を叩き起こしながら、先ほどの伊奈帆の表情を想起する。船長が笑うところを見るのは、数年ぶりだった。

すぐに巻き上げ機でボートが下ろされ、海上の獲物へ投網が放たれた。

それは、実に簡単に捕らえられた。抵抗することもなく、口も利かず、おとなしく船員の指示に従い、手足と口を拘束された姿でボートから甲板へ引きずり出された。伊奈帆はフォーマストに縛り付けられる最中のそれを、正面から観察した。

かなり美しい、若い男だ。黒いマントに黒い服。遠目では上等に見えたその衣装は、よく見ると時代遅れのデザインの上、あちこちほつれ破れ汚れ、かなり埃っぽかった。首を垂れてじっとしている姿は従順に見えるが、人ならざる者なら油断はできない。そう思うが、縄と轡で拘束され、屈強な男たちに囲まれたそれはひどく哀れに思えた。無表情に装っているが、伊奈帆と時折交わされる視線には微かな戸惑いと高い知性が感じられる。伊奈帆はしゃがみこみ、その口元に手を伸ばす。

「轡を取るよ」

「船長！」

船員から声が上がったが、伊奈帆はかまわず獲物の後頭部に手を伸ばし、結び目を解いた。

「まさか、噛みつきやしないだろう」

轡を取ると、形のいい口が表れた。固く閉じられた唇は尖り、切れ長の目は伊奈帆を真正面から見据えている。繊細な色彩の、美しい瞳だった。

「名前は？」

「…スレイン」

驚いたことに、素直に返事をした。ざわつく船員を背にして、伊奈帆は口角を上げる。

「もっと静かなところで、話をしよう」

手ずから縄を引き、船長室の扉を開ける。そのまま歩を進めると、縄がピンと張った。伊奈帆が振り向くと、獲物は扉の前で立ち止まり、入ろうとしない。抵抗を示すのは初めてだった。
「さあ、入って」

「…」

優しく促すと、彼は俯いたまましずしずと歩を進めた。部屋の中央で、珍しいものでも見るようにゆっくりと室内を見渡す。状況に似つかわしくない、あどけない表情だった。

「ここに座って」

マツチで部屋の灯りをとす。手に掛けた縄を解いて、部屋の中央の布張りのソファを示し伊奈帆は言った。

「…」

勧められたソファに腰を下ろし、足をそろえてじっとしている。伊奈帆は差し向かいの椅子に座り、テーブルに肘をついた。目の前の獲物の出で立ちをまじまじと見つめた。

よく見ると、黒く見えたブラウスやネッカチーフは赤黒くまだらだった。もとは白かったらしいそれは黒々とした血で染まったらしく、乾いた血の匂いがした。蠟燭の揺らめく明かりに照らされた顔は恐ろしいほど整っている。青白い肌はなめらかで、唇はほのかに赤い。金のような銀のような、不思議な色の髪だ。膝の上で組まれた両手は作り物のような造形で、白くたおやかだった。その目は長い睫毛に星屑を宿し、そっと伏せられテーブルの上を見ていた。

「スレイン」

先ほど聞いた名前を呼ぶと、彼はさつと視線を上げた。伊奈帆は彼の瞳をのぞき込む。逸らせることはなかった。敵意はなさそうだ。その事実が伊奈帆の心を躍らせた。

「人間にしては綺麗すぎる。君は一体、何者？」

「あなたは、誰ですか？」

口をきいた。優しい声だった。そのとき向けられた眼差しは翳りなく、宝石のような色の瞳が美しかった。

「伊奈帆。この海賊船の船長だ」

「海賊……」

スレインはきょろきょろと船室を見渡した。伊奈帆の私室には、たくさんの海図といかがわしい宝の地図と、山のような書物が整然と配置されている。そして申し訳程度に略奪品らしい調度品や装飾具が雑多に散らばっていた。彼はその中の何かに目を留め、伊奈帆に聞いた。

「立ち上がっても？」

「どうぞ」

スレインは音もたてず立ち上がり、華奢な金細工を施した姿見の前に立った。伊奈帆は思わず腰を上げ、ひゅうと口笛を吹いた。

鏡には何も映らなかったのだ。

「君は、ヴァンパイア？」

「もう、ずっと」

スレインは姿見の前でくりと頷いた。伊奈帆を振り返り、自嘲するように笑った。

「ヴァンパイアが水の上を歩けるなんて、知らなかったな」

伊奈帆がそう一人ごちると、彼は鏡の前でくりと回った。マントがぱさりと広がり、ごわごわと重そうに窄まった。

「随分久しぶりだ。天井のない場所を歩いたのは」

彼は穏やかに答え、映らない鏡にペタペタと触れた。もしかして、このヴァンパイアは鏡を見るのが初めてなのだろうか、と伊奈帆は考える。

「日に当たればどうなる？」

伊奈帆の問いに、スレインは窓に視線を送った。まだ月と星が出ているが、空は少しずつ色調を変化させている。

「焼け死ぬ。灰も残らない」

なら、この窓は塞がないと。もうすぐ夜明けだ。伊奈帆は立ち上がり、そこかしこを物色して

光源を遮る紙や布を探りだした。

「ここは黒海のと真ん中。あと二時間ほどで夜が明ける。……どこから歩いてきたのか知らないけれど、命知らずだね」

用済みの海図や羊皮紙を小脇に集めながら、伊奈帆は聞く。

「死ぬ気だった？」

伊奈帆の行動を不思議そうな顔で眺めていたスレインは、その問いに目を丸くした。二人の間に、長い沈黙が訪れた。伊奈帆は引き出しから金槌と鋷を取り出し、窓に近づく。しばらく、伊奈帆が窓に海図を貼るために鋷を打つ音だけがコンコンと響いた。

「どうして僕を拾った。化け物だ」

ほとんど聞こえないくらいのが声がスレインの口から吐き出された。伊奈帆はその声があまりにも途方に暮れていて、思わず手を止め振り返った。スレインは蒼白になって鏡をじっと見ている。彼は、鏡に映らないことにショックを受けているようだった。

もしかしたら、元は人間だったのかもしれない。

「……面白そうだったから。それに僕は海賊だから、珍しいものや綺麗なものが好きなんだ。それが理由かな」

三つある船室の窓を全て塞いで、伊奈帆は金槌と鋏を部屋奥のデスクに置いた。そのまま腰を預けて、入り口近くで鏡の前に立っているスレインを見つめる。部屋の端から端は、五メートルほどの距離。蠟燭の灯りだけに照らされた薄暗い室内で、スレインの姿は亡霊のように見えた。彼は伊奈帆を一瞥し、俯いてしまった。

「変な奴……」

肩を落として立ち竦んでいる。なんだか可哀想になってきて、伊奈帆はいろいろと考えを巡らせた。

「……もし帰る場所があるなら、送りとどけてやってもいい」

海賊らしからぬ申し出に、スレインは目を丸くした。伊奈帆は座ったら、とソファを右手で示す。スレインはゆっくりと鏡から離れ、素直にソファに座った。首をふり、困ったような顔で笑う。初めて見る表情だがとても彼らしい、と伊奈帆はその笑顔を評価した。

「……本当に変な奴だな。そんな場所はない」

そうだろうな、とは思った。帰る場所があるのなら、あのような自殺行為はしない。伊奈帆だって、もう帰る場所は地上にはないのだ。この船くらいしか、帰る場所と呼べるものはない。

「この船に乗るかい？」

伊奈帆は聞いてみた。少しの間話をしただけだが、スレインとの別れを耐え難く感じていたのだ。もっと話がしてみたかった。

「…僕を飼う気か？」

スレインが僅かに眉を顰めて伊奈帆を見据えた。それほどの屈辱を感じているようにも見えないが、伊奈帆の意図を計りかねているようだった。伊奈帆としては、もっとフランクで青臭い関係性を望んでいるのだが、今の彼には言っても伝わらないだろう。

「ま、そういうことになるかな」

それもあながち間違いではない。ペットも宝物も手が掛かる、という点では同じだ。彼は生きることを苦痛と感じているらしい。この船に乗るということは、生きる上で伊奈帆の庇護を全面的に受け入れるということになる。飼われる、という言葉は現状を的確に説明しているように思われたので、特に否定はしなかった。

「どう？」

スレインは力なく首を振った。柔らかそうな髪が揺れ、この髪を日の光の下で見たら綺麗かもしれない、と伊奈帆は思った。しかし、ヴァンパイアには無理な話だ。

「せっかくだけれど、無理だ。血がなければ…」

それはそうだ。ヴァンパイアだというから、血はいるだろう。食事はどの程度必要なのだろうか。

「人間の血？」

スレインが小さく頷く。

「血を吸われた人間は、死ぬか、眷属になる」

「眷属？」

「ヴァンパイアになる。そうすれば、もう人間には戻れない」

淡々と語る声は低く、深い悲しみを秘めていた。伊奈帆は、やはり彼は人間だったのだ、と思った。

「君もそうやってヴァンパイアに？」

「…違う。僕は死んだら生き返った」

スレインは首を振って答えた。死者が生き返るなんて、教会の連中が聞いたら卒倒してしまいそうな話だ。伊奈帆は、目の前のヴァンパイアがこれまでどのように時を過ごしてきたのかに興味を持った。

「へえ。それで、どうして海の上に？」

スレインは口をへの字に曲げて、苦虫をかみつぶしたような顔になった。そんな顔もできるのか、と胸が弾んだ。美形が台無しだが、悪くない、と伊奈帆は思う。

「もう飽き飽きした。どうせ死ぬなら、青空を見たいと思った。しかし火事になっても困る。海の上なら、誰にも迷惑はかからないだろう」

どうやら海の真ん中で、ひとりぼっちで朝日に焼かれて死のうとしたらしい。

「…寂しい人だね」

伊奈帆はそう呟いて壁際の棚へ向かい、中から金製のゴブレットを取り出した。スレインが、伊奈帆の手でテーブルへと置かれた空のゴブレットを目で追う。

「…何？」

伊奈帆は答えず、帯剣していたナイフを取り出した。鋭い刃先を手の甲にさっと滑らせる。血が滴り、ゴブレットの中に次々波紋を広げた。鉄の匂いが濃くなり、ヴァンパイアの喉が鳴るのがわかった。器が満たされると、になると、伊奈帆は傷口をスカーフで縛った。スレインの目の前に、ゴブレットを押し出す。

「要は、直接吸われなければいいんですよ。…これを」

スレインは伊奈帆の顔と彼の血液で満たされたゴブレットを交互に見た。唇を真っ白になる

ほど強く囁んでいる。伊奈帆はスレインの向かいの椅子に座り、背もたれに体を預け足を組んだ。

「この船に乗るなら、食事を提供する。寝床と…あと服も」

その服、ちょっと臭うし、埃っぽいから。そう続ける伊奈帆からスレインは居心地悪そうに視線を外した。

「…それで僕は、見返りに何をすればいい？」

殺しか？略奪か？それとも、夜伽でもすればいいか？ぼそぼそと続ける声に伊奈帆は一度首を振った。

「別に何も。こうして時々、話し相手になってくれればそれでいい」

「…」

スレインは伊奈帆を無言で見つめた。視線がかち合う。やはり美しい瞳だ、これも日の光の下で見ればどれほど美しいだろうか。

「退屈してるんだ」

時が止まるような沈黙が部屋を満たした。そして、スレインが小さくため息をついて髪をかき上げた。

「本当に変な奴だな…」

やわらいだ表情に微笑み返して、伊奈帆は杯を顎で勧めた。スレインはゆっくり手を伸ばし、凝った意匠が施されたステムを指でなぞり、ボウルを大切そうに握った。伊奈帆の耳に、彼の喉を唾が通る音が聞こえた。

「…そのうち足りなくなる。お前の喉笛に噛みつくかもしれないぞ」

赤い舌が唇を濡らした。目が妖しく光り、睨みつけるように伊奈帆を見据えた。

「その時は、君を海にでも捨ててさ。青空の下でね」

それはいい、とスレインは笑って、盃の中身を飲み干した。

スレインは、温かいベッドの中で目を覚ました。真っ暗な室内に、寄せては返す波の音がこだまする。この部屋の窓は全て覆いがかけられているので正確な時刻はわからないが、ヴァンパイアになってからは体質が変化したため、日があるうちは起きていられない。だからもう日は暮れているはずだ。

この船に住み着くようになり、ひと月ほどが経った。伊奈帆は言葉を遣えず、スレインに清潔

な衣服と私室のベッドを与えてくれた。数日おきに、自身の肉を割いて血もくれる。正直全然足りないのだが、与えられる以上が欲しいとは思わなかったのも何も言わなかった。

スレインは活動時間である深夜の数時間を伊奈帆と過ごす。伊奈帆は話してみるととても頭が良く、常識を備えていた。そして、若者らしい純朴なところがあった。海賊船の船長になぞ、どうしてなったのか、とスレインは思った。伊奈帆は眠っているときもあったが、起きているときはスレインに身の上話をせがんだ。人間だった時のこと、ヴァンパイアになってからのこと……。十年や二十年の話ではないが、スレインはできる限り詳しく語った。ヴァンパイアになってからは曖昧な部分も多く、もう思い出せない記憶があまりに多かった。その事実には愕然としながら、主に人間であった時の、生まれ育った村の優しい記憶と罪に苛まれる呪われた記憶を語った。伊奈帆は何度も質問をして、スレインは答えられる限りそれに答えた。

どうやら伊奈帆の考えによると、自分が人間であった時というのは二百年近く昔のことらしかった。スレインはこれまで出会った人々のことを思い返そうとしたが、全て思い出すことはできなかった。話すべきことが尽きると、二人でチェスをし、本を読み、甲板で星を眺めた。船員たちは船長の行動に戸惑っている様子だったが、口を出すものはいなかった。

真っ暗な室内を見渡し、はて、とスレインは覚醒しかけた頭で考える。いつもなら、ランプの

灯りがついている。そして伊奈帆はデスクで何か本を読んだり、海図を眺めたり、書き物をして
いるはずだ。時々居眠りをするソファは空っぽで、その時だって灯りは忘れない几帳面なところ
があるのだ。

どこに行っただろう、と身を起こそうとして、スレインは今度こそはっきりと目が覚めた。
「…なんだ、ここで寝てたのか」

いつ潜り込んだのか、伊奈帆がベッドの中で丸くなって寝息を立てていた。

同じベッドで眠ったのは初めてのことだ。寝かせておいてやろう。そっと出て行こうとすると、
腰回りにしがみ付かれた。寝起きの、不機嫌そうな唸り声でした。

「すまない、起こしたか？」

「…いや。もう夜？」

寝そべったまま大きなあくびをして、伊奈帆はごしごしと目元をこすった。そしてがばり、と
身を起こしベッドから飛び降りると、明かりをつけて慌ただしく身支度を始めた。

「こうしちゃいられない、早く服を着て」

「どうして？」

ベッドから足を下ろして聞くと、シャツやら下着やらがぼんぼん飛んできた。よくわからない

まま、それらを身に着ける。伊奈帆は陸に降りるときにしか着ない派手なコートを羽織り、懐中時計を懐から取り出し時刻を確認した。

「散歩しよう」

「散歩？」

スレインが釦を留めながら聞き返すうち、伊奈帆は水差しの水を硝子のグラスに入れて一気に飲んだ。

「港に着いたんだ。たまには地面の上を歩こう」

「でも」

着替えを終えたスレインが何か言う前に、伊奈帆はスレインの肩に黒い外套を被せた。胸元の紐を几帳面に結び、満足そうに頷く。

「もう十二時を回った。夜は短い。早く行こう」

「…わかった」

差し出された手に手を重ねると、伊奈帆はにこりと笑ってその手を引いた。船室のドアの外、見上げれば一面の星空が広がっていた。

手を引かれるままに船を降りて、砂浜を歩いていく。遠くの方にぼんやりとした明かりが見えた。風に乗って微かに弦楽器の音が聞こえる。

「音楽だ……」

「お祭りなんだってさ」

光と音から遠ざかるように、砂浜を歩いていく。海岸の斜面を登った先の丘には草原が広がっていた。

ネモフィラの花が咲き乱れ、幻想的な光景だ。花畑は天上の絨毯のようで、どこか懐かしい音楽が風の音とハーモニーを奏でる。伊奈帆は振り向いてスレインを見た。スレインは穏やかな顔で、可憐に咲き誇る花々を眺めていた。時折頬を撫でる風に目を細め、気持ちよさそうにしている。三日月が青白く闇夜を染めていた。

なんと美しい夜だろうか。伊奈帆はしばし見蕩れた。ふとスレインが伊奈帆に顔を向け、視線がかち合う。伊奈帆はかと頬が赤くなるのを感じて、ぶっきらぼうにスレインの手を引く張った。

「踊ろう」

「え？」

スレインは意外そうに目を丸くしたが、伊奈帆の顔を見て困ったように笑い、一礼した。優雅な仕草で肩に手を置かれ、伊奈帆はどぎまぎとスレインの腰に手を添えた。微かに聞こえる民舞曲に足を乗せる。

足元で薄青の花びらが舞い、馨しい香りが夜に踊った。

スレインはぎこちなく足を動かす伊奈帆の手を背に回して、ゆっくりとステップを踏んだ。遠い昔、青い空の下でこうやって誰かと踊ったことがあるような気もするが、霞みがかかったように朧げな記憶だ。でも自分は、その人のことをとても大切に思っていたはずだった、とスレインは目を閉じた。

ターンの度、薄くて軽い布でできた黒いマントの裾がふわりと広がった。随分いい服を仕立てたものだ、とスレインは苦笑いした。

「…上手いね」

伊奈帆が拗ねた子どものような顔でそう言うものだから、スレインは声を上げて笑った。

「お前が、下手なんだ」

「言うね」

伊奈帆も笑った。スレインは、伊奈帆は本当は海賊なんて向いてない。どこかの田舎で、こうやって下手なダンスをかわいらしいお嬢さんと踊るのがいい。小言を言いながら、村の子どもに字を教えたりするのが似合うのだろう、と思った。

「どれくらい、たぐさんの人と出会った？」

伊奈帆がぼつりと聞いた。気がつけば、音楽はもう聞こえなくなっていた。二人は弧を描いてゆつくりと立ち止まる。伊奈帆はスレインの両手を握った。伊奈帆の手は、少しがさがさして、指先が冷えていた。

握り返すと、一層強く握られた。

「忘れるくらい」

「…こうして、君の手を握った人は何人くらいいたのかな」

握る手に力が籠り、どくどくと血の流れる感触が伝わった。

「…忘れるくらい」

静かな草原に、風と波の音が唸る。明かりがいつの間にか見えなくなっていて、三日月の青白い明かりの下でスレインは伊奈帆の顔を見た。

「ダンスをしたの？」

真摯に向けられるオレンジ色の視線から目を逸らし、足元を見る。花が散り、踏みしめられた草の匂いが濃く香った。

「…いろんな場所で」

きつと、傷ついた顔をしている、とスレインは目を閉じた。これまで出会った人はみんなそうだった。

「…でも、みんな死んだ」

顔をあげて、伊奈帆を見る。交錯した瞳は優し気に細められ閉じられた。伊奈帆が口を開いた。思いつめたような声が告げる。

「ねえ、僕が死んだら、君はどうする？」

それを聞いて、きつとその後には誰か、次を見つけるんだろう、と詰る言葉が続くのだとスレインは思った。これまでずっとそうだったからだ。しかし伊奈帆はそう言わず、首を振って笑った。

「ごめん、変なことを聞いた。船に戻ろうか」

精一杯明るく発せられたその声に心が跳ね、こんな人間だった頃みたいな気持ちになるなんて、とスレインは胸を押さえた。両手で、肌に食い込むくらい掻き抱く。そうしないと、何かが

溢れて来そうだった。伊奈帆が、また左手を差し出した。その手を握る。ぐっと力を入れて握り返された。

「…うん」

二人で、手をつないで歩く。伊奈帆の手の平は温かい。血の通った、人間の手だ。スレインが
とうの昔、失った手だ。

「伊奈帆」

砂浜を歩く。二人分の足跡が次々に波にさらわれ消える。その様はまるで自分の記憶のようだとスレインは思った。はつきりと思い出せないことばかりだ。愛した人はいた。そのために命を失った。しかし、もう遠すぎた。

伊奈帆のことも、いつか忘れてしまうのだろうか。この幸せな夜のことも。

「僕は、伊奈帆が好きです」

伊奈帆の歩みが止まった。戸惑いをいっばいにして振り向いた顔に、スレインは微笑む。

「伊奈帆に殺されてもいい」

そう言うのと、どうしてだか目が熱くなって涙がこぼれた。止まらないそれを伊奈帆の指が拭い、腕を取られてそっと体を引き寄せられる。頬が触れ合い、耳に息がかかった。

「…うん。僕も」

ゆっくりと唇が重なった。キスをするのなんて、いつぶりだろう。スレインは失われた記憶の中を探ろうとしたが、深く深く交わされる口付けに思考は溶かされていった。永遠にこの時が続けばいいのに。何かが満たされていくのを感じた。

船に戻ると、二人は靴を脱いで同じベッドで眠った。スレインは人間の柔らかさと温かさを感じた。伊奈帆には、人間のまま生き、人間のまま死んでほしい、とスレインは思った。

「昨晚、甲板で幽霊を見た」

背後から話しかけられて、航海士のマズールカは振り返った。見ると、最近乗船した男だ。男は顔を近づけてきた。

「幽霊？」

臭い息に仰け反りながらマズールカは聞き返す。こくこくと男は大きさに首を振った。

「真っ黒な服で、足音もなく歩いていた。青白い、不気味なほど綺麗な顔をして…」

大げさなジェスチャーを交えて語られる新入りの話に、マズールカは一步下がってああ、と大きく頷いた。

この船の乗組員は、大きく二種類に分けられる。まずは、伊奈帆の昔馴染みだ。船大工に船医にろくに働かない戦闘員。海賊になる前からの付き合いで、彼らは伊奈帆の人間性をよく理解しており、海賊になった、ならざるをえなかった理由も知っている。残りは、海賊船スレイプニールの来光にあやかろうという最近入った船員だ。功名心が強く、粗雑で、実に海賊らしい思考回路をしている。だから伊奈帆と馬が合うはずもなく、彼らは前々から船長に対して不満を抱いていた。どうして、奪わないのか、犯さないのか、殺さないのか。海賊の自分はそれだろう、と。マズールカは昔馴染みというわけではないが、乗船してからもうずいぶん経つ。船長である伊奈帆のことは利害関係を棚に上げることができるくらい、信用しているし気に入っている。だからこの船に乗っているのだが、最近は浅薄なやつが多くなったな、とため息をつくことも多くなっていた。この新入りもその原因の一人だ。

「ああ。それは、船長のペットだ」

「ペット？」

「いつぞや、海の上を歩いていたのを拾った。もう、どれくらいになるかな…半年ほどになるか。

船長がいたく気に入って、船長室で飼っているのさ。…ヴァンパイアだ」

「ヴァンパイア？嘘だろう？」

男が素っ頓狂な声を上げた。マズウルカはしいっと人差し指を立てる。どこで誰が聞いていないとも限らない。あのヴァンパイアの話はこの船ではタブーなのだ。

「どうやら本当らしい。確かめたわけではないが」

「血を吸うのか？」

男は一層興味を強めた様子で聞いた。

「さあ。船長が血をやってるんじゃないか。どう言いくるめたのかは知らんが、無害なものだ。昼間は眠っていて、姿を見るのは時々ふらりと夜風にあたりに出る時くらい。…その時、船長はいなかったのか？」

「いなかった」

ふうん、とマズウルカは意味ありげに笑った。

「寝てたのかな。夜は船長のお相手をしているよ」

「お相手？…おいおいまさか」

「それが本当なのさ。一度壁に耳をくっつけて聞いてみるといい」

「本当か？」

「港に着くと、連れ立って出かけることもある。ご執心だよ」

「相手は化け物だろう？」

「人間と変わらんくらいさ。それに、すごい美形だ。その上床上手ときたら、あの傾倒ぶりもわからんではない。まあ、度が過ぎているとは思うが……」

「へえ。一度お相手願いたいもんだ」

男が舌なめずりするのを見て、口を滑らせてしまった、と慌ててマズールカは制した。

「……おいおい、変な気を起こすな。船長に殺されるぞ」

「あの船長が？」

子どもみたいな顔をして、と言いかけ男はもごもごと口を閉じた。マズールカは渋い顔を作る。余計なことを言ってしまった。こんな話をするつもりではなかったのに。

「お前は船長のことを知らないからな。恐ろしい人だよ。とにかく、これは忠告だ。あのヴァンパイアに手を出すんじゃないぞ」

カシャン、と錠の上がる音がして、船長室のドアが開いた。真っ暗な室内に目を瞬かせながら、

男は扉からの光源を頼りに足を踏み入れた。

数日前、マズールカにヴァンパイアのことを聞いたあの船員だ。彼は好奇心に駆られ、船長の留守にその化け物を一目見ようと忍び込んだのだった。港に着き、船長は宝や航路のため海軍へ出かけていた。他の乗船員も、それぞれの持ち場で仕事をしている。船は手薄だった。まだあまり船長のことを知らないこの男は、わくわくとした心持ちでベッドに近づいた。掛け布が人の形に盛り上がっている。

これが、船長のペットか。

ベッドサイドに立ち、音をたてないようにそうと中を覗き込む。ベッドの主は仰向けに眠って、かけ布が裸の肩まで捲れていた。左手は耳の横で軽く握られている。右に向いた顔は安らかに、静かな寝息を立てていた。唇が少し開いて、前歯が覗く。暗闇でも滑らかな肌に長い睫毛と豊かな髪が影を落とし、濃い陰影は美しい顔立ちを妖しく際立たせていた。剥き出しの鎖骨は華奢で、首はあまりにも白く繊細だった。掛け布からかすかに覗く胸元には色の違う部分があり、古傷だろうそれは見るものに嗜虐心を煽るアクセントのようだった。ヴァンパイアの美しい寝姿に、男はしばらく呆けて立ち尽くした。

男は興味本位でのぞき見をしようと思ったただけだったのだが、眠るヴァンパイアがあまりに

美しかったので、思わずその赤い唇をなめた。柔らかい唇は甘くて、熟れた果実のような匂いがした。男は夢中で唇を食った。口内は甘く熱く、吸い付く度に背中に快感が駆け上がり、脳が痺れるような感覚がした。ヴァンパイアはまだ起きない。男は理性を失い、次の欲求を満たすため、かけ布を剥ぎ取って白い裸体に覆いかぶさった。足を開くと、誘うような香りが濃くなった。男は傷痕の残る白い肌を舐めまわしながら、自身の下衣を脱ぎさった。

迂闊なことに、男はドアを閉めずに事に及んでいた。傾いた日の光が隙間から細く差し込み、ベッドの上まで伸びてきた。

光がヴァンパイアの素足に当たり、じゅつと音がして焦げ付くような臭いがした。それまで無抵抗だったヴァンパイアの瞳がかと見開き、牙が伸びた。男は夢見心地のまま、目を覚ましたヴァンパイアに喉笛を食いちぎられて絶命した。

その後、異変に気付き次々集まってきた船員たちは、船室の惨状を見て急いで伊奈帆を呼びに行った。海軍で提督と話をしていた伊奈帆は、大急ぎで船に駆け戻った。

「船長！」

船長室のドアの前に、人だかりができている。彼らは船長の帰還に道を開けた。伊奈帆はガチャリと取っ手を回し船室のドアを細く開けた。肉が焦げ匂いと、血の匂いが籠っている。ひどい

匂いに顔を顰めて体を滑り込ませ扉を閉めた。ベッドから、規則正しい寝息が聞こえた。

ランプの灯を灯し、室内を見渡す。ベッドの上でスレインが眠っていた。足と顔の肌が黒く焼けている。伊奈帆はその顔をそっと撫でた。焼けた傷は爛れてねばつく。ベッドは血で赤黒く染まり、襦袢布のまわりついた骨や肉片がそこらじゅうに散乱していた。

船長の留守に寝込みを襲うなど万死に値するが、報いは受けたようだ。血を吸って染まったスレインの髪を撫でて、これは掃除が大変だ、とバケツとモップを取りに行くため伊奈帆は船室を後にした。

この一件は、乗組員たちを困惑させた。無害だと思っていたヴァンパイアが、仲間の一人を食い殺したのだ。それでも手放さない船長に、反感を抱くものもいた。次は自分の番ではないか。船員たちの不安は大きくなっていった。事実、血も足りない。伊奈帆は決断した。

どのくらい、眠っていたのだろう。

スレインは目を閉じたまま覚醒した。波の音がする。インクの匂いと古い紙のにおい。ゆっくり瞼を開けると、ランプの温かい光で部屋は満たされていた。たくさんの本と覆いのかけられた

窓。今ではよく知った部屋だ。視線を彷徨わせると、彼がデスクで何か書き物をしている。これは現実の出来事だろうか。

「伊奈帆」

名前を呼んでみた。彼ははっと顔を上げ、立ち上がった。靴音を鳴らせて近寄ってくる。穏やかな表情にほっとする。伊奈帆は生きている。よかった。なんだか嫌な夢を見ていた気がする。「起きた？気分はどう？」

伊奈帆がベッドサイドに屈んで聞いた。スレインは、自身の体が全く軽いことに驚いた。ヴァンパイアになってから、いつも腹を空かせている。餓死寸前の状態で生きながらえているので、体はいつも鉛のように重い。眠っているときだけ、空腹を忘れている。しかし今は空腹であるにせよ、生死に関わるほどではなかった。

「……いい」

肉を食い千切り、骨を噛み砕く感触が生々しく口の中によみがえる。記憶は定かではないが、人間を食べたのだろう。おそらく船員の一人だろうが、悪いことをした。そう思うと同時に、伊奈帆でなくて良かった、と思った自分に嫌気がさした。伊奈帆は身を起こそうとしたスレインの背中を支え、肌に触れた。頬と素足を撫で、焼け爛れていたんだよ。もうすっかりいいみたいだ。

と言って、伊奈帆は立ち上がる。

「外に出る？いい風が吹いてる」

「…うん」

スレインが頷くと、伊奈帆は穏やかな瞳を細めた。

服を着て、二人で船長室を後にする。船員は見えるところには誰もいない。後甲板のブルワークに寄りかかる。波が少し荒い。潮風が頬を掠めた。少し肌寒い、良い風だ。前と、月の形が変わっている。

「下弦の月だ…」

「君は七日寝ていたからね」

伊奈帆は遠くを見ているようだった。水平線は、闇に溶けて見えない。スレインはざわつく胸を両手で押さえる。伊奈帆が何も言わないのが、恐ろしい。

「…伊奈帆」

伊奈帆はスレインを見た。向けられた静かな瞳からは、感情は読み取れなかった。

「何？」

スレインは両手を胸の上で握った。人ではない心臓が脈打ったような気がした。

「その、よく覚えていない。教えてくれ」

風が止んだ。耳が痛いほど静かだ。

「僕は、人を食べたのか？」

「…」

長い間、二人とも何も言わなかった。また風が吹き、波が船を揺らした。伊奈帆は合わせていた視線をふっと外して、再び前方の海を見つめた。

「…覚えていないなら、それでいいんだ」

それは、食べたということなのだろう。どのように処理されたのかはわからないが、以前は甲板にいた船員たちが見当たらないことから、スレインは伊奈帆の立場が良くないことになったらしいと理解した。

「…でも」

「お腹すいてる？」

言葉を遮られた。スレインは伊奈帆の横顔を睨んだが、何も言わずに俯いた。

「…」

伊奈帆は半身を向けた。冷静な瞳でまっすぐに見据えられる。スレインはその瞳を懸命に見つめ返した。伊奈帆が口を開いた。

「全然、足りないんですよ」

「…与えられる以上を欲しいとは思わない」

スレインの頬に、伊奈帆の手の平が触れた。優しい手だった。いつの間にかこんなに近くにいたのか、目の前に伊奈帆の橙色の瞳が迫っている。額がこつんと触れ合い、伊奈帆は固く瞼を閉じた。

「…君を失いたくない。そのためなら、僕は…」

消え入りそうな声に、スレインは右手を持ち上げ伊奈帆の髪を撫でた。丸い頭蓋に沿って、少し硬い髪に指を通す。伊奈帆はスレインのために、何かを決断しようとしている。それは破滅へ向かう道、闇に覆われた道に思えた。しかしスレインには、その運命を打破するために、彼と死に別れる決心はつかなかった。

それから、スレインの「食糧」を調達することが船員の仕事の一つになった。

貢物の数々を船に積み込み、訪れた土地では略奪、強奪を働く。宝物の何割かを海軍へ献上し、ヴァンパイアに食わせる奴隷を船に次々積み込んだ。実に海賊らしい仕事だ。それまで、義賊的で一部の民衆に人気のあった海賊船スレイプニールは、残虐非道な海賊として悪名を轟かせるようになっていった。

縄で繋がれた奴隷たちが乗船するのを、甲板から眉を顰めて見ている男がいた。

「また、ずいぶんたくさん乗せるんだな」

カームは、船長の伊奈帆とは長い付き合いになる。今では他の船員の手前船長と呼んでいるが、もともとはお互いに名前で呼び合う近しい間柄だった。

「生き血を吸るヴァンパイアか」

伊奈帆が自室でヴァンパイアを飼うようになって、もう一年になる。半年前船員の一人が食い殺された事件から、この船は常に奴隷を乗船させるようにしていた。彼らは数日おきに連れ出され、一人ずついなくなる。

カームは船内通路を歩き回る。もう点検は済み、修理が必要な箇所は既に直した。食堂の壁の、

汚れが染み込んだ塗装を撫でる。この船でカームは伊奈帆と海に出た。オレンジ色の目立つ塗装も、無茶の利く船体も、愛着がある。故郷を失った彼らには、帰る家のような船だった。

カームは、小さな扉の前で立ち止まった。そと扉を開ける。かつては小さな物置部屋として使われていた部屋だ。今は内壁が六面全て血で染まり、乾いた血が層になって剥がれ、床に血の粉が積もっていた。あれの食事室だ。ドアを隔ていても船内に響き渡る生々しい叫び声と骨を砕く音が、もう耳にこびりついている。

「たまんねえなあ」

カームは、扉を閉めてため息をついた。船が出るまではまだ時間がある。かわいい女の子を捕まえて食事でもしよう、と町へ繰り出した。

カームが町で食事にありついていた頃、上甲板では暴拳が起きていた。船長の行動に不満を持つ数人の船員が、船長とヴァンパイアにいる船長室に押し入ったのだ。

「用件は？」

伊奈帆が抜き身のサーベルを構え、鋭く聞いた。船員たちは武器を持っている。長くはないが短くもない、数年来の部下たちだった。彼らは扉の中に体を滑り込ませると、用心深くドアを閉

めた。一人がドアノブを握ったまま立っているのを伊奈帆は視認した。

「その化け物を殺します」

一番年長の男が伊奈帆にナイフを向けて言った。ベッドでスレインは眠っていた。決して起きないだろう。生きる年月が長く、多くの人間を摂取したヴァンパイアほど、純血に近づいていく。日中の眠りが深いのは、それだけ特性が強化されたということだ。一人で片をつける必要がある。伊奈帆がサーベルを振り上げると同時に、手下の一人がナイフをスレインの顔に振り下ろした。

「無駄だ」

伊奈帆は目の前の男の腕を切り落とし、飛び上がった。そのまま、スレインの傍で茫然と立ち尽くす男の腕も落とす。痛みに叫び声が上がった。まだ三人いる。年長の男が叫び声をあげながら、伊奈帆に飛びかかる。スレインはナイフを顔に突き立てられながらも、目を覚ますことなく眠っていた。

「…船長！あんたは悪魔だ！その化け物に魂をやったんだ！」

「これ以上スレインを傷つけるな。殺すよ」

船員たちの視線が、伊奈帆の背後に集まる。伊奈帆はスレインの頬に深々と刺さったナイフを引き抜いた。傷がみるみる塞がって、血が止まり、消えた。船員たちが真っ青な顔で武器を構え

た。

「化け物め！」

片手を失った男が伊奈帆に飛びついた。勢いを殺し受け流す。そして一斉に、他の船員たちが襲い掛かってきた。伊奈帆はサーベルを振り、船員たちを目にも止まらぬ速さで切りつける。

「化け物を連れ出せ！」

リーダー格の男が我が身を捨ててサーベルに飛びつき、伊奈帆は動きを封じられた。傷だらけの船員たちが死んだように眠るスレインを引き摺りドアへ向かった。ドアノブが音を立てて回る。

「やめろ！」

伊奈帆は腰の短剣を組みかかる男の喉笛に突き刺し、引き抜く。噴水のように勢いよく血が噴き出した。もったいない、と頭の端っこだと思いながら、伊奈帆は床を蹴ってドアへ向かった。先を行く船員の一人が、伊奈帆の腰にとびかかる。さつきドアを開けた男だ。伊奈帆は男の耳にナイフを突き刺し引き抜いた。開け放したドアの向こうで、赤い炎が天高く上がった。

甲板の天日の下に連れ出されたスレインは、日の光を浴びた瞬間発火した。炎の渦がぐるぐると円を描いて広がり、一面に火の粉が舞い上がった。甲板にいた船員たちが混乱して右往左往し

ている。伊奈帆は炎の中に飛び込んだ。伊奈帆の体も炎に包まれ、服が焦げ肉が焼けた。目を開けていられない。

「スレイン！」

スレインは火だるまになっているが悲鳴一つあげない。伊奈帆は蹲るその体を抱え上げて駆け出した。服や肌に火がついて、痛いし臭いし死にそうだ。階段を転げ落ちて、もう一つ階段を転がる。台所だ。スレインを甕に沈ませる。じゅうっと音がして嫌な臭いと煙が室内に満ちた。甕から引き出して、体が壊れないように床へ寝かせる。

「痛い……」

自身も甕に頭から飛び込み、火を消す。そこら中がひりひりと痛い、服で覆われていたところはそれほどひどくはなさそうだ。甕を飛び出し、スレインに覆いかぶさる。火は消えたが、スレインの肌は一部炭化して顔も体も真っ黒だった。手足の先が、水を含んだ角砂糖のように形を失いはじめた。

「スレイン……！」

名を呼ぶと、体が微かに動いた。もう手も足も指が溶けてなくなっていた。伊奈帆は恐慌をきたし何度もスレインの名前を呼んだ。

「そうだ、血を…！」

伊奈帆はナイフで腕を切り裂き、スレインの顔、口のあたりにかざした。どばどばと流れ落ちる血は崩壊の速度を緩めはしたが、それでもスレインの体は崩れ続けている。もう肘と膝のあたりまで形を失っていた。

「どうしたらいい！スレイン、どうしたら！」

伊奈帆がスレインの顔を両手で包んで泣き叫んだ。スレインの瞼が開いた。伊奈帆はその瞳を覗き込む。ぎらぎらと異様な光が宿っていた。ヴァンパイアの目だ。何か言おうとしている。口元に耳を近づける。

「め…」

「め？」

「め…を、く…ば…」

「目？目で助かるの？」

伊奈帆は迷いなく自分の左眼窩に指を突っ込み、眼球を勢いよく引き出した。纏わりつく神経や血管を、血塗れのナイフで断ち切る。痛いとかそんな感覚は、彼を失うかも入れないという凄まじい恐怖が凌駕していた。自身も瀕死になりながら、ぜえぜえと息を切らせて伊奈帆はスレイ

ンの黒く変色した口をこじ開け、自らの眼球を詰め込んだ。そして両手で頭頂部と顎を動かし、咀嚼させた。真つ黒な唇がクッキーの欠片のようにぼろぼろとひび割れ崩れ落ちた。スレインの口から、ぷちゅ、ぴゅ、と気色の悪い音がした。

「ほら、飲み込んで」

左眼窩から夥しい血を流しながら、伊奈帆はスレインの頭を揺らした。上甲板の惨状に慌てて駆けつけた他の船員たちは、あまりの光景にその場で吐いたり、階段を駆け上がっていった。

「スレイン、死なないで」

伊奈帆はそう言うと、気を失ってスレインの胸の上に倒れ込んだ。スレインの肉体はそれ以上崩れることはなく、少しずつ呼吸が整い始めた。船医が駆け付け、船員たちは二人を医務室へ運んだ。

「スレイン」

懐かしい声がして、スレインは目を開けた。ランプの灯りとインクの匂い。古い本の匂い。あの部屋だ。何度か瞬きをすると、視界が晴れてきた。伊奈帆の顔がすぐ近くにあった。

「目が覚めた？」

「伊奈帆…」

ベッドの脇に膝をついた伊奈帆が、ほっとしたようにスレインの頬を撫でた。スレインはぎくりとして肩を震わせた。すぐその顔。一点を凝視したまま、震える口を開いた。

「…その目は？」

左目が黒い眼帯に覆われていた。伊奈帆は素っ気なく視線を外して、何も、と答えた。スレインは伊奈帆の眼帯から目を逸らせずにいた。泣き出しそうな心地で胸を押さえた。

「…僕は、どのくらい眠って？」

「三か月くらいかな」

スレインは、自分の体に変化していることに気付いた。あれほど感じていた喉の渇きがなくなっている。伊奈帆から、食物としての人間ではない、とても良い香りがした。その意味するところを悟り、スレインは伊奈帆の胸倉をつかんだ。伊奈帆は右目を大きくして、何も言わずスレインを見た。

「僕を捨ててください」

嗚咽を漏らして泣き出したスレインに伊奈帆は立ち上がり、ベッドに座って肩を抱いた。

「スレイン」

「殺してください」

体を震わせて泣き崩れている。伊奈帆はその体を抱き寄せたが、スレインが伊奈帆の胸を押し返した。押し返した腕はぶるぶると震えていた。

「僕が、食べたんでしょう」

伊奈帆の体が強張った。重い沈黙が部屋を満たし、少しの間時計の秒針だけが動いていた。

「……いいんだ。僕があげたんだ」

押し返す手を伊奈帆は両手で包んだ。人間の手と変わりない、少し冷えた柔らかい手だった。振りほどこうとスレインの指先がもどかしく動く。激しく首を振って叫んだ。

「お願いします。死なせてください」

逃げようと仰け反る体を抱きしめる。耳元で何度もしゃくりあげる声があった。

「絶対に嫌だ」

「このままじゃあ、あなたを失ってしまう。目の次は？ 耳？ 手？ 足？ 僕は、きっと食べてしまう。最後には、何も残らない」

次の瞬間、スレインが伊奈帆を突きとばした。床を転がった伊奈帆は素早く身を起こして、スレインを追いかけた。

「スレイン！」

船室を飛び出し、海に飛び込もうと舷牆を乗り越えたスレインに伊奈帆は掴みかかった。腰に腕を回し力任せに引っ張る。二つの体がつれ合いながら勢いよく甲板に倒れ込んだ。伊奈帆はスレインの体を組み敷いて手首を床に押し付ける。そのまま二人は、ぜえぜえと荒い呼吸を繰り返した。

「馬鹿なことを…」

伊奈帆は馬乗りになってスレインを見下ろす。絶対に放すものか、という強い決意で手首を強く締め付けた。スレインの目が鋭くあがり、伊奈帆を睨みつけた。

「馬鹿はあなたでしょう！死なせてください…」

伊奈帆はスレインに顔を近づけて、小刻みに動く視線をつかまえた。

「君が死んだら僕も死ぬ。海に飛び込む」

伊奈帆の凄味に、スレインの動きが止まった。体中から力が抜けて、碧の瞳は茫然と遠くを見ていた。伊奈帆は手首を握る力を緩めた。屈んで、スレインの瞳に自分の姿を映す。

「お願いだから、一人にしないで。死ぬのなら、僕より一日でも後に死んでくれ」

スレインは顔を覆って泣き出した。伊奈帆は、その手に手を重ねた。震えていた。満月が、ス

レインを白く照らした。

夜に生きる魔性。

たった一人のヴァンパイア。永久の時を生きる孤独。スレインの絶望を想った。

「…僕も、君と永遠を生きよう」

伊奈帆は自分の襟を引っ張った。釦が飛んで、コン、コン、と音を立てて転がった。

「血を吸うといい。さあ」

スレインが信じられないものを見るように目を見開いた。

長い間、何かを探すように二人は見つめ合った。

やがてスレインが固く目を閉じ、ゆるゆると首を振った。

「…できません」

スレインは、伊奈帆の開いた襟を震える指で不器用に掻き合わせた。声も震えている

「…伊奈帆、お願いだから、もう…」

伊奈帆は、力なく胸を押すスレインの手を両手で包んだ。今度は優しく、そっと触れた。見えない心に触れるように。

「スレイン…」

スレインの指が伊奈帆の眼帯を外した。閉じられた瞼を指先がなぞった。

「…わかりました。死にません。でも、伊奈帆をヴァンパイアにはできない。わかってください」
背中を支えて起き上がらせる。伊奈帆はスレインの体を抱き寄せた。スレインは、伊奈帆の背中に腕を回した。

「…愛しているんです」

腕を緩めて、視界がお互いの顔でいっぱいになる。スレインは困ったように笑い、濡れた頬に涙がまた幾筋も流れた。

「僕の傍にいてくれる？」

涙を舐める。ヴァンパイアでも、涙は人間と同じ味がした。頬に唇を寄せ、次に瞼に、額に、鼻に、唇に。そしてもう一度強く抱きしめた。

どうしても失いたくない。笑顔が見たい。声が聞きたい。肌のぬくもりを感じたい。たとえ人間でなくても。たとえこの手が血に染まり、運命が闇へ続くとも。

「生きて。僕が死ぬまででいいから」

「…はい」

目を開いたまま、唇が重なった。舌が触れ合い、指が絡まり、影が重なる。月が雲に隠れ、影

が闇に溶けた。

それからスレインは、食事のために人間を食べることを厭わなくなった。腹が減れば、自分で狩って食べる。空腹が満たされると、青ざめた肌は白く透き通るようになり、瞳は魔性の色に輝いた。人間であることをやめたスレインは、翼を持ち、夜を切り裂きどこまでも飛んだ。その翼は岩を砕き、波を起こし、風を切り裂いた。食事と割り切った人間に対して容赦はなく、彼の通った後は骨すら残らなかった。

眼球を食べた伊奈帆とは、血の契約が交わされていた。スレインは伊奈帆の傍にいと、血を飲まなくても生気を得ることができるようになった。それによって伊奈帆の生命力が弱まるわけではなく、お互いに強めることができる。しかしそれは一時的なもので、そのための食事は前にも増して必要になった。

今夜は新月だ。漆黒の闇の中、夜よりもさらに黒い翼が近づいてくる。伊奈帆はその姿を確認して、名前を呼んだ。

「スレイン」

その名の主は伊奈帆の頭上で翼をたたみ、音もなく降り立った。仕立ての良い漆黒の衣装が良く似合っている。嬉しくて仕方がない、という風に笑い、伊奈帆の隣に並び立った。

「もう、見えてきます。呑気なものでしたよ」

「そう。好都合だ」

目深にかぶったトリコーンの下で、鋭い隻眼が光った。伊奈帆の背後には、武器を装備した乗組員がずらりと並んでいる。彼らは不敵に笑い、今か今かと出撃を待っていた。

「傾合いだ。太った豚が冷える前にいたくとしよう」

乗組員から歓声が上がった。船長！と嬉々とした叫び声が聞こえる。伊奈帆はスレインを見る。彼は静かに微笑んで伊奈帆を見返した。

「お腹すいた？」

伊奈帆がそう聞くと、スレインの目が三日月のように弓なりになり、赤い唇が弧を描いた。馨しい香りが沸き立つ。魅惑的な微笑に、それを見ていた背後の船員数人が口笛を吹いた。

「ええ、とても」

伊奈帆は思い出す。初めて出会った時。ぼろぼろの服。汚れた青白い肌。鏡の前で悲しそうに佇み、項垂れていた。正面から見た美しい顔はやつれて弱々しかったが、温かい瞳をしていた。

人間らしさをまだ残していた。彼は、何度も泣きながら人間を食べた。死にたい、と何度も言った。伊奈帆はその度、涙を拭い、血塗れの唇を吸った。罪の意識に苛まれながらも、スレインは生きることを選んでくれた。

伊奈帆の左目を与えられてから、彼は人間であることをやめた。今では、嬉々として人間の血を吸い、体が生命で満たされている。瞳は妖しく、肌は滑らかで、彫刻のような美しい顔は月明かりの下で妖しく微笑む。いつもくらくらすような香りをさせて、凍り付くような目で人間を食い殺す。しかしスレインは、伊奈帆に対しては実に人間らしく振る舞うのだ。無邪気に笑い、優しく名を呼ぶ。

そんなところが愛おしい。伊奈帆は、彼の華奢な頤を掴んでキスをした。舌を入れると、口内は甘く、痺れるようだった。船員たちから口笛と歓声が上がった。

船長、見えた！という声に海上を見ると、目的の海賊船が見えてきた。スレイプニールより大きく、頑丈で、たくさん乗っているはずだ。宝も、海図も、人間も。

「遠慮はいらない。好きなだけ食べるという」

スレインは嬉しそうに笑った。身震いして、マントが翼の形を取った。ばさりと羽ばたき、船が揺れる。一際大きな歓声が上がった。伊奈帆がサーベルを引き抜き、振り上げた。

「殲滅だ」

彼のヴァンパイアは翼をはためかせ飛び立つ。大砲の音が鳴り響く。

夜の闇からゴーストシップのように現れる海賊船スレイプニール号。隻眼の船長には、黒い死神がついている。

夜の公園

雪がしんと降る夜だった。

夜の公園は、街灯と月明かりに照らされていた。砂場の砂山にも、遊具にも、雪が白く積もり始めている。

四つあるブランコの一つに、小さな男の子が座っていた。ダウンのジャンパーとオレンジ色のマフラーをつけているが、手袋はしていない。赤い手に何度も息を吹きかけてこすり合わせていた。

今日は、遅いな。

八歳の界塚伊奈帆は、二人暮らしをしている姉を待っていた。寒くて暗い家で一人で待つのは嫌だった。できれば、二人で歩いて帰りたい。姉と手を繋いで歩くのは好きなのだ。公園の時計を見る。もう七時半を過ぎていた。

今日は雪が降ってきたから、バスが遅れているようだ。もう二時間以上も、伊奈帆はこの公園で待っている。すっかり日が沈んでいるが、電灯の光で公園の中は青白く明るかった。こんな時

間まで公園にいるのは初めてだ。

寒いから持ち手のチェーンには触らず、ポケットに手を突っ込む。足をぶらぶらさせると、ブランコの金具がキィキィと耳障りな音を立てた。

まだかな、と公園の入り口を見る。

？

伊奈帆は目をぱちぱちとさせて、もう一度しっかりと見た。

公園の入り口から少し入ったところに、外国人の男の子が立っていた。姉よりも、少し年上だろうか。白っぽい髪と肌で、冬とは思えない薄着だ。伊奈帆は、その少年がゆっくりと歩いてくるのを目を逸らすことができず見ていた。伊奈帆はその少年が裸足であることに気がついた。ぎよつとして、伊奈帆はどきどきして顔と足を交互に見た。彼はブランコの前で立ち止まり、伊奈帆を見下ろした。無表情で、何も言わない。不思議な目をしている。

怖くはなかった。伊奈帆は気になっていることを聞いてみた。

「…裸足？ 寒くないの？」

「…」

少年は何も言わず、ふっと目を逸らした。伊奈帆の隣のブランコに積もった雪を払い、腰を下

ろす。吊り具の鎖を握る手は青白かった。彼は地面を足で押し、ブランコを揺らした。

キイ、キイ、と鎖の音だけが響く公園で、伊奈帆は隣に座る少年をじいっと見た。少年は、伊奈帆の熱心な視線に気づいていないわけはないのだが、素知らぬ顔で遠くを見ている。

伊奈帆は隣の少年の薄くて丈の短い服やそこからのぞく細い腕、丸出しの首と白い素足を見て、変な人だなあ、寒くないんだろうか、と考えた。雪が少し髪に残って、金のような銀のような色の髪がきらきらと光ってきれいだった。

「なおくーん」

「あ、ユキ姉」

公園の入り口から姉が走ってくるのが見えた。伊奈帆は慌ててブランコを飛び下りて、姉に駆け寄った。その小さな後ろ姿を、ぼろ服の少年はずっと見ていた。

二週間後、界塚伊奈帆はその公園を通りかかった。なんとなく中を見ると、ブランコにいつかの裸足の少年がいた。

話しかけてみようかな。

小走りに駆け寄ると、気づいた少年が伊奈帆に顔を向けた。笑ってもいないし、怒ってもいな

い。やっぱり裸足だった。服はこの間とは違うけれど、夏物のように薄い布だ。

「…ねえ、寒くないの？」

「…平気」

返事をした。優しい声だった。伊奈帆はもう一つ聞いてみることにした。

「いつもここにいるの？」

「夜だけ」

「こんな時間に？」

今は深夜の二時だ。この間は七時半だった。夜の間、ずっとこんな寒いところにいるのだろうか。

「なんで？家に帰れないの？」

「…」

彼は困ったように眉尻を下げた。気弱そうな表情に見えて、怖い人じゃないし、変な人でもないかもしれない、と伊奈帆は思った。

「ねえ、どうして裸足なの？」

「靴を持ってないから」

「どうして？お父さんやお母さんが買ってくれないの？」

彼は目を細めて笑った。人好きのする、優しい笑い顔だった。

「必要ないから」

「…変なの」

どきどきして、伊奈帆は自分のつま先を見た。

「ねえ、名前はなんていうの？」

「スレイン」

「スレイン、へえ」

スレインと名乗った少年は、小首を傾げた。

「名前は…」

「ああ、ごめん。伊奈帆。界塚伊奈帆」

「伊奈帆は、どうしてそんな恰好をしているんですか？」

スレインが聞いた。伊奈帆は、自分の恰好を検める。レインコートと長靴で、手は泥だらけだ。

雨も降っていない深夜にこんな恰好をしているのは、確かに変に見えるだろうな、と伊奈帆は思った。

「…帰るね。ユキ姉が心配するから」

「ユキ姉？」

スレインがまた聞いた。伊奈帆はほら、前に僕と一緒に帰ったお姉さんいたでしょ、と説明する。

「僕のお姉ちゃん。二人で住んでるんだ」

「そう」

スレインが頷き微笑んだ。伊奈帆は、泥だらけの手をぐっと握って顔を上げた。

「じゃあね」

「うん」

駆けだした小さい背中をスレインは見た。公園の外へ出て見えなくなっても、消えていった方をずっと見ていた。

それから、伊奈帆は時々夜中に布団を抜け出し公園へ行くようになった。いつもスレインはブランコに座っていて、伊奈帆が来ると笑いかけてくれた。その笑顔はとても綺麗で、くすぐったいような感じがした。隣に座って、伊奈帆は好きな話をした。スレインは時々問い返したり、質

問しながら聞いてくれた。

「昨日はね、ユキ姉とピクニックに行ったんだ」

「へえ」

伊奈帆はブランコを揺らした。もう、ブランコの鎖は冷たくない。伊奈帆の学校は春休みになっていた。でも寒がりの伊奈帆は、冬物のジャンパーを着ている。

「ユキ姉の作ったお弁当を持って、電車に乗って、海に行ったんだ」

良い天気で、電車から見える景色は緑が多かった。海は風が強くて少し寒かったけれど、青い空と青い海がきれいだった。

「お弁当はおにぎりとお焼きたてで、ほんとと言うとあんまりおいしくなかったけど、嬉しかったから全部食べたんだ」

伊奈帆はスレインを見る。スレインは笑った。あたたかい笑顔だった。伊奈帆は照れくさくなつて、頬を掻いた。

「スレインは、僕が嬉しい話をすると笑うよね。なんで？」

「伊奈帆が嬉しいと、僕も嬉しい」

伊奈帆はブランコの座面に立って、勢いをつけて揺らした。スレインは座ったまま、隣でゆっ

くりと揺らしている。

「…スレインは、嬉しいこと、ないの？」

「…」

伊奈帆はスレインを見る。相変わらず裸足だけれど、服は以前より汚れて破れたりしていることに気付いていた。

お家で、叩かれたりするのかな。怪我をしているのを見たことはないけれど、スレインはこんな格好で学校はどうしているんだろう。

「そろそろ帰らないと、お姉さんが心配しますよ」

スレインがそう言うので、伊奈帆はブランコを飛び降りた。振り向いて、スレインを見る。

「ねえスレイン。明日もいる？」

「はい」

「明日も来るから、待っててね」

「はい。ここにいます」

伊奈帆は肩を竦めて、ポケットに手を入れた。スレインは小さく頷き、笑った。

「おやすみ」

「おやすみ」

伊奈帆は駆けだした。スレインはその後ろ姿を見送り、そして立ち上がった。

薄紅の花びらが雪のように舞い散る公園で、からっぽのブランコが揺れていた。先ほどまで伊奈帆とスレインが並んで座っていたのだが、スレインが舞い散る花びらをじっと見ていることに気づいて、伊奈帆が手を引いたのだった。

二人で、公園の中を歩く。伊奈帆は、スレインを見上げた。

最近のスレインは、前よりもっとひどい恰好をしている。薄手の服はほころびが目立ち、所々裂けていた。むき出しの腕や足は汚れている。裸足なのは今にはじまったことではないが、赤黒い汚れがこびりついていて、多分血だ。

大丈夫なのかな。

「綺麗な花ですね」

舞い散る花びらを手のひらで受けながら、スレインが嬉しそうに言った。髪に花びらが何枚かくっついていて、綺麗な光景に伊奈帆は見蕩れた。

「知らないの？桜だよ」

スレインは目を丸くして伊奈帆を見た。へえ、と頷いてもう一度桜を見上げる。満開だった。
「さくら…初めて見ました」

伊奈帆は、桜は綺麗だけれど、今日はなんだか少し怖い、と思った。花びらがあまりにたくさん降ってくる。その中でスレインは幻のように消えてしまいそうだった。

「桜の木の下には、死体が埋まってるんだって」

話題を探してそう言っていると、空気が張り詰めて音が消えた。桜の花びらは暴力的とも思えるような数で降り続けている。

「死体？なぜ？」

スレインの声は大きくないのに、やけにはっきりと鼓膜に響いた。スレインを見ると、真剣な顔で次の言葉を待っている。伊奈帆は少したじろいだ。

「死体の血で、白い花びらがピンク色に変わるんだって。だから、色が綺麗な桜の下には、死体が埋まっているって。…本で読んだ」

「本当ですか？」

スレインがあんまり熱心なので、伊奈帆はびっくりした。

「怪談だよ。どうしたの？」

スレインははっとして、困ったように笑って首を振った。視線を外して、右手で胸をぎゅっと握る。

スレインは時々、こうやって話を終わらせてしまう。すぐそこにいるのにすごく遠くにいるみたいで、伊奈帆は嫌だった。

もう行こう、そう言って伊奈帆はスレインの左手に手を伸ばす。引っ張ると、優しく握り返された。二人で歩く。伊奈帆は一生懸命歩幅を合わせた。

「…生き血をすすり、花を咲かせる」

何の話かな、と伊奈帆はスレインを見上げた。スレインはどこか遠くを見ているようだった。

「あの木は、それでも咲かせたいと思うのでしょうか」

何を言いたいのか、なんて答えたらいいか伊奈帆は考えた。

「…木はしゃべらないよ」

つまらないことを言ったかな、とスレインを見ると、スレインは目を閉じて笑った。貼りつめた糸のような横顔だった。視線が合うことはなかった。

「そうですね」

花びらが吹雪のように舞い遊ぶ。薄紅の花毛氈の上に、大きさの違う足が足跡を作った。

しとしとと雨が降っていた。

連日の雨で、すっかり世界中が水に浸かってしまったようだ。伊奈帆は走っていた。公園の植木に咲く青紫の群れの横を横目に、この公園は色んな花が咲くんだな、と気づいた。大きな水たまりに足を踏み入れて、飛沫が長靴の中まで入り込んだ。レインコートを着ているが、顔と手からは雨に打たれて冷たい。

さすがにいないだろう。こんな雨だ。

そう思いながらも、伊奈帆は公園の入り口に駆け込んだ。足を止め、いつものブランコを見る。

「……いた」

細い雨で白くけぶるような空気の中、スレインはいた。傘もなくブランコに座って、しとどに濡れている。伊奈帆は走った。

「スレイン！」

「こんばんは、伊奈帆」

スレインはいつもの声で言った。その髪も肌も服もバケツをかぶったように濡れていた。顎先や肘から水滴がぼたぼたと水滴が流れ落ちている。

街灯の人工的な明かりを反射して体中がてら光り、滑らかな肌と静かな微笑みはプラス

チックのマネキンのようだ、と伊奈帆はぞっとした。

「こんな雨の日に……ずっといたの？」

「ええ」

「僕を待ってた？」

「……」

スレインは何も言わずに笑った。伊奈帆はスレインの座っているブランコのチェーンを掴んだ。少し揺れて、スレインが不思議そうに伊奈帆の顔を見上げる。

「……スレインはさ、大好きな人とケンカしたことある？」

俯いた伊奈帆の長靴を、雨に混じってぼたぼたと涙が濡らした。

「……ええ」

スレインがいつものように優しく、伊奈帆はその体に抱きついた。雨に冷えて冷たかった。びしょ濡れの肩に顔を埋める。スレインは、レインコートでごわごわした伊奈帆の背をさすってくれた。

「大丈夫ですよ。仲直りできます。生きていれば、やりなおすことができます。どんなことでも、生きていれば」

夜の雨が降りしきる公園で、紫陽花の淡い色彩が浮かび上がる。

伊奈帆は何年たっても、この夜の感触を忘れることはなかった。雨の夜にはこの日の紫陽花と街灯を反射する濡れた地面、スレインの優しい手を思い出す。

スレインは、桜の木の下に立って花のない枝を見上げた。枝の間から、満月が見える。そのためか、公園は明るかった。もうすぐ春だ。桜の蕾が柔らかくなってきた。

今年も、綺麗な花を咲かせるのだろう。

「スレイン」

その声に振り向く。遠い昔に聞いた声と同じ。懐かしい声だ。今日会えてよかった。

「伊奈帆」

数か月ぶりに見る伊奈帆は、黒い学生服を着ていた。背が伸びて、もうスレインとそんなに変わらな。声も低くなり、言葉は少なくなった。

この公園で出会ってから、もう七年になる。年を経るごとに会う頻度はどんどん減っていった。

最後に会った時は、葉が赤く色づき、こおろぎが鳴いていた。スレインは成長する伊奈帆の背を見送り続け、時が止まればいいのに、といつも思ったものだった。

「それは？」

伊奈帆は黒い筒でとんとんと肩を叩き、はにかんだように笑った。

「卒業証書。卒業式だったんだ」

低く柔らかくなった声に胸が締め付けられる。

本当に大きくなった。もう、潮時はとうに過ぎていた。

「おめでとうございます」

「ありがとう。…ねえ、スレイン」

伊奈帆が複雑な表情になって言い淀んだ。珍しく、目が泳いだ。ついにこの日が来たか、とスレインは口を開いた。

「…何？」

「…どうしてスレインは、ずっと同じなの？」

伊奈帆は切羽詰まったような声で言った。もう何年も、聞きたくてしょうがなかった問いだろうと思った。伊奈帆の口から堰を切ったかのように言葉が溢れ出す。

「初めて会った時、僕は八歳だった。それから僕は小学校を卒業して、中学生になって、今日、中学校を卒業した」

伊奈帆は太股で近づき、スレインの三步前に立った。視線が交わる。橙の両眼がスレインの瞳の奥を射抜くように見つめた。

「僕は背が伸びたけれど、スレインは？初めて会った時から、まるで何も変わらない。どういうこと？」

伊奈帆がもう一步、近づく。お互いの顔しか見えない。スレインは視線を外して俯いた。靴の爪先を見る。その下の地面には、短い雑草がまだらに生えていた。

「ねえ、スレインは何歳なの？」

スレインは笑って首を振り、答えなかった。伊奈帆は苦しそうに顔を歪ませて、唇を開いた。「もしかして、スレインは僕にだけ見えている幽霊みたいなものなの？僕は頭がおかしいのかな？」

伊奈帆はさらに一步近づいた。スレインの腕に手を伸ばし、ゆっくり握る。伊奈帆の肩が上下する。よかった、さわれる。伊奈帆が心底ほっとした声でそう言った。

「ふっ、ははは」

突然の笑い声に、伊奈帆は拍子抜けしてスレインを見た。スレインは眦に涙をにじませて笑っていた。

「スレイン…」

「伊奈帆、伊奈帆は本当に頭がいい。でも、時々馬鹿ですね」

スレインは腕を掴む伊奈帆の両手を取り、握った。そして顔の高さまで持ち上げ、唇を寄せる。指先に柔らかい感触がして、伊奈帆は耳まで赤くなった。

「大丈夫、僕は生きています。ここにいます」

伊奈帆はスレインを見た。こうして近くで見るのは久しぶりだった。やわらかい髪が風に揺れ、前髪の下で濡れたような瞳が伊奈帆の姿を映しこんでつやつやと光っていた。弧を描いた唇の赤さと形の美しさに、ごくりと喉が鳴る。伊奈帆の両手を握る手はさらりとして、少し冷たく感じた。

「スレイン、生きてるの？」

「生きています。でも、人ではありません」

「人ではない？」

「ええ」

伊奈帆は、スレインの姿かたちを上から下までなぞるように視線を往復させた。

スレインは長いズボンと長い袖の服を着て、薄手のジャケットを羽織っていた。清潔で、こざっぱりとした服装をしている。伊奈帆の脳裏に、初めて出会った時の剥き出しの白い腕と裸足の足がよみがえった。いつからこんな格好をするようになったのか、思い出せない。視線を落とすと、今では靴も靴下も、ちゃんと履いているのがわかった。

「僕は、ずっと生きています。遠くから来ました」

二人は桜の木の下で向き合っていた。ミイラの腕のように茶色くごつごつと細い枝の間から、丸い月が見えた。月光でスレインの顔が青白く浮かび上がった。

「この国では、僕のことを吸血鬼というそうです」

「吸血鬼？」

伊奈帆のおうむ返しに、スレインは微笑んだ。瞳から透明な涙が一筋、頬をつたった。

「伊奈帆。僕は、ずっと君を探していた。やっと会えた」

眦から涙が次々溢れ、伝い落ちた雫が地面に沁み込んだ。スレインは両手で顔を覆ってしまった。

「スレイン」

伊奈帆はどうしたものかわからず、震える肩を抱き寄せた。骨の感触が硬くて、手の中に収まる華奢な肩だった。この肩に、顔を押しかけて泣いた日のことを思い出す。雨が降って、ぐしょぐしょに濡れていた。その時は、こんなに薄い肩をしていたなんて知らなかった。

「ずうっと前、僕は約束したんです。伊奈帆が生まれ変わって、もう一度会うまで待ってるって」スレインは伊奈帆の肩に額を押し付けた。時々小さく体が跳ねる。伊奈帆の耳の横で、髪が柔らかい感触がした。

「もう、ほとんど諦めていた。だって、あまりにも長い年月が流れた。生きるために、たくさんの人間を騙して、殺して、…この公園で小さい伊奈帆に会った時、怖くなった」

びくりと大きく体を震わせて、スレインはそっと伊奈帆の体を押した。後ずさりして距離を取り、お互いの体ははっきりと見えるところに立った。

「怖い？ どうして？」

伊奈帆は、金とも銀ともつかない髪をぼうっと見た。綺麗な色だ。月に照らされて、月と同じ色に輝いている。スレインが痛々しく笑った。

「…見てください」

そう言って、スレインは勢いよく自分の左目に右手の指を突っ込んだ。そして素早く抉り取る。

止める間もなかった。ぶちぶちと音を立てまわりつく肉を引きちぎり、握った手のひらを開いた。真っ赤な手の上で、血に濡れた丸い眼球がてらてらと光った。恐ろしい光景に、伊奈帆の聲が上擦った。

「スレイン！」

「…大丈夫」

慌てて駆け寄る伊奈帆を制し、スレインは言った。みるみる眼窩はふさがり、瞳が現れまばたきをした。伊奈帆は足がその場に縫い留められたように動くことができず、スレインの右手を見ていた。その間にも手のひらの球体は形を失い、赤い雫となってこぼれ落ちた。それも、地面に落ちると色を失った。

「め、目が…」

言葉を失って立ち尽くす伊奈帆の前で、スレインはまた一歩後ろへ下がった。

「ほら。…化け物、でしょう。伊奈帆。僕は」

スレインは喝いた声で笑った。伊奈帆はとも聞いているなかったが、動くことができなかった。スレインはひとしきり笑うと数度咳き込み、そして俯いた。

「…あなたに会ったのは、会い続けたのは、間違いでした」

夜の公園で、並んでブランコに乗る。たったそれだけの関係。毎日ではなかった。伊奈帆には昼間の生活がある。スレインのことを忘れかけたこともあった。中学生になってからは、来る足も遠のいた。生活が変化したし、この関係が少し怖くなったのだ。思春期になり、スレインと何を話せばいいのかわからなくなったということもあった。

でも、伊奈帆が気まぐれに訪れるといつだってスレインはいた。雨の日でも、雪の日でも。スレインはブランコに座って、小さく揺り動かしていた。いつも一人だった。スレインは伊奈帆の姿を見つけると、控えめに、そして幸せそうに笑った。

いつも、待っていたのだ。

「本当なら、初めてあなたを見た時、さっさと死んでしまうのだった」

肌の血がいつの間にか消えている。服に飛び散った赤い染みの他は、狂気じみた行為を思い出させるものはなくなっていた。夢だったのかもしれないと思うほどに。

「でも、どうしてもあなたに会いたくて。…大きくなった伊奈帆に会いたくて。ずるずると、ここまで来てしまいました」

スレインは愛おしそうに目を細めた。伊奈帆は、スレインのこんな顔を見るのは初めてで、それがとても綺麗で、何か言いたいんだけど言葉にならず消えていった。

「ごめんなさい」

伊奈帆はようやく動くようになった足で、一歩一歩スレインに近づく。スレインは、目の前で立ち止まった伊奈帆の頬に触れようと手を伸ばし、慌てて手をひっこめた。

「よく、似ている。目も、顔も、…声も」

スレインは、伊奈帆を通して誰かを思い出しているようだった。

「ねえ、さっき約束って言ったけど、なんのこと？」

スレインの涙に濡れた顔を見上げ、いらいらと変な気持ちになりながら、伊奈帆は聞いた。スレインが数度瞬きをして、体の向きを変えた。白く繊細な指がブランコを指さす。

「…座りましょうか。長い話になりますから」

数え切れないほど何度も座ったブランコで、伊奈帆は思い出していた。初めて会ったのは、確か冬だった。ユキ姉の帰りを待って、長い時間ここにいた。いつもなら家で待つのだが、その日は学校で嫌なことがあったのだ。一人で家にいたくなかった。たまたま雪でバスが遅れて、夜まで待っていた。そうしたら、スレインがそこに立っていた。それからというもの伊奈帆は、スレインは伊奈帆に会うために公園へ足を運んでいたと思っていた。でも今になって、スレインはも

しかしたら、伊奈帆と出会うもうずっと前からこの公園に来ていたのかもしれない、と思いついた。

どうしてだろう。

「僕はもうずいぶん昔、人間でした」

スレインが語り出した。伊奈帆はその声に耳を澄ます。優しくて穏やかで、少し甘い。大好きな声だ。

「北欧の田舎町で、平凡に育ちました。両親と、幼馴染の女の子。幸せだった」

伊奈帆は、幼い頃のスレインを想像した。絵本の中に出てくるようなかわいらしい子どもと、幸せそうな家族像が頭に浮かぶ。北欧は寒いところだというけれど、伊奈帆は花の咲く草原を思い浮かべた。スレインの声が続ける。

「ある日、僕は死にました。十七歳でした」

あまりに早い死に、伊奈帆は驚き顔を向けた。そうか、言われてみると、スレインの外見はそれくらいだ。死んだときの年齢で、成長が止まったのだろうか。

話に入り込んでいる自分に気がついた。

「どうして、死んだの？」

伊奈帆の問いに、スレインは口を変に歪ませて自嘲するように口角を上げた。そんな顔は初めて見たし、全然似合わないと思った。

「悪いことをしました。多くの人を騙して、殺して、奪った。僕は処刑されました」

「まさか」

大きな声を出して、伊奈帆は立ち上がった。優しいスレインがそんなことになるなんて、想像できなかった。スレインは静かに首を振った。

「本当です。しかしどうしたとか、墓の下で目が覚めました。喉の渴きを覚えて、無我夢中で棺を開け、土を掘りました」

細い月が出て、星が降るように瞬いていた。埋葬されていたのは墓地の一番端で、周りには墓はなかった。ゆらゆらと、何かに取りつかれたように歩みを進めた。そして、明かりが見えた。

「その日僕は、墓守を二人食い殺しました」

我に返ると、自分の体は血まみれで、夥しい血と肉片で地面が恐ろしい色になっていた。口の中に固いものがある、吐き出すとそれは人間の指の骨だった。スレインは走った。日の出近くに、山の中の岩穴にもぐりこんだ。体は寒くもないのにがたがたと震えて、体の中が熱かった。体がおかしいことに気がついた。

「どうやら、ヴァンパイアとなつてしまつたようだと悟りました。そのまま氣を失うように眠つた。夜、僕は生まれ育つた村へ行くことにしました」

何日かけて歩いた。地形が記憶と變つてゐることに氣づく。嫌な予感がして、足を速めた。村があつた場所にたどり着いたはずだつた。

「村は、もうなかつた」

大罪人の生まれ故郷は焼かれ、長い年月が経つていた。村があつた場所には、赤、黄色、紫、ピンク、橙……色とりどりの花が咲き乱れていた。スレインは闇夜の中、歩き回つた。幼い頃、両親と過ごした家。幼馴染と踊つた広場。お祈りをした教会。それらは、もうなかつた。

「小高い丘に、妻だつた人の墓が朽ち果てながらも残つていました」

伊奈帆はえっ、と声を上げた。スレインが結婚してゐたなんて思つてもみなかつた。

「それほど愛してゐたわけではありません。政略結婚でした。でも、彼女は僕のことを愛してくれて……僕は、彼女をひとりぼっちにしてしまいました」

白いヒナゲシのような可憐な少女だつた。抱き上げた体の軽さと、小鳥のような笑い声を出す。さみしい人だつた。たった一人で、どのように死んだのだろうか。

「かわいそうなことをした」

村を去ったスレインは、行く当てもなくさ迷った。人など食いたくはなかったが、空腹に襲われると我を忘れ、貪るように人を食べた。人里から遠ざかろうと歩みを進めた。しかし人のいない場所ではなかった。

「憎まれ、怖がられ、中には愛してくれた人もいました。その中の多くの人を、僕は食べました」
捕らえられ、飼われることもあった。売られたことも、見世物にされたこともあった。ささやかな幸せを願い一緒になろうと言ってくれた人もいた。そんなときが一番悲しかった。

「ある日、もういいかと思いました。腹はすいていたけれど、もう人間を食べる気にもなれなかった。昔のように青空を見たいと思って、歩き出しました」

美しい思い出は、いつも青い空とともにあった。両親とピクニックに行った日、初めて好きな女の子と踊った日、告白をした日、別れの日、鳥を見た日。隣にいたのは、誰だったろうか。

「知っていますか？吸血鬼は日の光を浴びると、燃えてしまうのです。火事になっては大変ですし、海で死のうと思いました。海は好きでしたから」

半月の、静かな夜だった。波はなく、海面は容易にスレインの足を持ち上げた。月に向かって歩き出した。

「風もなく、穏やかな海の上を歩きました。いろいろなことを思い出しました。村の祭りや、お

父さん、お母さん、初めて好きになった女の子のこと……。その人は奥さんではなかったですけれど。月の光が柔らかく降り注ぎ、波はきらきらと揺らめいていた。そのままどこまでも歩いた。生まれて初めて、自由な気持ちになった。いつしか、霧が濃くなってきました」

霧で月も星も遠くなった暗闇の中、スレインは立ち止まった。風が髪を揺らした。

「夜明けを待って水平線を見つめていたんです。そして気がつく、僕の体には投網が巻き付いて、海賊船の甲板の上になりました」

海面から引き上げられて、床に押し付けられた。咳き込んで海水を吐き出していると、何人もの船員が体に纏わりついた網を器用に取り去った。

「霧が濃くて、船に気がつかなかった。空腹のまま何時間も歩いて、くたくただったしね」

朦朧とする意識の中、船員たちに羽交い絞めにされ、縄で縛られた。抵抗はする気もなかったし、そんな力はなかった。

「僕の前に、君が現れました」

「僕が？」

船員たちが道を開けた。海賊特有の派手なフロックコートを着て現れたのは、意外にも小柄であどけない少年だった。

「君よりもう少し、大人だったかな。でも初めて見た時は、子どものような顔をしていると思いました」

スレインの轡を取り、名前を聞いた伊奈帆。好奇心で瞳が輝いていた。スレインが名を告げると、新しいおもちゃを見つけた子どものような顔で笑った。

「伊奈帆は海賊船の船長でした。変わった人で、僕のことを面白がっているようだった。故郷に送りとどけてもいい、と言ってくれた」

スレインはその言葉がとても嬉しかったことを思い出す。本当に優しい言葉だった。それが余計に悲しかった。

「でも、僕には帰る場所なんてどこにもなかった」

かつて二人で言葉を交わした船長室を思い出す。鏡に映らない自分を何度も確認した。伊奈帆はそれを黙って見ていた。

「すると彼は、船に乗らないかと。そして、肉を割いて僕に血をくれた」

金の盃に満ちた彼の血。その味を、香りを、夢のように思い出す。

「愛してくれた。僕のためにたくさんの人間を殺して、血をくれた。僕が死になくなった時、自分の目をくれた」

正義感が強く純朴だった若い船長は、スレインと出会い運命を狂わせた。その手を血で染め上げ、残虐非道な海賊として、いろいろなものを手放し、伊奈帆は生き抜いた。スレインはずっと傍にいた。

後悔を忘れるほど、幸せな日々だった。

「彼が年老いて死ぬまで、五十年くらいかな。僕はずっと一緒にいた」

あんなに長い間、一人の人間と生きたのは初めてだった。今でもその記憶は色あせることはない。スレインは伊奈帆との日々を鮮やかに思い出す。

「伊奈帆は死ぬ時、生まれ変わったらまた会いたいと言っていたから。…僕は生きることにした」
年を取っても、子どものような目をして笑った伊奈帆。スレインは、かつての伊奈帆が死んだことで死ぬことをやめた。伊奈帆に再び出会うために、スレインは人を食べ、人を騙し、人の心を利用して長い年月を生き続けてきた。

「…僕が、その海賊の生まれ変わりだって言いたいの？」

スレインが眩しそうに目を細めて伊奈帆の顔を見た。

「同じ顔をしている」

「それだけ？」

伊奈帆はむかむかと言ひ募る。誰かに似ていて、だから会いたいと言われても嬉しくない。

スレインが口元を手で覆い、くすくす笑った。

「そう、その物の言い方もよく似ている」

子ども扱いされているような気がして、伊奈帆はスレインを上目遣いに睨んだ。スレインは声を上げて笑った。

「それで、スレインは僕をどうするつもり？血を吸う？」

伊奈帆が聞くと、スレインが立ち上がり、手を差し伸べた。伊奈帆はブランコに座ったまま、スレインを見上げる。

「何？」

スレインは頬を赤く染めて恥ずかしそうに笑った。肩を竦めて、もじもじと足を踏みかえた。突然の可愛いらしい仕草にどきどきした。

「…踊りませんか」

意外過ぎる申し出に、伊奈帆はぼかんと口を開けた。

「だって僕、踊りなんてしたことない」

スレインは優しく伊奈帆の手を引く。伊奈帆は腰を浮かせて、手を引かれるまま足を前に出した。手を握り合わせたまま顔の高さまで持ち上げ、もう一方の伊奈帆の手をスレインは自分の腰に回した。伊奈帆は腰骨の目立つ腰を掴む。スレインの手が美しい動きで伊奈帆の肩に下ろされた。目の端と耳を赤くしてにっこりと微笑むスレインに、伊奈帆も自身の耳が熱くなるのを感じた。

「平気です。誰も見てない」

スレインが握った手に少しだけ力をこめた。微かに引かれ、体が動く。スレインの髪が鼻に当たった。香りがするほど近くにいて、息を吸ったり吐いたりするのがわかる。伊奈帆はどうしてだか、とても懐かしい感じがした。

「こうやって、ゆっくり回るんです」

夜の風が旋律を奏でる。伊奈帆は、桜を見上げた。まだ蕾だ。桜が咲いていたら、もっと良かったのに、と思った。

「スレインは上手だね」

「ええ」

スレインの口から、小さな声で素朴な音楽が歌われた。時折掠れる美しいメロディーに乗せて、

ステップを刻む。

月の光が桜の枝を通り抜け、繊細な光の束になって二人を照らした。

歌が終わり、伊奈帆とスレインは静かに足を止めた。手を離す。瞳がかち合う。逸らされない。スレインの深い瞳は、何かの宣告を待っているようだった。

「スレインは、吸血鬼なの？本当に、年を取らないの？」

伊奈帆が聞くと、スレインはゆるやかな動きで口角を引き上げ、人とは思えないような表情で笑った。片眉をあげて、首を傾げる。妖しい香りが辺りを包む。噓せ返るような妖艶さだ。今まで、スレインのこんな仕草は見たことがなかった。

「おや、信じたんですか」

スレインがけらけらと笑った。伊奈帆はむっとして、しかし怪訝にスレインを見つめ次の言葉を待った。スレインは朗らかな顔で、明るく声言った。

「冗談ですよ。ヴァンパイアなんて、いるはずないでしょう。手品をしてからかっただけです」

伊奈帆は記憶を辿る。初めて会った時、そして今。わからない。年は？学校は？両親は？家は？昼間、何をしている？わからない。伊奈帆は、この期に及んでスレインのことを何も知らないの

だと知り愕然とした。言葉を失い立ち尽くす。

そのとき、一陣の風が吹き抜けた。月の色の髪を風に遊ばせ舞いあげながら、スレインはいつもの困ったような顔で笑った。

「ずっと言いそびれていましたが、僕は今夜引っ越します。伊奈帆に会うのは、これが最後です」
スレインが伊奈帆の後ろを見た。スレインの視線を追って振り向くと、公園を出たところに男の人が真っ直ぐ立っているのが見えた。切れ長の目が、厳しくこちらを見据えている。スレインが伊奈帆の肩をぼん、と叩いた。

「じゃあ、元気で。風邪をひかないように。学校では、友だちと仲良くするんですよ」

「スレイン」

そのまま立ち去ろうと歩き出すスレインの服の裾を掴んだ。どうしていいのか、何を言えばいいのかわからない。静止した伊奈帆をスレインが顔だけで振り返る。彼は目を伏せ、次に笑った。それは笑いながら泣くような、怒りながら悲しむような、混ざっていて、くしゃくしゃで、どうしようもなく下手くそな笑顔だった。

「…伊奈帆。…もしもまた会うことがあれば、また一緒に踊ってくださいるか」

伊奈帆はスレインの顔を、言葉を、忘れないように懸命に目を凝らした。しかしどれだけ必死

に目を開けても、視界がぼやけて上手く焦点が合わない。スレインが伊奈帆の頬を指先で拭った。それで初めて、伊奈帆は自分が泣いているのだと気付いた。

「うん…。約束する」

「ありがとう」

一際強い風が吹き、砂埃がうねりを伴い舞い上がった。伊奈帆は思わず目を閉じ、腕で顔を覆った。目を開けた時、スレインの姿はもうなかった。車のエンジン音が遠くで聞こえ、聞こえなくなった。

夢を見ていたのだろうか。

あの目、抉り出した目。

二人きりのダンス。擦れた旋律。

さっき触れた、細い指の感触。

月がやけに明るく周囲を照らす。

ブランコは静止して、誰もいない。

伊奈帆は振り返る。

どこまでも一人だった。

月光を浴びた裸の枝が、伊奈帆の上に格子のような影を作っていた。

黒いバンの助手席で揺られながら、スレインは夜空を見上げた。漆黒を引っ掻いたような爪月が夜空に浮かんでいる。

あの夜も、こんな月だった。スレインは、かつての伊奈帆との約束を思い出す。

ランプの灯りとインクの匂い。古い本のかび臭い空気。スレインは、慣れ親しんだ部屋でベッドに横たわる人間を見つめた。小さく名前を呼ぶ。

「伊奈帆」

「…スレイン」

落ちくぼんだ小さな隻眼が、ぱちりと開いた。その目がスレインを映しこんだ。スレインは伊

奈帆の頬に触れる。かさかさして、皺だらけの頬だ。伊奈帆が目を開き笑った。子どものような無邪気な笑顔だった。頬を撫でるスレインの手に、伊奈帆は自分の手を重ねた。ごつごつして、骨と皮だけになったしみのある指が、スレインの陶器のように白く滑らかな指に絡まった。

この船には、もう二人しかいない。波の音と風の音に包まれた古びた船長室。そのベッドに横たわり、伊奈帆はしわがれた声で、言った。

「…こんなことなら、君に血を吸ってもらえばよかったかな」

スレインは首を振った。もっと近づこうと腰を上げる。

「伊奈帆が人間で良かった」

屈んで、額に額をあてた。伊奈帆は嬉しそうに目を閉じた。

「いつか、青い花畑で踊ったね」

懐かしい思い出が瞼の裏によみがえる。夜の月が浮かぶ丘。美しい旋律。美しい景色。美しい人。

「そう。懐かしい」

子どものようなあどけない顔で、不器用にステップを刻む伊奈帆を思い出す。握られた手の温かさ柔らかさ、向けられる真摯な瞳、はにかんだ笑顔。ネモフィラの香りと微かに響く弦楽器の

音色。忘れ得ぬ夜だった。あんなに恋した夜はなかった。

「あれから何度か、踊ったね。船でも、陸でも……」

伊奈帆の指がたん、たん、とリズムをとった。スレインは小さく笑った。

「いつまでたっても、伊奈帆は下手だった」

愛おしい日々だった。二人が踊るのを、夜の闇の中、月だけが見ていた。伊奈帆は片眉をあげてスレインを見た。

「そうなんだ。でもね、確かに僕が下手なのは認めるけれど、君があんまり綺麗だからいけない。あんなに近くに君の顔があるから、どきどきして、足元がおぼつかないんだ」

その言葉に、二人で笑った。優しい時間だった。スレインは、誰かとこんな話をするのは初めてのことだった。

「別れがたいなあ。君、これからどうするの」

いつか、僕が死んだらどうする、と聞いてきたことを思い出した。あの時も今も、責めるような色はない。スレインは首を振った。

「わからない」

そっか、と伊奈帆は小さく頷いた。そうそう、と続ける。

「僕が死んだら、食べていいよ」

骨と皮だけになっちゃったけど。好き嫌いしないで食べるんだよ。そう言った伊奈帆にスレインは微笑み返す。

「…はい」

伊奈帆が目を閉じた。

「もし生まれ変われたら、また君に会いたいなあ」

スレインは伊奈帆の手を包んだ。伊奈帆がそっと握り返す。

「待っててくれる？」

「ああ。待ってる」

とんとん、と伊奈帆の指がスレインの手の甲を叩いた。小さく口が開き、スレインは耳を近づける。

「その時は、また踊ってよ。僕は下手だろうから、ちゃんと教えてね」

涙が溢れた。スレインの頬を伝って、伊奈帆の頬に雫が落ちた。伊奈帆が笑った。

「うん」

この返事は、聞こえていたかわからない。冷たくなっていく伊奈帆の手を握りしめ、スレイン

は泣いた。

スレインは、冷たくなった伊奈帆の血を吸い、肉を食べた。骨は、海に沈めた。

思ったよりも、小さな頭蓋骨だった。歯並びがよく、顎がしっかりしていて、今にも小言を言い出しそうだ。海岸から、海に流した。この骨も、いつか海に溶け海に生きる者の糧となるのだろうか。と想像した。

その時、僕は、生きているのだろうか。

翼を開いて、大きく伸びをした。遠くへ行こう。どこか、見たことのない花が咲いている場所がいい。花の中で、また伊奈帆の手を引いて踊ろう。きっと、また会える。そう願って翼をはためかせた。

月の海を一羽の蝙蝠が飛んで行く。こぼれた涙が海に溶けた。

「スレイン様」

運転席の男が、固い声で名を呼んだ。スレインは顔を向ける。関節の目立つ長い指がハンドルを握っている。夜の闇の色をした鋭い双眸は、フロントガラスの向こうを見ていた。この青年との付き合いも、もう一年以上になる。

「なんだ」

ぞんざいな口調で返事をしたが、青年は気にした様子もない。緩やかなのカーブを曲がり終えると、彼は口を開いた。

「あの子ども、よろしいのですか」

「…」

スレインは、黙ったままだ。青年は続ける。

「因縁がおりなのでしょう。このまま去ってよろしいのですか」

「ハークライト」

スレインはぴしゃりと青年の名を呼んだ。暗色の瞳を睨みつける。

「…口が過ぎるぞ」

「失礼しました。しかし、沈んでおられるようですので」

「いいんだ」

固い座席に体重を預ける。体中を小刻みな振動が包んだ。不規則なエンジンの音だけが聞こえる。こういう仕組みで動いているのかわからない乗り物に身を任せながら、スレインは想起する。長い年月を生きた。いろんな時代を、いろんな人と生きてきた。全てを思い出すことは、もうできない。悲しい思い出も、美しい思い出も、古いペンキのように歪に剥がれ落ちている。あの女の子の名前はなんだったっけ。妻だった人の顔は？両親の声や手、生活の風景。全てが夢のようだ。その後の記憶も、霞みがかかったように曖昧だった。

どうして、生きているのだろうか。いや、僕は、生きていると言えるのだろうか。

「…今までも、愛した人はいました。何人も。その人たちは、僕を愛してくれた。…人間のよう
に、愛してくれた」

スレインは、穏やかな気持ちで前を見た。真っ暗な道を、オレンジ色のヘッドライトが照らしている。広い道だ。どこに向かっているのかは知らないが、静かで何もなくて、とても暗い。落ち着く道だった。スレインは、目を閉じた。

「皆、僕より先に死にました」

ハークライトは何も言わない。スレインの話にじっと耳を傾けている。スレインは、この青年のそういうところが気に入っていた。静かで、とても優しい。さっきは八つ当たりをしてしまっ

た。彼といると、つい甘えてしまう。

「僕は、その人たちを愛しく思いながらも、いつしか忘れて、違う人を愛してきました。何度も。でも」

恋をした人がいた。死ねない自分が生きることを選べるくらい、大切な人がいた。孤独を強め、永遠を忘れ、人間のような感情で心を震わせることができた。忘れえない幸せな夜をくれた。

二人の伊奈帆。

「愛している人が生きているのに、二度と会わないと決めるのは初めてです」

再び伊奈帆に出会った日。小さな体を丸めて、雪の中ひとりぼっちでブランコを揺らしていた。スレインを見て、不思議そうに丸まった瞳。その色の懐かしさ。日に日に似てくる面差しと声。声変りを終えて低く柔らかくなった声。その声で名前を呼ばれた時、どれほど胸が締め付けられたか。

「生きて別れることが、こんなに寂しいこととは知りませんでした」

もう、あの声で名前を呼ばれることはないだろう。あの瞳が自分を映すことはないだろう。それでいい。誰か、かわいらしい女の子と恋をして、あの下手なダンスを踊ればいい。子どもが産まれたら、小言を言いながら勉強を教え、食事を用意し、温かい家で平凡な日々を送る。そうや

って生きてほしい。自分のことなんか忘れて。…それは、身を切られるようだけれど。

もう、愛する人を食べたくはない。

「私は、ずっとお傍におります」

ハークライトは静かな声で言った。スレインは、ハークライトの横顔を見た。前を向いていた視線が一度横に滑り、瞬きをして前に戻った。

ハークライトとは、食事の際、偶然知り合った。血の匂いに誘われてたどり着いた港の廃工場で、ハークライトは大勢の武器を持った連中に囲まれていた。瀕死だった。全くの無関係で興味もなかったが、やけに凶暴な気持ちになりその連中を食べたのだ。結果的には、スレインが彼の命を助けたと言えなくもない。ハークライトはそれ以来スレインに忠誠を誓い、常に行動を共にしていた。

厭世的な気分になっていたスレインはハークライトに素っ気なかったが、彼は辛抱強く付き合い、スレインのため様々な環境を整えてくれた。はじめは見返りを求めることのない彼の真意がわからなかったが、今となっては真心で接してくれていると信じられるくらい、かけがえのない存在になりつつあった。

スレインはハークライトの精悍な横顔を眺めながら、この人も、自分より先に死んでしまうん

だな、と思った。

「…ありがとう。今、ここで噛みついてらどうします？」

舗装の荒い道で車体が大きく揺れた。ハークライトは前方を見つめたまま、顎を引いた。

「光栄です」

スレインはうん、と頷いて顔を背けた。窓に額を押し付ける。ひんやりとして冷たい。少しだけ、ガラスに顔が映らないことを良かった、と思った。

「もう少し、遠くへ行きましょう」

ハークライトが言った。彼の右足がアクセルを踏み込み、エンジンの音が大きくなった。振動で左右に大きく体を揺らし、スレインはゆっくりと移動する月を見ながら言った。

「誰もいないところがいいな。とても寂しいところ」

ハークライトははい、と切れよく返事をし、急カーブでハンドルを回す。遠心力で体が引っ張られる。

「お供します」

漆黒の闇をヘッドライトが切り裂く。スレインは目を閉じた。

しばらく、生きることすら死ぬことも放棄しよう。羽を休めたら、そうだな。この人と二人で永

遠を生きてもいい。気が向いたら、だけれど。

吸血鬼と人間を乗せた車は、朝につかまらないように暗闇を踊り去る。

ヴァンパイアハンター

「君の主人に用がある。しゃしゃり出ると死ぬよ」

「無礼者。その言葉、そっくりお返ししましょう」

砂浜で、激しい戦闘が始まった。スレインはその様子を、朽ち果てた灯台の灯室から見下ろした。

スレインは着心地のいい白い綿の上下と、白くて丈の長い服を羽織っている。汚れたらすぐわかるから、とハークライトは白い服を着せたがる。スレインは身につけるものには無頓着なので、好きなようにさせていた。

根城にしている廃灯台をヴァンパイアハンターが嗅ぎつけたらしい。ここも、もう去り時のようだ。

ハークライトと行動を共にするようになり、十年以上が経った。結局、スレインはハークライトの首筋を噛んで血を飲んだ。眷属を作るのははじめてのことだった。

二人でひっそりと生きてきたが、食事は必要だった。訳ありの、死んでも露見しにくい人間を細々と摂取してきたつもりだが、最近ではプロアマ問わずハンターに遭遇することが多くなつた。ヴァンパイア狩りは金になるらしい。スレインとハークライトは全て返り討ちにしてきたが、次々現れるハンターにうんざりしていた。そつとしておいてくれないものだろうか。

「次は、どこへ行こうか」

この場所は気に入っていたのだが、とスレインは肘をついて海を見た。海は静かで、海辺には緑が多かった。きつと春になれば、いろいろな野花が見られたのに。

スレインは視線を戦闘に戻す。波打ち際でハークライトと戦っているのは、若い男だ。長身のハークライトと比べると小柄だが、引き締まった、瞬発力の高そうな体格をしている。濃紺の軍服めいたジャケットに身を包んだ男は、重さを感じさせない速度で左手のグレネードランチャーを構えた。ずいぶん仰々しい武器を用意したものだ。

しかしハークライトが距離を詰め、発砲されることはなかった。喉笛に手が届くというところで男は右手で腰の短剣を引き抜き、信じられない身のこなしで切りつける。ハークライトは間一髪のところを避け、大きく後ろへ飛びのいた。三メートルほどの距離を保ちつつ、両者はじりじりと睨み合う。一瞬後、また衝突した。インファイトでの戦闘が始まった。

その戦闘を見ていたスレインは驚いて目を見開く。胸騒ぎがして、いつの間にか胸を押さえていた。

まさか。

スレインは手すりから身を乗り出し、食い入るようにそのハンターを見た。遠いし暗いし、よく見えない。でも、その動き。身のこなし。剣の扱い方。予感に胸がざわざわして、汗がこめかみを流れる。

まさか。だって。

信じられない気持ちで、スレインはその男を見つめた。戦闘は続いている。幾度目かの衝突の後、飛び上がったハンターは戦闘の最中だというのに目の前の標的から顔をそむけ、スレインのいる廃灯台を見た。月明かりで照らされたその顔を見て、スレインは手すりに足をかけ宙へ浮かび上がった。黒い翼が一度はばたき、鋭く風を切る。

「スレイン様！」

ハークライトが叫んだ。

戦闘する二人の間に、天使のような出で立ちのヴァンパイアが音もなく降り立つ。白い服の裾が真円に広がり、ふわりと窄まった。一瞬、時が止まったかのように音がなくなった。

「待て。ハークライト」

スレインはハークライトを声で制し、凄腕のハンターに身を向ける。波が打ち寄せ、くるぶしまで足を濡らした。雲のない、明るい夜だった。月は半月。風が少し吹いていた。髪が揺れる。スレインはうっとおしい前髪を横にはらい、ハンターに一步、二歩と近づく。彼はスレインの登場に動じた様子もなく、武器を持った両腕をだらりと下ろしていた。スレインがさらに足を進めると、無造作に銃と剣を放り投げ、そのままホールドアップのポーズをとった。にやりと笑うその顔は、ずっと昔に見た顔だ。

「やっと会えた。探したよ」

濃い茶色の髪に、東洋人らしい幼い顔立ち。左目は黒い眼帯に覆われ、右の丸みを帯びた目は、幾千の夜を閉じ込めたように老成して澄んでいた。唇が開き、息が音を乗せた。

とても。とても懐かしい声だった。

「十年だ。君は変わらないな」

「伊奈帆……」

スレインは自身の胸を両手で掻き抱いた。隻眼のハンターは嬉しそうに声をあげて笑った。

「その癖。昔のままだ」

「…昔？」

丸腰のハンターは大股で距離を詰める。スレインは動かない。彼が近づいてくるのを、歓喜を伴う心持ちで待つ自分に気づいた。

「全部知っている。いや、覚えている…かな」

すぐそこに顔があった。伊奈帆の方が、少し背が高い。彼は手を頭の高さに上げ、手首をくるくると交互に示す。前は僕の方がずっと背が低かった、とからかうように言った。スレインは夢のように目の前の橙の瞳を見上げた。

「ネモフィラの丘を覚えてる？あの時、僕は君に恋をしたんだ」

伊奈帆はそう言うとおバーな仕草で唐突に跪き、スレインの左手を持ち上げた。指に小さく口づけ、生意気そうな上目遣いでスレインを見上げる。

「迎えに来た。スレイン」

オレンジ色の隻眼を優しく丸め、二十七歳の界塚伊奈帆は微笑んだ。

Absolute

～アブソリュート～

(2018-3-30)

名) 絶対的なもの

名) 室温で植物の香りを溶媒に移し抽出した香料

R-18

「面会謝絶とは、どういうことですか」

極秘施設を訪れた界塚伊奈帆は、面会室ではなく応接室に通された。応対した数人の職員から、とにかく面会はできない、ということは何度も告げられる。理由を聞いてもはっきりしない。監理官が対応していて、戻り次第説明いたします、というやり取りに、不満と憤りと歯痒さが今にも破裂しそうなほどに大きく腹の中で膨れ上がったが、伊奈帆はそれらをぐっと飲みこんでソファに浅く腰掛けた。

一人でじっとしていると、時計の秒針が出す音がやけに大きく聞こえる。目を閉じると、嫌な想像ばかりしてしまう。これまでだって、何回も面会できないことはあったのだ。スレインの体調不良が主な理由だが、今回の職員の慌て方は少しおかしい。ふと手を開くと、手汗がひどいことに気づいた。知らず、ため息をつく。

生きていればいいが。

出された茶の湯気が消える頃、急いたノックと同時に扉が開かれた。慌てて来たらしく息の上があった男は、申し訳ない、という内容の挨拶を数通り口から吐き出した。この施設の最高責任者である。伊奈帆はソファから素早く立ちあがり問い詰めた。

「我々も、想定外の事態で。指示を待っているのです」

伊奈帆より三十以上年上の男は、困り果てた表情だった。頭は切れそうもないが、実直で話の分かる年上の下官、と伊奈帆は認識している。監理官である彼との付き合いも、この極秘施設の発足と同じく二年ほどになる。

「彼に、何があったのですか」

監理官は額の汗を指で拭い、言い難そうに口籠った。

「…その、囚人が、…発情しまして」

思ってもいなかった言葉に、伊奈帆も一瞬言葉を失う。

「発情？まさか」

文官出のこの職員は伊奈帆の迫力に気圧されながらも、背筋を伸ばして次の言葉を発した。意外と胆力がある。この施設を任されているだけのことはあるらしい。

「失礼ながら、少尉はアルファだとお聞きしておりましたので、面会は危険だと判断したところで」

絶句して伊奈帆は脳内に検索をかける。

発情。その言葉が適用される人類は、全人口の三パーセントにも満たない。まさか、と思った。何度も読み返した彼のパーソナルデータには、そのようなことは記載されていないかったはずだ。

「オメガ性だと？検査しなかったのですか」

「もちろんしました。しかし、おそらくはフェロモンが分泌されておらず、検査では判明しなかったようです」

番のいないオメガはフェロモンを分泌するので、検査でわかるのだ。血液を抜き取りフェロモンの性質と濃度を調べる。発情期が最も分泌が多いが、定量的に微量のフェロモンは分泌されている。それが分泌されていなかったということは、どういうわけだろうか。そもそも、オメガの発情期は三カ月に一度やってくる。これまでの二年間、全く確認できなかった。

本当に今回の騒動はオメガの発情期だろうか。よからぬことを考えた施設職員の不祥事を隠そうとしているのではないのか、と思考が突っ走る。

だって、もし彼がオメガであったなら、アルファである自分が真っ先に気づくはずだ。どうも理屈が通らない。

「被害は？」

「幸い、ありません。看守から、様子がおかしいと報告を受け慎重に対処しましたから」

その現場を想像して、伊奈帆は嫌な気分になった。

「…それで、今はどういう状況ですか」

「抑制剤と、一応避妊薬も投与して、独房で拘束しています」

伊奈帆は顔を顰めた。念には念を、ということだろうが。

「扉越し…いえ、カメラ越しにでも、見ることは？」

「いけません。これは私の個人的な判断ですが。少尉はアルファです。お忘れなく」

案外強情だ。これほど職務に忠実な男だとは知らなかった。

「フェロモンは、分泌されていないのでは？」

「それが不思議なのですが。先ほども、簡易キットで検査したところです。ですから、本当にオメガなのかどうかもはっきりとは断言できません。しかし抑制剤は効いておりますので、何が何やら我々にもさっぱり。…フェロモンの反応は見られないとはいえ、我々ベータには感じ取れなくても、アルファの少尉は反応するかもしれません」

「…わかりました」

この時点で必要な会話は終了した。伊奈帆は応接室のソファに深く腰掛け、冷めきった茶を一気に飲み干した。監理官に告げる

「僕はここにいます。指示と一緒に待つことは、止められませんよ」

「…わかりました」

男は仕事に戻ると言い残して、その場を去った。

伊奈帆は壁にかかった時計の長針を見た。先ほど時刻を確認してから、三分しか進んでいない。応接室に一人残されてから、既に三時間二十分が経過している。途中、何度か抜け出してスレインに会いに行くことを試みた伊奈帆だが、職員たちはあからさまに伊奈帆の挙動を監視していた。確かに、自分の一人歩きの評判とこの施設での立ち居振る舞いから、その対応は適切だと言える。伊奈帆はソファに深く腰掛け、ぐっと目を閉じ考える。熱くなるな。無茶はもっと先だ。少なくとも、まだ自分の権利を手放してはいけない。

「本日中に移送との指示を受けました」

ようやく表れた監理官の言葉に、勢いよく立ち上がる。移送だって？

「移送？正確な時刻は？」

「それはまだ：研究所の職員の到着が先だと」

検診をして、移送先の管轄を決めると。聞いてもないのにそこまで話してくれたのは、この人の人柄だろう。伊奈帆は重ねて問い詰める。

「研究所？どこの？」

「軍の管理するオメガバース研究施設です」

「口実は？」

あまりに直接的な物言いに監理官は息を詰めた。

「…検体検査だと」

馬鹿な。それならここでだってできる。そんなことで済むはずがないことを、伊奈帆は自身の左目を以て知っていた。

「僕の名前で、回線を繋いでください。エーリス・ハッキネン中将に」

「やあ。界塚少尉、そこにいたか。耳が早いな」

小さい液晶画面の向こうで、エーリス・ハッキネンがわざとらしく笑顔を作った。

「囚人を送送すると」

「ご執心だな。今回判明した事実を鑑みれば、それも当然か」

皮肉は聞き流し、さっさと用件を切り出すことにする。回りくどいことは嫌いだ。

「目的を聞きたいのです。命にかかわることであれば、僕の手持てる全ての力を使い阻止します」
笑い声が感度の悪い通信越しにでもわかった。嫌な笑い方だ。

「勇ましいな。しかし、もう叡智の瞳はないのだぞ。八本脚の神獣もおらん。君に何ができるね、
軍神君」

「なくとも」

ハッキネンは組んでいた手を解き、モニタ越しにもわかる大きなため息をついた。

「…君は頭がいいからな。はっきり言おうか。希少種のオメガだ。アルファと番わせ、子を産ませる」

「…子どもを」

背筋が怖気だった。子どもを産ませる？

「元来、オメガとは生殖に特化した種だ。それを利用するのは、自然の摂理に適っていると思う
がね」

伊奈帆の両腿の横、握り込めた手が意思とは勝手にぶるぶると震えた。怒りのためでもあったし、凄まじい嫌悪感からだった。

愛する人を手放し、名前を奪われ死を奪われ、自由を奪われ、未来を奪われ、暗い地下に閉じ

込められた孤独な青年。実験動物のように、檻に閉じ込め繁殖を試みると。人間としての尊厳すら、それさえもうほとんど失われた彼から、何もかも根こそぎ奪い壊そうというのか。

不幸には限りというものが無いことを、伊奈帆は思い知った。

「彼は人間です」

「そうとも。より強く、有能な人間を産みだす人間だ」

「…」

このモニタを叩き割ってしまいたい衝動に駆られたが、そんなことをしてもこの憎らしい上官を傷つけることはできない。何の意味もない行動を諦められるくらいには、伊奈帆は自分が冷静だと自覚した。

「あれのことは、忘れたまえ。軍にとって、君を失うことは大きな痛手だ」

「何のことですか」

ああ、先回りされた、と伊奈帆は奥歯を噛みしめた。そんなことまで考えると、この狸親父は下衆野郎だが冷静だ。いや、冷酷。冷淡か。とにかく、人間を道具として見ることにかけては抜きん出ている。

「界塚伊奈帆少尉。プライバシーに踏み入って悪いが、君はアルファだ。オメガと惹かれ合うの

はわかる。しかしな」

君をあれと番わせるつもりは、わが軍にはない。

中將ははっきりと言葉にした。伊奈帆は吐き気がして数度唾を飲みこんだ。本当に、嫌になる。全くもって邪推も甚だしいが、まさにそれを口実にしようと考えていたところだった。軍に染まって、自分も随分汚くなったものだ。

社会で認知されているアルファとオメガはそれぞれ全人口の三パーセント程度。三カ月に一度の発情期を抱えるオメガは社会的弱者と見なされている。オメガの生命、人権、社会的立場を保護するためのいくつもの法律―通称オメガ法―があり、そのことを指摘するつもりだった。番となったアルファとオメガは、生命保護と文化的な生活のための様々な法的援助を全面的に受けることができる。番のいるオメガは性フェロモンの分泌がなくなるうえ、他のアルファと性交自体ができなくなり、たった一人のアルファ以外の人間にはベータと遜色ない特性になるのだ。戦争犯罪者であるスレインに人権も何もあつたものではないが、オメガ法はアルファにも適用される。スレインと自分がセックスするなんて考えたこともないし想像もできないが、自分と番

になることで実験施設でモルモットのように扱われることはない、という考えがあった。しかしそれも、ハッキネンは先回りして考え、封じにきた。思い通りにいかないものだ。

「今となつては、どうして君があれに固執するのも理解できた。あれの、命の保障はしよう。適度な運動と栄養価の高い食事。健康管理もだ。独房よりずっと快適な生活空間を与える。有能なアルファをたくさん産んでもらわなければいかん。そうだな、五十とまではいかずとも、意のままとなるアルファが三十人もいれば、世界は変わるだろう。長生きしてもらわねば。オメガの肉体は、大事に扱おう」

何の計算をしているのだ。吐き気をもよおして、伊奈帆は思わず口を手で塞いだ。胃液の味で喉が焼ける。あまりに、あまりに人間の道を外れている。

「…彼を利用するつもりですか」

「当たり前だ。私は軍人なのだよ。することもなく、このまま独房で無為な生を過ごすより良いと思うがね。それとも、君は自己満足のためにその地下牢へあれを引き留めるか？」

「違う」

自己満足では断じてない。この二年間、伊奈帆はスレインと面会室で向かい合ってきた。確かに、初めは自分ばかりが躍起になっていたかもしれない。しかし、ひと月たち、ふた月たち、半

年がすぎ、一年を迎え。二年を数えた。そうやって来る日も来る日も顔を合わせているうちに、ふとした一瞬があった。

黒い駒を抓む指が、リズムを刻む。

チェスの戦況が苦しい時、鼻から大きく息が抜ける。

挨拶したら生返事が聞こえた。

こっそり持ちこんだ菓子を、にやりと笑って摘み上げる手の形。

時々、口の端に現れる笑窪。

話が途切れ、ふと合う目のその色。目尻の皺。

そして、ばつが悪そうに細く引かれる口。

『界塚』と。

ぶっきらぼうな声を装い、滑らかに呼ばれる自分の名前。

友人になれたような気がしていた。

「…もう、面会申請は通らん。よからぬ気を起こすな。忘れたまえ。君を失いたくはない」

「…しかし」

「以上だ」

一方的に通信は切れた。伊奈帆はスリープモードに移行したモニタをしばらく睨みつけ、右手で額を押さえつけた。そのまま静かに深く呼吸を繰り返す。そうしないと、誰かれかまわず殺してしまいそうだった。

「界塚少尉。車を回しました。どうぞ」

その場から動かず殺気立った気配を立てる伊奈帆に、監理官が近づき言った。その様子を遠巻きに眺める職員たちの気配を感じ、伊奈帆は一層気持ちさがさくれ立った。

「…まだ、外部機関は到着していない。会わせてください。まだ間に合う」

「いけません。どうか」

即答だった。伊奈帆は正面切って睨みつける。絞り出すようにしないと声が出せない。

「会わせてください」

「絶対にいけません」

監理官は目を逸らさない。彼は伊奈帆の眼光を受け止めた。そのことで、煮えたぎった頭が少し冷静になる。この壮年の下官が、自分の身を案じているのだと分かったのだ。

「お願いします。…もう、…会えないかもしれない」

腰を折って、頭を下げた。相手が息を呑んだのがわかったが、落ちてきた言葉の意味は変わらなかった。

「少尉。駄目です」

目の端に水滴が溜まった。落ちずに乾くようかと目を見開く。ぼやけた床が視界を埋めた。このまま、連れて行かれるのか。そうして、もう二度とできない。会うことも、話すことも、チェスをする 것도。未来を思い描くことさえも。知らない場所で、誰も知らない間に、生かされ死んでいくのか。自分の知らないうちに。

「…友だちなんだ」

両肩に重みを感じた。監理官が肩を掴んで、伊奈帆の身を起こす。ええ、と彼は優しい声を出した。

「…ええ、わかります。お二人が楽しそうにチェスをしているのを、私たちは見ていましたから」
はっと息を詰め見つめられた目を見つめ返す。日本人らしい濃い茶色の虹彩は、温かく穏やかだった。

そうか。見ていたのか。楽しそうに見えたのか。

「私たち職員も、あの子がいなくなるのは寂しいですよ」

二年間にわたり日の目を見ない職務に従事してきた年配の職員の顔を、伊奈帆は初めてこんなに近くで見た。誠実な眼差しで、じっと伊奈帆の隻眼を見つめている。伊奈帆は何も言えなくなってしまった。

「…」

「お帰りください」

関節に皺の目立つ手が、伊奈帆の背を押す。次の声には懇願が表れていた。

「少尉。あなたは私たちの英雄です。無茶をしてはいけません」

がやがやと物音がして、慌ただしく白衣の集団が事務室の前を通り過ぎていった。

ああ、来てしまった。どうして僕は、もっと早く手を打たなかったのか。無茶なんて、これまで何度も潜り抜けてきたじゃないか。どうして、今走りだせない。

悔しさと、取り返しがつかない思いに頭がぐらぐらして、伊奈帆はその場に膝をついて蹲った。床に、真円形の水滴の染みがいくつもできた。

六ヵ月が過ぎた。

伊奈帆の生活は、面会以外は以前と変わらない。

あの極秘施設から帰ってきてからの数日間は、もしかして、自分は怒りのあまり死んでしまうのではないか、というほどに心が掻き乱され冷静さを失ったものだったが、姉や友人と会話をし、仕事に忙殺されることで少なくとも体は日常に適応していった。気持ちに関係なく体は時間に急かされ順応していくのだとわかった。

しかし、日常の隙間にふと時計を見る。カレンダーを見る。そうして目を瞬く。今、彼はどうしているだろうか。生きているはずだ。独房よりは明るくて清潔な部屋を与えられたろうか。食事は、残しているだろうか。ちゃんと食べろと言ったのに。…もう、チェスなんてする相手がないだろう。それは僕も同じだ。

自宅のソファで物思いに耽っていると、ローテーブルの上で仕事用の携帯端末が音を立てた。非通知だが、ワンコールで出る。こちらが何か言うより先に、回線の向こうから声がした。

『界塚少尉。私です』

ノイズが混じって聞き取りにくいのが、極秘施設の監理官の声に違いない。伊奈帆は知らず立ち上がっていた。体が勝手に動き出し、軍服の上着を掴み取り財布と身分証明を身に着ける。足は

もう靴をひっかけていた。玄関の扉を開ける。

「どうかしましたか」

『お越しく下さい。今すぐ』

「はい」

キーをロックし、伊奈帆は走り出した。

全力疾走で極秘施設の事務室へ飛び込むと、あの監理官が駆け寄ってきた。室内には、他にも誰もいない。いろいろ聞きたいことはあるが、それよりも。

「彼は？」

「少尉。あの子が戻ってきました。あの囚人です。バタバタしています。今のうちです、さあ、独房へ」

差し出されたキーを引っ掴みながら、驚いて見上げる。監理官は真剣な顔だった。彼の手が伊奈帆の背を押し、そして離れた。

「いいんですか。あなたの立場が悪くなる」

監理官はやんちゃそうに齒を見せて笑った。今まで抱いていた印象とは正反対の、若々しい表情だ。彼は力強く頷く。

「私は、危険はないと判断しました。詳しいことは後で。さあ、お早く」

他の職員は席を外している。そうか、見て見ぬふりをしているのか。

『私たち職員も、あの子がいなくなるのは寂しいですよ』

思い出して、じん、と胸が熱くなった。伊奈帆は目の前の、おそらく父親よりも年配の下官に敬礼の姿勢をとった。彼も、完璧な敬礼を返した。

「恩に着る。ありがとう。本当に」

「グッドラック」

伊奈帆は鍵を握りしめて駆け出した。

「スレイン」

ロックを外し、独房の分厚い扉を開けて足を踏み入れる。ベッドの上で、彼が身を起こしたのが分かった。生きて動く姿を見ただけで、目頭が熱くなる。最近、精神の変調に肉体が呼応する

場面が多くなった。戦時中にはなかったことだ。

「…ああ、お前か。久しぶりだな」

少しがさがさしていたが、スレインの声だ。落ち着いている。手も、足もちゃんとある。いつもの囚人服。下げられたペンダント。そこまでは以前と同じ。そして違う部分を認め、そこで視線が留まる。首に白い包帯が巻きついていた。

「…久しぶり」

スレインは体を起こそうと肘をつき、一度ドアの方に視線を送った。もう一度伊奈帆に向けられた瞳は、少しだけ不安そうに揺れた。

「いいのか、お前、こんなところに来て」

伊奈帆は唇に人差し指を当てた。

「実は、内緒なんだ」

「…馬鹿だな」

スレインが小さく笑った。以前とそう変わらない姿にほっとする。半年だ。別人のようになっていたのではないかと思ったし、廃人のようにになっているのではないかと怖れていた。

ベッドの端っこに腰かける。スレインは、壁に寄りかかって膝を抱えた。ベッドの端と端で、

横目で様子を伺う。伊奈帆は、独房はこんなに暗いところだったろうか、と壁の仄黒い染みを見つめた。

いつだったっけ。スレインがここに收容されて、まだ一年、半年もしない頃だったろうか。面会に来たら暴れて怪我して眠らせた、って聞いて、その時初めてここに入ったんだっとな、と伊奈帆は回想した。青白くて、動かなくて、死んでるみたいな寝顔だった。二回目の独房はやっぱり暗くて寒くて陰気臭いけど、スレインが起きて会話してくれるだけいいな、と思う。

「君がオメガだって聞いた」

「ああ、そうらしいな」

スレインの声には、泥のような疲労がこびりついていて、もう一度、伊奈帆はスレインに視線を向ける。落ち着いた顔にも見えるが、疲れ切っているようにも見えた。隈が濃い。頬がこけている。見るからに痩せた。

健康管理をうると言っていたくせに、一層悪いじゃないか。顔を見ると、やはり首の包帯が気になった。首の後ろはガーゼを当てているのか、少し膨らんでいる。

「僕は、アルファなんだ」

「そうらしいな」

知っていたか。半年前、移送される彼を何もできず指を啜えて見ているだけだった自分を思い出す。

「…止められなかった」

それが何を指しているのか正確に伝わったかは怪しいが、スレインは首を振った。

「いい。君の責任ではないし、君と顔を合わせず、僕はほっとしていた」

「なんで」

「…」

スレインが、何とも言えない目で伊奈帆を見た。疲労が濃く表れた目の光には、微かな困惑と緊張があった。

そうだ。スレインはいつ、僕がアルファだと知ったんだろうか。僕は全然知らなかったし気づかなかった。今、こうして同じ空間にいても全く分らない。

「不思議なんだけど」

「…」

顔と体を向け、じっと観察する。これまで、オメガに会ったことはない。会えばわかると教えられた。でも、気付かなかった。…ああ、首が気になる。ぐるぐると巻き付く、その包帯の下が

どうなっているのかなんて、想像したくもないがわかってしまう。

「どうして、気づかなかったんだろうか」

スレインが意外そうに片眉を吊り上げた。よく見たら、顔には痣がいくつかできていた。口の端が切れて赤い。開くと、白い歯がのぞいた。なんでそんなところを見ているんだろう、と伊奈帆は自問してみたが答えは見つからなかった。

「…界塚。お前、どうして僕がここに戻ってきたのか知らないのか？」

「うん。慌てて車を飛ばして飛んできたところだ。ほら、ネクタイもしていない」

「…」

スレインは言葉を探すように視線を彷徨わせ、結局伏せた。

「君は、わかるのか」

「まあな。自分のことだから」

彼には、自分のことであっても分からないことはたくさんあるな、と伊奈帆は頭の端で考えた。

「教えてくれるかい」

碧の双眸が静かに伊奈帆を映している。しばらくの間沈黙が下りた。スレインは小さく息を吐いた後、ぼそぼそと喋り出した。

「…オメガは、アルファと番になると、フェロモンの分泌がなくなるそうだな」

「君、番がいるの？」

やはり首の傷はそうなのか。気色ばんで聞き返した伊奈帆を、スレインは片手をあげて制した。
「早とちりするな。番になるには、項を噛むと」

「そうらしいね」

スレインが包帯の巻かれた首を撫でた。伊奈帆は焦燥に駆られて、その手の動きを目で追う。
包帯が透けて、赤い歯形が見える気がした。

「…正確には、アルファに噛まれたら分泌が止まるんじゃない。アルファに噛まれた時だけ、その固有のアルファだけを引き付けるフェロモンに変化するそうさ。フェロモンはなくならない。普通はな。しかし分泌腺はデリケートで、ベータやオメガに噛まれたり、衝撃を受けたり、傷ついたりすると…強さにもよるが、その機能が破壊されるんだと。要するに、アルファ以外がオメガの項に歯形がつくほど噛みつくと、フェロモンは分泌されなくなる」

「うん。…わかった。もういい。言わなくて」

スレインは呆れたように小さく笑った。首の包帯を見ていると、気分が悪くて視野が狭くなってきた。伊奈帆は視界を独房の隅っこに向け、汚れが染みつき、黒々とした壁の継ぎ目を凝視す

る。界塚、とスレインの声が伊奈帆の名を呼んだ。

「まあ、最後まで聞け。お前は僕が火星や揚陸城で、どんな風に過ごしてきたかは知っているのか」

「報告書で読んだよ」

スレインは自嘲するように笑った。痛々しい笑い方だった。今日はよく笑う。それほど自分は弱って見えるのか、と伊奈帆は考えた。彼は右手を上げて、後ろ手で自分の首をとんとん、と叩いた。包帯が白く浮かび上がって、頭部と胴体を切り離す切り線のように見えた。

「要するに、ここはとっくの昔に噛まれてる。絞められたことも、縛られたこともあったかな。何回も血が出た。…噛んだ奴は全員ベータだったらしいな」

番うつもりもなく、戯れに噛みついた人間を、殺してやりたい、と思った。

包帯が巻かれているのは、研究施設で番を試したからだろう。おそらく、一人や二人ではない。何人ものアルファに噛まれ、犯され、解剖台の上で腹の中を暴かれたに違いない。この独房から姿を消して半年だ。二回のヒートがあった計算になる。どんな残酷な仕打ちを受けてきたのかは想像するに余りあるが、こうして伊奈帆の前で平静を保っていることは驚異的だった。スレインは暗い瞳で伊奈帆をひたと見据えた。

「分かるか。僕は、番はいないのに番を作れない。繁殖もできない。用無しのオメガなんだよ」
「…」

そこまで聞いて、伊奈帆はスレインも自身がオメガだと知ったのは、最近のことだったのではないか、と思った。

「だから、ここに戻されたんだ。…いいよ、命の使い道がなくなった。せめて、実験材料くらいにはなれると思ったんだけどな。うまくはいかないものだ」

俯くと、首の包帯で頭と胴体が切り離されたように感じた。あの包帯の下は、血が滲んでいるのだろうか。見たこともないアルファの歯の形に。

「…予想はしていた」

会えない間、伊奈帆もいろいろと考えた。アルファの自分が全く気づかなかったのだ。既に噛まれていたのではないか、とはすぐに思い至ったことではあるが、実際に事実として突き付けられると胸が冷え冷えとして言葉を失った。

軍は、彼の処遇をどうするつもりだろうか。

「そうか。…まあしかし、発情期は初めてだったから驚いたな。生きていたら、この先ずっとあると思うと億劫だ」

やはり、スレインは自分がオメガだと知らずに生きてきたのだろう。初めての発情が十九歳とは遅すぎるが、地球、火星、揚陸城、月、と宇宙空間を渡り歩いた彼の経歴を思うと、成長期の肉体に負担が大きすぎたのだろうと思った。学校に通っていたわけでもないそうだから、見えない性別について教えられなければ気づきもしないだろう。男性との性交経験があると聞いているが、妊娠に至らなかった理由も理解できた。フェロモンの分泌がなければ、オメガは受精しない。番を失ったオメガは、二度と番を作れず、性交に体が頭痛、嘔吐などの拒否反応を示す。しかし発情期はやってくる。スレインの場合は、オメガに組み込まれた番システムそのものが番を作る前に機能を失ったため、この先番を作れず、性交も困難であり、定期的にやってくる発情期と付き合っていかなければならない。

番を作れず、生殖能力を失い、発情期を抱えたオメガ。ちぐはぐでアンバランスな肉体は、生涯精神を蝕んでいくことだろう。

「スレイン」

「同情ならいない」

彼は厳しい声音でぴしゃりと言った。すごく痩せて、体中傷だらけだ。眼光は暗く鋭い。それでも、こうして話ができるだけありがたい。迷ったが、伊奈帆はにじり寄った。

「違う。…セラムさんは、アルファだろう？」

「…」

スレインが表情を失った。伊奈帆の疑問の答えは、その表情が雄弁に物語っていた。

「いや。いい」

ひどいことを聞いた。後悔の念が沸き起こる。スレインが、首を振った。

「…帰ってくれ。そして、もう来るな」

「…どうということ」

お前がアルファなら、とスレインは遠くを見るような目で口を開いた。

「万が一にも変な気を起こしては困る。…そんな君は見たくない」

重い感じで二人は押し黙った。伊奈帆は、この独房を離れ、再び戻ってくるまで彼の身に降りかかったことを聞くとともになしに理解した。研究施設で、幾人ものアルファに犯されたのだ。誘引フェロモンなどなくとも、番でなくとも、彼に欲情し精を放ったアルファたち。項を噛んで、血を溢れさせ、痣を刻み、抵抗しない彼を思うまま蹂躪したその暴力。理不尽であり、理解しがたい行為だ。ここは安全だ、というかのように今はリラックスしてベッドの上に座っているが、時々緊張したように伊奈帆に視線を送っている。理由は、彼がオメガであり、自分がアルファだ

からだ。

スレインは、アルファというだけで僕がそんな連中と同じだといいたいのだろうか。

伊奈帆は、奥歯がぎり、と耳障りな音を立てるのを聞いた。これまでは軍人と囚人という立場はありながらも友人に近しい間柄だったというのに、もう一つの性別が判明した途端、二人の距離はとてつもなく大きく開いたようだった。このベッドの端と端は、面会室のテーブル越しよりずっと遠い。

「…発情期、辛い」

「辛い」

スレインが、俯いたまま自分の腕を擦るのが分かった。そこには、手の平の形の黄色い痣があった。

「楽になる方法は？」

「ない。頭が割れるほど痛い。吐いて吐いて気を失う。薬が一番でした」

伊奈帆は会えない間に穴が開くほど見た、監視カメラの向こうの虚ろな目で死んだように横たわる彼の姿を思い出した。

「今日は帰る」

「ああ。さようなら。もう来るな」

独房を出る。伊奈帆は歩き出すことができず壁を殴った。

『どうということかね。界塚伊奈帆少尉』

地球連合軍本部に直接出向いたが、ハッキネンは不在だった。アポイントメントをとったはずだが、通じていないのか避けようとしているのか。後者の方が可能性は高い。仕方なく、専用回線を借りて伊奈帆は通信を試みている。一度目の通信から四時間後、三度目の通信で、ようやく目当ての人物が現れた。

「書面の通りです。何か、問題でも」

『問題だらけだ。まず、あれは解放できない』

「よく読んでください。移送する、という提案です」

淡々と、冷静に話すことを心掛ける。かっとなってはいけない。今は、少なくともスレインは生きていて、会いに行くことのできる場所にいる。脳みそを引っ掻き回す過去の出来事は一度遮断する。

『同じことだ。施設の解体は考えていた。金がかかりすぎるからな。しかし、君の提案はあまりに独り善がりだろう』

ハッキネンが目を落とす書類は、スレインが極秘施設に戻されてすぐ作成したものだ。数か月を要して信頼できる昔馴染みに根回しをお願いし、つい一昨日、ハッキネンの手元に届いているはずだ。

「最も効率が良いと考えました」

『未成年に許可できん』

「未成年に、認可のおりていない生体デバイスを埋め込んだ人間の言葉とは思えませんね」

『少尉』

「失礼。しかし、問題があるとすれば、僕の安全面だけです。そしてそれは、心配ありません。彼は、僕に危害を加えるようなことはしません」

『どうして、そう言いきれぬね』

現時点で嘘ではない、しかし、時と場合によって変わる、本人たちにしか分からない事実を告げる。

「僕の方が強いからです」

伊奈帆の提案は、極秘施設を解体し、スレインの身柄を監督官とともに、セキュリティの高い住居へ移送するというものだ。監督官は自分だ。適任者は他にいないというのは、彼を討ち取った本人の申し出なのだから、ハッキネンも反論できないだろう。

『…なるほど。では、君とあれが手を組んで、地球軍に不利益を与える可能性は？』

「彼は生殖能力を失ったオメガです。健康状態は不安定ですし、僕が彼に従属する理由はありません。また、僕は地球連合軍の軍人です。その心配は杞憂です」

『君の目的はなんだ？』

伊奈帆は瞬きせず、モニタの向こうの眼鏡の奥を見据えはつきりと言う。真っ向勝負でいくことにした。

「死なせたくない。それだけです」

『…なるほど。界塚少尉』

「はい」

ハッキネンが、眼鏡を外し背もたれに深く体重を預けた。大きく吐かれた息と眉間を揉む仕草が、年齢を感じさせた。

『こんな私でも、情はあるのだよ。君のことを心配している。オメガは危険だ。フェロモンでア

ルファを虜にする。有能なアルファを意のままに操ることができるのだ』

「彼は、その機能を失っています」

この先は堂々巡りだ。押して押して、押すしかない。もう後悔はしない。

『そうだったな。しかし、それにも関わらず、あてがったアルファは全て発情し性交に及んだと聞いている。万が一、ということもないか？』

「検査結果と事実は変わりません。損なわれたものは、もう戻らない」

ハッキネンが片目を大きく開いた。

『君が言うと言得力があるな』

「彼には時間がありません。このまま手を打たなければ、この先…三月ともたず死にます。番を持たないオメガの発情は命も心も削る」

『どういう手が打てるね？』

書いてあることを確認しに来る。どこまで本気か確かめたいのだろう。全部本音だ。全部さらけ出して、もう何もない。

「今の彼はストレスの極値にあります。せめて、人間らしい生活を提供することが回復に必須の条件です。監視員はアルファの僕が務めれば、優位は保てるでしょう。極秘施設に戻ってからの五

か月で、体重は十二キロ落ちています。本当に死にますよ」

『発情期が訪れた場合、どう対処する？』

「できることを」

『性交には拒絶反応を示すと知っているかね』

「報告書は読みました」

『君にできることはない』

「そうでしょうか」

『番にはなれん』

「知っています」

伊奈帆は、モニタを見つめる。この老人は冷酷で冷淡だが、丸きり計算だけで生きているのではないのだ。

『仮初の自由だ。監視下に置かれることには変わらない。当然、外出はできない』

「知っています。しかしそれは、中將のかつての提案と比較して突飛でもありません。上層部には利益ばかりに思えますが」

しばらく、言葉はなかった。モニタの向こうで、ハッキネンが眼鏡を掛けなおし、テーブルの

上で両手を組んだ。

『…わかった。曲がりなりにも、あれは火星の女王からの預かりもの。衰弱死は本意ではない。善処しよう。君には、借りがあることだしな』

「お願いします」

「やあ。調子はどう」

「…お前か。別に、どうも」

職員に肩を支えられて面会室へやってきたスレインは、伊奈帆の挨拶に強がりと言った。職員が離れると、支えを失った体は糸の外れたマリオネットみたいに、椅子の上へぐしゃりと体を落とした。あちらこちらを向いた手足は骨の形が分かるくらいだ。

昨日まで発情期だったと聞いている。この一週間は、面会の許可がどうしても下りなかった。テーブルの向こうの窺れてぼうつとした顔は、蛍光灯の光を病的に反射していた。肌は乾いて、あちこちに引っ搔いたような細かい傷ができている。

床の上に投げ出された踝のあまりの細さに、伊奈帆は一瞬息が止まった。

「やっとな会の許可が下りた。痩せたね」

「…」

顔色は土色で、具合も悪そうだ。ぎょろりと碧の目が動き、伊奈帆を捉える。こんなに目が大きかったか、と思うのは顔の肉も削げて目が落ち窪んでいるからだ。初めて発情期を迎えてから、これで六回目。その度ひどく憔悴し、体はみるみる痩せていた。薬の副作用がきついのだろう。しかし、薬なしではヒートを越えられないと聞いた。番がいらないオメガの発情期は悲惨だ。番以外のアルファとの性交には拒絶反応があるため、求めても満たされることはなく、苦痛に等しい快楽の逃がし場所がないのだ。スレインに投与されている薬はオメガが一般的に使用する分量の十六倍と聞いた。体がつわけない。

「時間があまりないから、用件を先に言おう」

「ようけん？」

舌足らずな口調に、表情に出さないと決めていたのに眉に皺が寄る。

本当に、ぎりぎりだ。

「この極秘施設は解体することになった」

「そうか」

スレインの歯が見えた。笑ったのかもしれない。

「君の身柄は、軍が用意した住居で、監督員が預かる」

「…何だって？」

おそらく、処刑の日取りが決まったと早合点したらしいスレインが身を起こして言った。口調がはっきりとして、伊奈帆は少しほっとした。

「目的は、経費削減と君の存命だ。このまま痩せ細って死んでいくのは軍にも都合が悪い」

「監督員？初めて聞いたぞ」

「君のためにできた役職だよ。務めるの僕だから。来週の同じ時間に迎えに来る」

「はあ？」

「何か、質問はある？」

「どういうことだ？お前が、僕と、一緒に住むって？馬鹿じゃないのか」

「馬鹿で結構。細かい規約は置いておくから読んどいて」

伊奈帆は立ち上がる。本当はもっと話をしたいが、これ以上彼の体力を消耗させたくはない。スレインは中腰になって、机の上の書類の文字に目を走らせている。紙の端に添えられた手の指を横目で見やり、伊奈帆はくると背を向けた。

「おい、界塚！」

「来週まで、生きててよ」

「おい！」

面会室の扉を背にして、歩き出す。あんなに大きな声を聞いたのは久しぶりだ。伊奈帆は足取りが軽くなったのを感じた。

ちよつと、元気になったみたいだ。お互いに。

それが、十か月前のこと。

小煩い電子音に、無理やり現実へ引き戻される。手探りでスマートフォンを探り、アラームの停止ボタンを押した。仕事の疲れが溜まっているのか、目覚めの気分はあまり良くない。がしがしと側頭部を掻いて欠伸をすると、斜め下方から小さく唸る声が聞こえた。

「おはよう」

「…ああ、おはよう」

布団の中から返事が聞こえた。起きる気配はない。朝に強い彼には珍しい、と気づいて布団の

中に手を伸ばし、手探りで額を触る。寝起きにしても、いつもより体温が高い。

「もしかしてヒート？」

布団から顔が出てきた。目がしょぼしょぼしている。顔色は紙のように白い。

「…まだ。でも、もうすぐって感じがする」

「わかった。寝てていいよ」

掛け布団から足を抜き出し、包まったままの彼を跨ぎ越す。箆笥の引き出しを開ける。

「界塚…」

服を着ていると、遠慮がちな声がかかった。伊奈帆は顔だけで振り向く。スレインは布団から顔を出していた。ぼんやりした顔だ。

「何か食べられる？」

「…あまり」

「味噌汁は？」

「それなら…」

「オーケー」

着替えが終わり、脱いだ寝間着を片手で抱える。カーテンを開けて、少しだけ窓を開けて風を

入れる。もう一度彼の額に手を当てて、伊奈帆は寢室をあとにした。

「食べたほうがいい。全部じゃなくていいから」

ダイニングテーブルに向かい合って食事を進めつつ、伊奈帆は声をかけた。食欲がなく手が付けられないようで、スレインは味噌汁の椀を両手で挟んだままぼうつと座っている。

椀に添えられた手の指と、手の甲と、手首と、伸びる腕をなんとなくしに眺める。伊奈帆よりはずっと細いが、数か月前とは比べ物にならないくらい健康的になった。それだけでも、こうして一緒に暮らすことができて良かったと思う。普段から食が細い彼だけど、これならまあ、一週間くらい適当に済ませてでも死ぬことはないだろう。

自分に注ぐついでに、スレインの湯呑にも茶を注いでやる。

「ありがとう」

「定時に帰るよ」

ごくごく、と茶を飲み干して伊奈帆は立ち上がった。このやりとりは、これで三回目だ。すなわち、新しい監視体制に入り迎えるヒートの数と整合する。

二人は番ではないので、オメガ法は適用されない。休暇はとれないし、そもそも彼の存在は最

高機密だ。だからこれからの一週間は、伊奈帆はほとんど眠ることもできない。スレインはそれをずっと気にしていて、気の毒なほど身を小さくして項垂れていた。具合も悪いのだろうか、申し訳なさが先に立つような声音で返答があった。

「…無理じゃなくていい」

伊奈帆としては、頼ってくれると嬉しいし、多少面倒で体力的にきついとしても、受けて立とうという気構えでいる。元来が世話焼きなので、彼の世話は苦ではない。そもそも、伊奈帆はヒートに対してそれほど特別な感情を持っているわけではない。生理現象なのだから、どうこう言っても始まらない、というスタンスだ。食事や睡眠と同じだ。生きていくための作業の一つなのだ。誰かの助けで楽になるなら、一人より二人のほうがずっといい。

「辛かったら、薬を飲むんだよ」

「でも」

洗面所のラックには、抑制剤が常備してある。監獄での副作用を思い出してから、彼はあまり飲みたがらない。伊奈帆も、どちらかというと飲まない方が良いとは思う。

「確かにきつい薬だけれど、死んだりしない。飲まずに苦しむよりずっといい」

「…わかった」

うん、と頷いて伊奈帆は立ち上がった。そろそろ出勤の時間だ。スレインを一人残していくのは心配ではあるが、そうも言っていられない。椅子に掛けてあった上着に袖を通す。

「じゃあ、行ってきます」

「いってらっしゃい」

普通に行ってらっしゃいと言えるようになったんだなあ、と伊奈帆はしみじみ思っにんまりした。

時は過ぎ、人は変わるものだ。

「生きててよ」

「大丈夫だ」

スレインがぬるくなった茶を飲む様子を目の端で捕らえ、伊奈帆はじゃあ、と玄関へ向かった。

十二時間後、伊奈帆は自宅の鍵を鍵穴に差し込みくると回した。どういうわけで、こんな前時代的な鍵を用意したのか。想像はいくつかあるが現実が変わるわけでもないの、そのままドアを開ける。光が漏れ出る。室内は明るい。

「ただいま」

「…おかえり」

玄関先でスレインが膝を抱えて蹲っていた。腕の中にある顔が、少し持ち上がって、伊奈帆を見てまた下がった。気分が悪そうだ。嘔吐くように背中が上下した。

伊奈帆は玄関の鍵をロックして、慌てて膝をつき背を擦る。背中は熱くて汗ばんでいる。顔が腕の間から伊奈帆に向けられた。熱に浮かされた瞳に水分で膜が張る。伊奈帆はごくろ、と唾を飲みこんだ。

「大丈夫？」

「…界塚」

口が何かを言おうと数度開閉したが、何も言わずスレインはそのまま俯いてしまった。息が荒い。無理やり顎を持ち上げて、口で口を塞ぐ。生温かい唾液が顎を伝った。そのまましばらく呼吸を交換していると、少し落ち着いたようだ。

肩を支えて、顔をのぞき込む。とろんとした目で、物欲しそうに小さく唇を開いていた。紅潮した頬がびくびく動く。その頬を撫でる。やはり少し熱い。金の睫毛が水を含んで束になっていた。喉が鳴り、喉仏が上下する様子がスローモーションで鮮明に網膜へ焼き付いた。

「立てる？」

「…無理」

スレインは脱力して息も絶え絶えだ。葉を飲んだようで、反応が鈍い。ふらつくのか、頭を伊奈帆の肩に押し付けてきた。白い項が近くにある。

複雑な心境で、しばらくその白さを眺める。ここを噛んだことはもちろん、舐めたことも触ったことも一度もない。一度目を閉じて、後ろ向きな思考を追い払った。

「じゃあ、こうしよう」

膝の裏に腕を差し込み、ぐっと持ち上げた。伊奈帆の腕の中で、スレインは身を固く強張らせている。両手が、自身の胸のあたり、ペンダントのあたりを引っ搔いて握りしめた。よいしょ、と伊奈帆は上り口を跨ぎ、室内へ進む。

「お腹空いてない？」

スレインは首を振った。

「シャワーは？」

これも、首を振った。何かを言ったようだが、小さくて聞き取れなかった。

「じゃあ、すぐしよう」

項を噛まれたオメガは、番を作ることができない。たとえその後に運命のアルファと出会った

としても、番になることはできない。オメガのヒートにアルファは誘引されない。子を成すこともない。それでも、発情期だけは定期的にやってくる。番ではないものと性交することは、オメガにとってひどい苦痛を伴う。眩暈、吐き気、頭痛。それでも、三ヶ月に一度の周期でそれはやってくる。

こうして同居するようになり、これが三回目。一般的な発情期より間隔が短い。前の二回は嵐のように過ぎ去った。嘔吐する彼の背中を擦り、酸素を求めて喘ぐ口に呼吸を吹き込んだ。溺れて死に向かうかのような性交だったが、少なくとも彼の手は自分の背中に回されたので、そう悪いことばかりではない。

「…すまないな。お前、疲れてるのに」

「あのね、我慢できないのはお互い様だから。それに、僕は結構楽しいよ」

洗面所に寄り道して、タオルを数枚つかみ取る。スレインの腹の上に乗せて寝室へ足を速める。スレインの分泌腺は機能しないのでフェロモンに誘引されたわけではないのだが、体温を感じ吐息を聞いていると、どうにもそういう気分になってしまう。キスしたいし、触りたい。髪を撫でて、骨を辿って、肌の傷跡をじっくりなぞりたい。思うままに体をつなげて奥まで感じたい。いつの間にか、スレインは伊奈帆にとってそういう対象になってしまった。

普段の二人暮らしは穏やかだ。まるで友人同士のようでもあるし、兄弟のようでもあるし、家族と言っているかもしれない。つかず離れず、居心地のよい空間で過ごす時間は心地いい。ヒート以外で体に触ることは、あまりない。同じベッドで寝ていても、体は必要以上に触らない。時々、背中や肩が触れ合うくらいだ。

それが、きっと安心できる距離なのだろう。お互いに。起きて顔を見合わせると笑うし、ご飯を食べるときにくだらないうたを言い合ったりする。伊奈帆が帰ってくると、明るい部屋でちょっと味付けの微妙な料理がコンロの上で器によそわれるのを待っている。おかえり、という声。躊躇いがちな笑顔。何かのついでに、呼ばれる名前。

こんなに好きになるんだったら、番になればよかった。もっと前に出会って、項を噛んでしまったかった。肉体の拒絶に苛まれることなく、繋がることができればよかった。しがたい想像だ。

でも、今だってそう悪くはない。

熱い額に音を立てて口づけた。スレインの体がびくと震えた。

「…あ」

「好きだよ」

好きな人に求められるというのは、それがフェロモンとか、そんなのではなく、苦しみを伴いながらも縋られるというのは、悪くない。今日もスレインは頭痛と過呼吸に苦しむだろうし、何度もう吐くだろう。しばらくは食することもできず、また体重が落ちるだろう。どうしようもない感覚に翻弄されて、わけもわからずのたうつだろう。それを見るのは辛い。しかしそれでも、その手が伸ばされたところに自分がいて、その手を握ったら握り返され、ほんの少しだけ見つめた彼の目が笑う。

今のところ、それで十分満足だ。

——十年後。

「じゃあ、後は頼むよ」

私用の電話で席を外していた少佐は、戻るなりデスクを片付け始めた。ものの十数秒でおわり、デスクの下からバッグを取り出し持ち上げる。

「え、少佐、お帰りですか」

自分はこの上官と仕事でチームを組むようになり、二か月ほどになる。先日の歓迎会で、この

上司が見た目よりずっと年上で、あの伝説の軍神だと知ったときの驚きは筆舌に尽くしがたい。それまで、割とフランクに要するに、舐めた口を聞いてしまっていたような気がして、それ以来背筋を正し、できるだけ真面目に仕事に取り掛かるよう心掛けていたのだった。

うん、と頷く上官はいつも通りの無表情に見えるが、どこかそわそわと落ち着かない様子だ。口元が少し綻んでいる。普段は仏頂面を絵にかいたような上官だが、今は早く帰りたいと、そうはつきり顔に書いてある。

「何かありましたか」

「いや。家族がちょっと」

家族。少佐の口からは初めて聞く単語だ。そりゃあそうだ。私生活くらい、誰にだってあるが。

「なんすか。病氣？事故？ですか？」

「…そんなとこ。三日休むから、何かあったら適當によろしく」

「ええ！」

そんな、少佐がいなかったらこの仕事の山をどうすれば。…自分のノルマではあるのだが。

「連絡しないで。じゃあね」

風のように去る隻眼の将校を、茫然と見送った。

「界塚少佐、相変わらず行動が速いな。まあ、がんばれ」

「独り立ちするいい機会よ。いつまでも頼ってちゃ、いけない、いけない」

わらわらと、他のデスクの島から同僚たちが集まってきた。若いのから年寄りまで、どれもいつもこいつもご愁傷様、と顔に書いてある。

「…ええと、何？どうして少佐は突然帰るんすか」

「ヒートだろう」

「へ？ヒ―…？」

「一緒に暮らしている人が、オメガだって話だよ」

「ええ！」

「少佐はアルファ」

「まじすか。でも、確かに…」

有能。頭脳明晰。そもそも先の戦争の大功労者じゃないか、と一人で納得する。

「アルファとオメガの恋か。運命的よね」

「でも、オメガ法があるから、有給無制限で一週間取れるんでしょう？休暇。なんで三日？」

あまり知らないが、様々な特権を行使できると試験勉強で詰め込んだ記憶を辿る。当時は羨ましいと思っただものだ。

「ご結婚はされてないらしいのよ」

「へえ」

「少佐がここに配属された時にはもう噂になってたぞ。界塚少佐はまだ十代だったが、すごい美人と付き合ってるって。その時は、確かまだ少尉だったか」

「十代…」

「噂では、十五年前の戦争で出会った火星の亡命者、とか」

「それが、火星のお貴族様だったって」

「火星の工作員だって聞いたぞ」

「いや、中東の姫君だって」

「あら。地球のパイロットだって話よ」

「違うって、火星だよ。軌道騎士」

「どれが本当だ？」

「生ける伝説だもの。少佐は」

戦後育ちの自分は、どうもこの会話の熱さについていけない。どうしてみんな、そんなに目をきらきらさせているんだろうか。

「軍神界塚伊奈帆。火星のプリンセスとのロマンスは有名だぞ」

「アセイラム女王は、火星の王子様と結婚しちゃったものねえ」

「身分違いの恋…」

「ほろ苦い初恋の後、運命のオメガと出会ったのね。素敵」

「結婚しないのは、なんでだ？年がすごく離れてるとか」

「時代錯誤」

「相手は同性とか？」

「それも時代錯誤。大体、今の社会で婚姻に性別は関係ないでしょう」

「わけありかな。さっきの、火星人説は信憑性高い。プライベートがわからん人だから。少佐は」

「さあなあ。しかしま、年の差ってのはあるかもな。年上美人って話だぞ」

「どこ情報？」

「はいはい。俺、前に酒の席で聞いたことあるよ。年上かは知らんが」

「どうなの？」

「ベタ惚れだったぞ。寝顔と、笑顔がかわいいって」

「きゃあ」

「あらあら、ごちそうさま」

「少佐がそんなこと言うなんて、想像もつかないな…」

「ギャップがいいわよね」

「うーん。普段クールで仕事のできる少佐が、家ではでれでれなのね」

「性格は？」

「おっちょこちょいで、醤油と麺つゆを間違えたって言ってたぞ。…これ、十年くらい前の話だけど」

「その二つなら、そんなに致命的な間違いではないな。砂糖と塩とか、ベタだけど」

「でも、かなり深刻そうに呟いてたぞ。あれは弁当の卵焼きの味付けだったか…」

「美人でちょっと抜けてて、無防備な寝顔とかわいい笑顔か。少佐の性格からして、年上説は説得力あるな」

「写真とかないかな」

「そのへん、ガードが固いよな」

「同棲してもう十年くらいよね？お子さんは？」

「さあ、いないらしい。詳しくは知らないけど」

「馬鹿ね、そのための休暇でしょ。少佐ももう、…いくつだっけ」

「三十だよ。若く見えるけど」

「そうかあ、少佐も、もうそんなかあ。俺らも年を取るはずだ」

「でもでも、あのクールな少佐が毎度、この時ばかりはうきうきなんだもん。かわいいわよね」
一番年上の同僚が突然、自分の背中を叩いた。椅子が勢いよく前へ進み、机にボディーパーを食らう。痛い。

「まあ、少佐がもどってくるまでがんばれ。へますんなよ」

「…ええ、まあ」

「絶対に電話しちゃだめよ。メールもダメ。自分で何とかしなさい。そもそもあなたの仕事ですよ」

「はい…」

アルドノア歴十二年。地球連合軍管轄サイバネティックス研究所は、そこそこ平和だ。

「ただいま」

伊奈帆が玄関の扉を開けると、スレインが壁に背を凭れさせて座り込んでいた。抱えた膝の間に、伸びた金の髪が垂れている。声に反応して頭が持ち上がり、上気した顔が髪の隙間から覗いた。近くに膝をつき髪をかき上げてやると、気持ち良さそうに瞼が閉じた。睫毛の一本一本が肌に落とす影に舌を這わせる。少し濡れていた。味はしょっぱい。

「……伊奈帆」

壁に手について少し開いた唇に口付ける。口の中は熱かった。差し込んだ舌に舌が絡まり、深いところへ誘われる。気が付くと、首の後ろに彼の手が回っていた。こんなに積極的なのは珍しいな、と嬉しくなる。

後頭部を引き寄せて、喉の奥まで舌を進める。布が触れ合った胸から、速い鼓動が伝わった。頭を支える手で髪を数度梳き、そのまま骨をなぞるように下ろしていく。耳の後ろから、首の後ろ。項を紙一枚隔てるくらいをそつとなでると、不思議な感じがした。反発していた磁石の曲をくるりと回し、引き寄せ合う一瞬のような感覚。

なんだろう。まあいいか。そのまま背骨の継ぎ目の形を一つ一つ確かめ、腰を引き寄せる。脇

腹を撫でると、重ねた唇から熱い吐息が漏れた。舌を引き抜き口を離すと、混ざり合った唾液が顎を伝い、服に染みを作った。うっとりしたように数度瞬きをして、スレインは伊奈帆の肩口に額をぐりぐりと押し付けてくる。壁に寄りかかっていたスレインの体を手前へ引き、少し向きを変えて両手で背を抱いた。小刻みに背中が震えて、密着した腰が少し揺れた。

…どうしよう。なんだかすごくかわいい。

指を絡めて握ると、握り返される。もう一方の手で背中を支えて、床に倒す。覆いかぶさるように顔を近づけると、スレインは目を細めた。鼻先を吸うと、小さく声があがった。

「ん…」

突き出された唇に吸い付く。音を立てて何回もそれを繰り返していると、お互い息が上がってきた。キスの合間に、瞳を盗み見る。時々合わされ、その度微かに細められる碧は、水を張って綺麗だった。

「…大丈夫？」

「うん…大丈夫」

大丈夫じゃなかったらこちらが大丈夫ではないかな、と伊奈帆は自分も頭が沸騰しているようだと思わず喉の奥で笑った。

我慢はできそうにないし、する必要もないか。ここには二人しかないんだから。

「…ね、いい？ここで」

スレインがこくりと頷いた。肩口まで伸びた髪が、床に散ってきれいだった。首筋に軽くキスを落とすと、凹凸のある喉がしなって仰け反った。びく、と肩が跳ねる。床の上に放り出された手首を握って押し付ける。どくどくという音が手のひらを伝った。

「ああ…あ」

ぶわり、となにか濃度の高い空気に包まれた感覚があった。

匂いがある。柑橘系の果実のような、瑞々しく鼻を抜けるような香りだ。こんなのは初めてだ。スレインの首から鎖骨、大きく開いた襟ぐりを引っ張って、肌に舌を這わせる。さらりと甘い味がある。服の上から乳首をぐりぐりと押すと、甘い悲鳴と一緒に漂う香りが一層濃くなった。吸い込むと、酩酊するような感じで、心地よい。

「いい匂い…何かつけた？」

「んっ、何も…あっ…！」

服を捲り上げると、見慣れた肌がやけに艶めかしく現れた。胸の突起や臍のあたりが赤く色づいて、すべすべとした肌は手の平にしっとり吸いついてくる。すぐく気持ちいい。何度も肌の上

を往復させていると、スレインの声が大きくなってきた。それと一緒に、漂う香りが変化していく。

ああ、そうか。

忘れていたことを思い出した。そう言えば、学校で習った。教科書に書いてあった。確か、フエロモンっていうのはこういう匂いをするんじゃないかなかったか。花とか、果物とか、そういう匂い。「…すごく甘い。果物みたいな匂いにする」

赤く尖った飾りを口を含むと、蜜のような甘くとろりとした感覚があった。実際に液体が漏れ出ているわけではないのだが、そういう風を感じる。ころころと舌で転がすと、スレインの背中が張り詰めて甘い嬌声があがった。押し倒された体勢のまま、伊奈帆の足に太ももをすり寄せてくる。

本当に今日は積極的だ。

「そ、う…かな…ああっ」

フロアリングの上でゆらゆらと揺れる腰を両手で掴み、撫で上げる。がくがくと膝が笑った。甘い吐息を食べてやる。口内は熱くて、熟れていた。二人で何度もセックスしたけど、こんなに気持ちいいのは初めてかもしれない。

「…あのさ」

「は、あ…なに…?」

スレインが涙目で伊奈帆を睨んだ。早く次に進みたいのだろうけれど、ちょっと待ってほしい。だって、もったいない。だってすごく素敵なんだ。

それに。

「気持ちいい?」

「うん…?」

大事なことだ。もう一度、少しゆっくり声に出して聞く。

「ねえ、気持ちいい?」

ぱちぱちと二回瞬きをした後、伊奈帆の質問の意図を了解した、というようにスレインの瞳が大きく見開かれ、瞼がゆっくりと閉じ、そして柔らかく開いた。細められた目と下がった眉尻は、年齢よりずっとあどけなく愛らしい。伊奈帆が大好きな顔だ。

「…ああ、すごく気持ちいい。…全然苦しくない。大丈夫」

「…そっか」

十年だ。二人で越えてきたヒートの数は一三七回。最初の三年はお互い、生死の境を行き来す

るようだった。次第に慣れて、五年くらいしたら吐くのはなくなった。七年目で絶頂があった。八年目には、いくとときに名前を呼んでくれた。九年目には、もう葉はいらなくなった。

そして十年目。

ああ、今度は澄んだ花の香りがする。薔薇だろうか。濃厚で、空気に色がついているみたいだ。口に含んだ息も肌もすごく甘い。目も、髪も、肌も、全部すごく綺麗に見える。食べてしまいたいくらい。早く一緒にになりたい。きつと、すごく幸せな瞬間があるという確信があった。

一瞬。薄暗く寒い独房で見た、首を覆う白い包帯が伊奈帆の頭を過った。固いベッドの端と端に座って、深刻そうに言葉を交わして。まだ、体に触れたことも、手を握ったことさえなかった。薄っぺらい囚人服に包まれた傷だらけの体からは、痛々しいというだけの感情しか持ち得なかった。

今では、随分と昔のことだ。

ちよつと泣きそうだった。

「…伊奈帆。…その、早く…」

手を止めた伊奈帆に、スレインは恥ずかしそうに言った。節くれだった華奢な指が伊奈帆の手を握った。

カタフラクト越しにこの手を掴んでから、もう十二年だ。

生きている。僕も。彼も。

スレインの手を両手で恭しく持ち上げて、手の甲にキスをした。そこから、また美しい香りが漂った。甘い木の香り。

雪の降る森のようだ、と伊奈帆は書面でしか知らないスレインの生まれ故郷を想った。

「ああ、ごめん。…やっぱり、ちゃんとベッドに行こう」

「うわ」

床についた背中と膝裏に腕を滑り込ませて、一気に持ち上げた。慌てて首にしがみつくと白い腕がやけに美味しそうでぺろりと舐めると、くぐもった声が耳に甘い。へへ、と声を漏らして伊奈帆は笑う。

「久しぶりだな、これ」

「…恥ずかしいやつ」

行儀悪く足だけで靴を脱ぎ捨て、大股で廊下を歩く。白い壁は所々茶色く褪せて、フロアリングは傷がついて凹んでいる。そういうえば、雨続きで布団を干していなかったな。乾燥機くらいかけておけばよかった。このところエアコンの調子が悪い。今日は寒くなければいいけれど。

軍の管理するこの住まいも、すっかり二人のものだ。鳥籠のつもりで与えたらしい白く無機質だった住居は二人と一緒に年を取り、今ではとても居心地が良い。

籠でもなんでも、そこに誰かがいれば生きていけるものだ。

「スレイン」

「…何？」

「好きだよ」

「…うん。ありがとう」

ベッドの上に倒れ込んで、唇を重ねる。甘酸っぱくて少し苦い、初夏の爽やかな風が通り抜けるような香り。世界で一番、幸せな味がした。

どこからか、黄色い香りがする。

「いい匂い」

喉仏のあたりに鼻を埋めて、手は脇腹のあたりをゆっくり撫でながら、伊奈帆が言った。熱い息が喉にかかって、ぞくぞくと快感が背筋を駆けのぼる。どうしたんだろう。今日はなんだかおかしい。触られたところが温かくて、ずっと触れていてほしい。あと、汗とか体液じゃない、なんだか不思議な香りがする。香水ではないだろうけれど、そう、果物。果物の皮のような…。

「蜜柑みたいな」

そうだろうか。柑橘系だとは思うけれど、もっとすっきりとして、土や木々の匂いが混ざっている気がする。

いつの間にか、服の下を撫でる伊奈帆の手が腰骨をなぞっていた。上げて、と言われて素直に腰を上げると、下着ごと下衣を足から引き抜かれる。じくじくと前から後ろからも熱いものが溢れてきて、足の間はそこから濡れているに違いない。今更だけれど恥ずかしくなって、スレインはぎゅっと目をつぶった。しばらく、衣擦れの音と床に何かが落ちる音がした。薄く目を開けると、自分の上で伊奈帆が服を脱いでいるのだと分かって今度はもっと恥ずかしくなってしまう。目のやり場に困って壁の模様を数えそのままじっとしていたら、伊奈帆の手がもう首のところまで上がっていたシャツを引っ張った。

「脱がすよ。手、上げて」

ホールドアップ。こんな時に変な話だと思って、少し可笑しい。シャツは首から抜き取られ、床に放り投げられた。二人分の衣服は、床の上でミルフィーユみたいに積み重なっているだろう。

「ああ、すごくいい匂い」

仰向けになっているスレインに、伊奈帆が屈んでキスをした。その時、確かに、何か香った。舌の間で混ざり合った唾液を飲み込むと、甘酸っぱいような、ちよつと苦い味がした。唇を触れ合わせたまま、お互いの瞳を映し合う。伊奈帆が舌を出して少し笑った。

「今、レモンの味がした」

ああ、レモン畑。スレインはつられて笑い、首を伸ばしてその舌に吸い付いた。忘れていた記憶が呼び起される。幼い頃、シチリアで歩いた、レモン畑の香りだ。土と、草と、若い果実の香り。揺らす風と吹き抜けたその先の青い空。地球の美しさを切り取ったような風景。

ああ。この男に、よく似あうな、とスレインは思った。

「ん…、……は、………っあ」

指でゆっくりと解かれて、中の方がもっともつと疼く。腰が勝手に浮き上がるのを、伊奈帆の手が支えた。

ちがう、そうじゃない。そんなの早く抜いて、入れてほしい。

「…辛くない？」

伊奈帆の手が止まった。乱れた呼吸が収まっていく。ああ、じれったい。もっと性急でいいのに。いつもこの男は、いちいち聞いて、その度熱が滞留する。要するに、ムードとか、そう、情緒がない。

そこでふと、そんなことを考えるなんて自分も呑気になったものだ、とスレインの鼻から息が漏れた。安らかな気持ちになって、優しい声が出た。

「…気持ち、いい。夢みたいだ」

不思議だ。これまで、こんな感覚になったことはなかった。

初めてこの部屋でヒートを迎えた日のことを思い出す。独房だって、実験室だって、我慢できないほど辛かった。ここでも、やっぱりすごく苦しくて、気がおかしくなりそうだった。

せめて抑制剤で楽になれば、じっとしていれば過ぎていくのに。与えられた分を飲んでも一向に楽にならなかった。体が意思とは関係なく疼いて反応を繰り返し、頭は割れるようで腹は腐

るように熱い。

夜だった。伊奈帆は帰っていた。食事は喉を通らなかったが、まだ、その時は堪えられた。でも時間が一秒一秒降り積もる間に、体がいうことを聞かなくなつて。風呂場で、じつと水を浴びていた。意識は朦朧として気を失いそうだったが、体は熱くてどうしようもなかった。

このまま死んでしまえないだろうか。

そんなことを考えていると、浴室のドアが勢いよく開いた。飛び込んできた伊奈帆は、冷水で濡れるのも構わずスレインの頭と肩を支えた。

温かい人の手が、体に触れた。

シャワーの水は出たままだ。自分のどこにそんな力があつたのかわからないが、その温かい喉に掴みかかった。なぜだろう。殺意があつたのかもしれない。それか、昔のことを思い出したのかもしれない。

氷のような水飛沫の中で、スレインは伊奈帆の喉笛に噛みついて、血を舐めて、服を剥ぎ取り腹の上に跨った。伊奈帆が何度か制止の言葉を言った気がするが、よく覚えていない。肌を舐めて、性器をしゃぶった。時々、性交の予感を体を感じて嘔吐した。体がばらばらになるように関節が痛んだ。頭の中を素手で掻き回されているような頭痛がした。それでも、脳が穴を埋めるも

のを欲して体を突き動かす。アルファを求めて、後孔からじくじくと愛液が滴る。何度も性器を擦りつけ、孔に手であてがった。

でも何も起らなくて、そのうち伊奈帆がスレインの体を押してシャワーの水を止めた。疲れ切って何も言えないまま、スレインは伊奈帆が立ち上がり浴室を出たところで気を失った。

目が覚めると、ベッドで寝ていた。カーテンは開いている。外は明るい。断続的な倦怠感と痛みはあったが、オメガとしての衝動はかなり治まっていた。喉の渴きを覚えて身を起こす。服を着ていた。

昨夜の記憶が徐々に戻ってきて、頭を抱える。ヒートのせいだけではない頭痛がした。

あいつ、どういふつもりなんだ。

おそろおそろリビングに足を踏み入れると、味噌と醤油のいい匂いがした。洗濯機のドラムが回転する音が、壁越しに聞こえる。界塚はどこにもいない。仕事に行ったのだろう。

少しだけほっとして室内を見渡す。ダイニングテーブルには、耐熱容器に入ったライスボールと味噌汁、卵焼きがラップをかけられ置いてあった。

それぞれの皿の上に、付箋紙が貼ってある。目を擦り、顔を近づけると「500W 1mJ」 「45s」

「30s」という文字が読み取れた。

馬鹿じゃないのか。

シンクを見ると、洗い晒しの茶碗と椀、箸が食器籠に置かれたままだった。スレインはもう一度テーブルの上に用意された食事を目を落とす。

あいつ、あれだけの出来事の後に僕を部屋に運んで、服を着せて、掃除をして、洗濯して、食事を用意して。自分はそれを食べて、仕事に行ったのか。こんなメモ書きを残して。

視界が急に滲んで見えなくなった。目を擦ると、手が濡れた。付箋紙をつまみ上げる。少し角ばった、右下がりの文字。その文字が濡れて、黒いインクが広がった。どうしてだか涙が次々出た。

本当に、馬鹿じゃないのか。こんな。どうして。

立っていられなくて、椅子を引いて座った。ああ、面会室の椅子より、ずっと座り心地がいい。

テーブルも椅子も、木の匂いがする。机を撫でると、木目が指に優しくかった。

サララップをペリペリと取る。味噌の香りを吸い込んだ。一口啜る。この料理を、初めて美味しと感じた。

電子レンジで温めることはしなかったが、彼が残していった食べ物とは思議と全て腹の中に

収まった。ちゃんと味がして、毎日何かを摂取しているのに、食事をするということを随分と懐かしく感じた。

不思議と、日中は叫び出すほどの苦しみはなかった。食事の後、葉を少し多めに飲んだからかもしれない。それに、体力が落ちているからだ。回復したら、きっとまた暴れ出すだろう。

その夜帰ってきた伊奈帆は、今日はがんばるから、と少し隈の浮き出た顔で照れくさそうに笑ったのだった。その笑顔を見てわかった。

彼は初めてだったのだ。

驚いたなんてものじゃない。こいつ馬鹿か、とは何度も思ったことだったが、この時ほど呆れたことはなかった。

何も言えないスレインに、伊奈帆はご飯にしよう、と言ってまた笑った。その顔を見ていたら涙がまた溢れてきて、伊奈帆はスレインの肩をぽんぽんと叩いた。ほら、何が食いたい？ って言うって。

あの時、僕はここで生きることを決めたんだ。

「ん……あ……ああっ…ア、伊奈帆、…もう」

ひっきりなしに声が出る。指しか入っていないのに、体中がどろどろに溶けてしまうくらい気持ちがいい。声が枯れて喉が痛い。気づくといつの間にか、腰の下に枕が敷かれていた。快楽に反応して跳ねる腰を何度も受け止めて、弾力性は失われている。伊奈帆が、スレインの開いた足を肘で持ち上げた。

「もう、入れていい？」

いちいち聞くな、と思うが言葉にならない。こくこくと思い切り首を上下に動かす。伊奈帆が指を引き抜いた。

「ああッ……！は、あ、ア……！」

両手で腰を掴まれ、その感触に喉の奥が震えた。ああ、入ってくる。早く早く。ぐっと押し付けた塊の小さい皺の一つ一つ、形の細部までわかるくらい、そこが喜びを以て柔らかく開くのがわかった。少し入ってきただけで、体中に甘い痺れが広がる。手の先へ、足の先へ、指の先へ。温かい何かが行き渡る。

ああ、すごく、すごく気持ちがいい。それ以上に、泣きたいくらいの幸せを感じた。体だけではなくて、どこかの隙間が埋められたような、欠けていたものを見つけたような安心感に包まれ

た。

手を伸ばすと、握られた。指を固く組まれ、嬉しくて涙が頬を伝った。

最後まで合わさって、しばらく体を寄せ合った。胸がびったりくっついて、お互いの鼓動の速さが少し違うのがわかる。少しタイミングのずれたメトロノームみたいだ。それが心地いい。

伊奈帆が、スレインの背中に腕を回して引き寄せた。対面に座るつもりだと分かり、肘をついて体を起こそうとするが力が入らず上手くいかない。伊奈帆が肩の下に手を指し込んで引っ張った。繋がったまま体を動かすと、中で擦れて何度か声が漏れた。伊奈帆はその度、耳や顎に口をつけて髪を撫で、それにまた声が反応する。

向き合って座り肌を感じると、どちらともなく動き出した。スレインは少し下にある頭を抱えこんで、弾力のある髪を掻き回す。伊奈帆の吐く息が耳の近くを何度も掠めて、もう訳も分からずしがみつく。接合部がぐちゅぐちゅと音を立てて、中を掻きまわされる。

ああ、また香りがする。すごく濃い。吸うと、どんどん気持ち良くなる。もう体のどこが動いているのか分からないくらい、スレインの体中が迎え入れた他者を歓迎していた。

「あア……………あ、…………ア、ア……！」

「……っ、ごめん、ちょっと、余裕ないな……」

「ひ、あ……！……イ、……い、……あ！」

下からの速さを増す律動に、動きを合わせて応える。もう、どこまでが自分で、どこからが伊奈帆なのかわからない。でも、もっと。

「は、……もっと、……ア、い、いな」

伊奈帆の背中を探る。肩甲骨の出っ張りに指をかけて、離れないように体をくっつける。お互いの汗が張り付いた胸の間で、銀のチェーンがカラカラと揺れた。伊奈帆の手が、力強く背中を締める。

もっともっと、近づきたい。一つになりたい。

「スレイン……っ」

「伊奈帆……、あ、ア……！」

赤い。

いや、違う。なんだろう。

体の奥から、痺れが波のように寄せて返し、どんどん大きく深くなる。背中が伸びて、足も手も伸びきってその痺れを余すことなく行き渡らせようと硬直する。

目が開く。開く。開く。さて、何かある。瞼の裏に。波が来る。まだだ、また。

ああ、見えた。

赤い。違う、橙の。

波がまたくる。ああ、あれは。

ああ、そうだ。夕日だ。

「あア——…!!ア…ア、ああ…!!」

体が、注がれたものを残さず搾り取ろうと強張って痙攣する。生まれて初めて感じる凄まじい快感に、息ができない。口を開いたり閉じたりして、何とか空気を吸おうとしていると、伊奈帆が頭を支えて口を口で塞いできた。

ふう、ふう、と喉を空気が通り抜けていくのがわかった。数度繰り返して、顔を離すと心配そうな顔があった。スレインは伊奈帆の汗で張り付いた前髪を指で分けて、笑いかける。ほっとしたように伊奈帆も微笑んだ。

「…抜くよ」

「いちいち、聞かなくていいから…」

ずるり、と内部を占めていた体積が失われて、そこがひくひくと物欲しそうに動いた。かあ、と頭と顔に血がのぼる。

全く、いちいち聞くから恥ずかしい。寝転んで、枕に顔を埋めた。ふわりとブランケットが肩にかかる。ベッドのスプリングがきしみ、伊奈帆が横に寝そべったのが分かった。後頭部に微かな重力を感じる。柔らかい。

伊奈帆の指に髪が梳かれていた。心地よくて、瞼を閉じる。伊奈帆の手が、後頭部の形を追う。耳の後ろを触って、また髪を梳く。しばらくそうしていた。スレインは薄く目を開けた。

気づいた。

首の後ろに、血流が集まっているのが分かる。ナイフで裂いたら、きっと噴水のように勢よく血が噴き出すことだろう。

伊奈帆の指が、首の後ろの触れるか触れないかのところをゆっくりと撫でた。じんわりとした快感が背筋を抜けた。

「あ……」

伊奈帆が一瞬指をひっこめたが、何かを確かめるように、今度はまっすぐ揃えた指でもう一度、触った。指は震えていた。

固く伸ばしていた指は、次は首の曲線にそって曲げられた。温かい手の平の感触が心地いい。そういえば、こんな風に触る奴なんて、いなかったな。耳の近くで、声がした。

「……ここを」

掠れた声は、止まった。躊躇うなんて、界塚伊奈帆らしくない。でも、その優しさが嬉しかった。

スレインは頷いた。

「……いい」

さっきまであんまり声を上げていたものだから、喉に引っかかって上手く発声できなかった。聞こえたかどうかは怪しい。でも、見上げると見下ろす橙が静止して細められた。わなわなと唇が震えているのが見えた。

「囁むよ」

首の後ろがざわざわと別の生き物みたいに猛り出した。こんなところが、何かを求めるのは初めてのことだ。

肉を突き破ってほしい。血を飲んでほしい。唾液を傷口に落としてほしい。そして、この体をただ一人のものにしてほしい。

首がそう言っている。

「ああ…」

抱き寄せられ、上半身を支えて起こされた。

伊奈帆の肩に頭を預ける。彼の心臓が驚くほど大きく打っているのが分かって、背中に腕を回して軽く叩いた。自分の名を呼ぶ声が聞こえた。

耳が熱い。体中がスーパみたいにどろどろと蕩けそう。息を潜め、その瞬間をじっと待つ。早く来てほしいような、ずっとこの瞬間が続いてほしいような、矛盾した気持ちだった。

伊奈帆の唇が、スレインの項の皮膚に数度触れ、離れてを繰り返した。初めてキスをするティーンエイジャーのような触れ方に、スレインは気持ちが悪く感じるのを感じた。

いちいちうるさくて情緒に欠ける奴だけれど、こういうところが好きなんだ。

スレインは目を閉じたまま、くすぐったい感触に身を任せる。時が止まった。

歯が、当たった。

一度引いて。

また、当たる。今度はゆっくり、皮膚に食い込んでくる。

ああ、気持ちいい。もっと。

ぶつり、と肉が破れた。たらたらと生暖かい血液が首を伝う。齒は、さらに奥へ進む。もつと奥。そう、もつと。

ぞわぞわと体中に鳥肌が立った。ああ、もうそこまできている。声が勝手に漏れ出る。

「あ……あ……！」

一瞬、自分がいなくなったように意識が止まった。そして次に、何か一つの物に合わさったような不思議な感じに包まれる。体の境界線がなくなったようだ。一つの器に入れた液体のように、もう分けられないような混ざり合った感触。

「スレイン」

ふわり、と何かが香った。この部屋の空気が変わり、温度までもが変わったようだ。

スレインは薄っすらと目を開けた。見えるはずもない景色が見える気がして、もう一度目を閉じる。

ああ、これは百合だ。草原で風に揺れる大輪の白い花。緑の中に、たくさん。風が吹く。草がさざめく。木々が揺れ、果実が踊る。美しい光景が浮かぶ。

微かな痛みと、甘くとろりとした感覚が血管を辿り神経を辿り体中に広がっていくのが分かった。日の光をいっぱいに浴びた、初夏の甘い果物の香りがする。それと、温かい香り。

大きく息を吸い込むと、体が楽になった。首の後ろの切り傷はもう痛くない。血は止まったらしい。

体に回された伊奈帆の腕を手のひらで辿ると、お返しというように手の平が肩から肘を撫でて手を握った。熱い手。指の間に指を差し込むと、ぐっと力が込められた。

「伊奈帆」

スレインは伊奈帆の前髪を両手で掻き上げた。膝を立てて背伸びをし、もう開くことのない左眼窩に唇で触れる。目を開け見下ろすと、伊奈帆は泣きそうな顔で見上げていた。

この男のそんな情けない顔は、初めて見たかもしれない。

「伊奈帆、君に出会ってよかった」

「ああ…」

背中に回された腕は、初めて回された時より力強くて、伊奈帆が押し付けた顔から出た水分で胸が濡れた。癖のついた後頭部を撫でると、水滴が落ちた。

もらい泣きとは、自分も随分、年を取ったものだ。スレインは伊奈帆の髪に顔を近づけキスをした。

Bouquet

～ブーケ～

(Newly written)

名) 花束

名) 種々の花の匂いを混合した香水

名) 祝辞

二人の場合

「髪、のびたね」

「ああ。まあ」

スレインの指が自分の後頭部を一度梳いた。毛先が肩口で跳ねている。
「切る？」

前髪が目にかかって鬱陶しそうだ。スレインの左手が髪を耳に流した。
ちよつと色っぽい。朝から。

食事の途中だった。朝食に目を落とす。早く食べよう。冷めてしまう。

「いや、まだいい」

「ふうん」

皿の上で目玉焼きを切り分ける箸の動きが目に入る。美しい手の形だ。こうなるまで、随分練習したんだ。

「伸ばしてるの？」

「え？」

「髪」

「ええと…まあ、そうかな」

「そう」

前髪が長いと目や耳が隠れるし、そこはちょっと残念だ。

でもまあ。

自由になるものは、自由にしたらいいか。

「…変か？」

スレインが聞いた。伊奈帆はこの会話は終わったものと認識していたので、目を丸くして見返してしまった。顎を引いて様子を窺っている。白米を咀嚼しつつ、スレインの髪の長さについて考える。

肩のあたりまで伸びた髪。毛束の多い癖のある髪。かつての。敵だった頃なら、白い獅子のような印象を持ったかもしれない。

腹に響く声と張り詰めた糸のような立ち姿。逸らすことができない燃える氷の瞳。世界を揺るがすけもの。

波の音。

潮の匂い。

濡れていた。

照準を合わせた先。

風に吹き荒ぶ月の色の髪。

引き結ばれた口の形。白い額。

そこを撃つこともできたのだ。僕は。

我に返って前を見る。その男も、今は穏やかな表情で朝ご飯を食べている。一緒に。長い髪。

膝頭を開いて座る、少し行儀の悪い足。箸を持つ手。弧を描く唇。

温かい、優しい眼差し。

毎日、当たり前のように呼ばれる自分の名前。その声の円やかさ。

細い金糸が束になって顔を縁どり。

金色に鼻を埋めると深い森と口に苦い花の匂いがして。

故郷って言葉が浮かんで。

なぜだかいつも、泣きたくなる。

それを知ってるかな。

長い髪か。

窓から差し込む朝日で輝いている。

地球の光を集めて糸にしたら、きっとこんな色だろう。

変じゃないし、悪くない。

なんだろうな。

「君の髪を切るの好きだから。切らないのかあ、と思って」

「そうか」

軽い声で返事があった。今のは、言いたいことが上手く伝わらなかったような気がする。

「長いのも好きだから」

そう、好きだ。どんな髪でも。どんな君でも。

「あの…」

「ん？何？」

スレインの手がまた後頭部の髪を梳き、毛先が肩の前に揃った。首が隠れた。

ちよつと不安になる。あれを隠したいのだろうか。だから長く伸ばしているのだろうか。

「その…。君はよく、…ええと、その…、髪を。…触る、だろうか？」

「うん」

「その…僕はそれが、…結構好きなんだ」

ガタタツ。

「…なんで立ち上がった？」

「…いや、何でもない」

「…でも、短いと、すぐに手が離れてしまうだろう。だから…」

伊奈帆は額を押さえて目を閉じた。今の言葉を何度も反芻する。好きって言った。触ら

れるのが好きって。

いい。

いい感じだ。しかし朝っぱらからそんな可愛らしいことを言われてしまつては、今日一日どうしたらいいのだろう。

「…まいった」

「何？」

にやけてしまう。間拔けな顔に見えるかも。まあいいか。どうせここには二人しかいないのだから。

「いや…あのさ」

「うん」

「やったことないから、多分下手だと思うんだけど…そのうち上手くなるからさ、髪を結ばせてよ」

「え？」

「わかった。髪を切りたいんじゃないなくて、髪に触りたいんだ。僕は」

スレインが間拔けな顔をして、口をぱくぱくさせてから顎を引いた。目つきの悪い上目遣い。難しい顔を装っているが、分かる。これは照れている顔だ。

「…お前。恥ずかしいこと言うな」

「そっちだって、相当恥ずかしい。顔赤いよ」

「…お前の方こそ耳が赤い」

噛んだ米は甘い。照れ隠しに、噛む速度が速くなる。箸の先の白い米はつやつやとしていた。

そういえば、いつからだっけ。おにぎりじゃなくて、茶碗で食べるようになったの。

スレインが。

箸が使えるようになってからだっけ。

吐かずに食事ができるようになってからだっけ。

同じ時間に座って食べるようになってからだったかな。

「お茶、飲む？」

湯呑に急須を傾けると、ありがとう、と聞こえた。

「ようし。元気が出た。行ってきます」

「伊奈帆」

袖を引かれて屈むと、細い金糸が鼻にかかった。甘い香りとしょっぱい味。

やっぱり、前髪くらいは切った方がいいかもしれない。

「…いつてらっしゃい」

「…うん。早く帰るよ」

「いつも通りでいい」

帰りに、果物とパンを買って帰ろう。明日は土曜日だから、ゆっくり起きて朝はサンドイッチでも作ろう。ああ、花も買おう。前に花を買ったのは結構前だ。あと、リボン。何色にしようか。

エーリス・ハッキネンの場合

「久しいな。界塚少佐」

「ご無沙汰しています。ハッキネン元中將」

退役軍人と青年将校は、畳の応接間で向き合っていた。二人で使うには広すぎる空間だ。まあ、狭いよりはいい。

「恙ないか」

「はい」

「まさか、十年以上も君が耐えるとは思わなかったよ」

日本風に整えられた中庭から、蟬の声がする。

無数の小さな生き物の叫びを、煩いとは感じなかった。

「今日は、お願いがあつて来ました」

「何だね」

上官は、退役して皺が増え目元が丸くなったようだ。心配そうな表情を覗かす様は、好々爺に見えなくもない。

「病院を都合していただきたいのです」

「その目か？ずいぶん経つが、後遺症か？」

「いえ。パートナーの方です」

「ああ。何だね。病気か？」

素っ気なく言って湯呑を持ち上げたハッキネンに伊奈帆は言った。

「いえ。子どもができたので」

茶が零れた。言うタイミングが悪かったかもしれない。

「…何だって？」

「多分ですけど」

「…子ども？」

「前のヒートから四か月になるし、食べ物の好みが変わったから…」
滔々と話す伊奈帆にハッキネンは手を広げ振った。言葉を止める。

「…待て待て。あれは、生殖能力を失ったのではなかったか？」

「物みたいに呼ばないでください。僕の番です」

「…は？」

「報告が遅くなりましたが、一年ほど前、番になりました。できれば、そちらも処理をお願いしたい」

蟬の声。鹿威しの音がその中に紛れ、数度響いた。

「なぜ報告しなかった？」

「確証がなかったのです」

「…言葉もないよ」

「今のままでは学校にも、通えないですから」

老年の元軍人は眼鏡を取って天井を見上げた。モニタ越しに見たことのあるジェスチャーだが、以前と全く違う感情を抱いた。

「何というか。…君も、親になるんだな」

伊奈帆はくすりと笑った。

「あなたのおかげでもありますよ」

「何？」

「当時、僕はただの友人でしたから。あなたや周りの人は勝手に色々想像していたみたいですけど。一緒にチェスをして、話をして。それだけです」

今はもうない独房に懐かしさを感じた。小さなベッド。端と端に座って、必死に言葉を選んで。

若かった。子どもだった。がむしゃらだった。何をどうしていいかなんて、わからなかった。

鮮明に覚えている。白い包帯の巻き付いた首。向けられる目。耳に届く言葉。傷ついているはずなのに、平静を装って。痛かったはずだ。怖かったはずだ。そして、孤独だったはずだ。彼にとって生きているということ、生きていくということは、苦痛と不幸でしかなかった。それをずっと見てきた。

救われる日が来るなんて、奇跡に思えた。

「そうなのか…」

「一緒に暮らすようになって、好きになっていきました。家族というものを持つことがで
きるのは、嬉しい。僕もあの人も、あまり家族：特に両親のことを知りませんから」

「そうか」

「はい」

ハッキネンが大きく頷き膝を打った。古めかしいジュエスチャーだが、分かりやすい。

「わかった。いいように取り計らおう。まかせたまえ」

「お願いします」

茶を勧められ、湯呑を口に運ぶ。氷が溶けた薄い茶が喉を通り抜けた。

「一度、会いに行くよ。その時、色々必要な手続きをしよう」

「はい」

「謝罪もしたい。手土産は何がいいかね」

なんだかくすぐつたい。でも、貰えるものはもらっておこう。

「果物かな」

「新しい住まいを用意しよう。監視はつくがな」

「お願いします」

「界塚」

「はい」

皺だらけの手が目の前にあった。握手を交わす。

この人と握手をする日があるなんてな。

「最後になったが、おめでとう。何というか、仲良くな」

「もちろん」

重なり響く蝉の声が、祝福の歌のように耳に優しい。

二人との場合

「髪、結ぼうか」

「ああ……うん。顔を洗ってくる」

「うん」

洗面所から戻ってきたスレインはソファに座って欠伸をした。櫛と髪留めを持って隣に座ると、背中が向く。耳の上から髪を集める。くすぐったそうに肩が笑った。

「伸びたね」

「ああ……そういえば」

ふわふわと膨らむ頭髮は背の中ほどまでを覆っていた。手櫛で集めてから櫛齒を当てる。抵抗なく髪の間を通った。

この猫毛に初めて櫛を通したのはずっと前だ。

何度も訪ねた面会室で。

髪を切るために櫛を通すと、瘦せて荒れた髪は絡まり千切れた。鋏で切った毛は重さがないように床にパラパラと落ち、艶のない髪の手が鈍く明かりを反射していた。死人のような髪だった。

「伊奈帆？」

名前を呼ばれて我に返る。手が止まっていたようだ。豊かな髪を梳る。

こんなに髪が伸びた。

柔らかい髪が手の指に心地いい。

手の中で束になった髪は、一本一本が日の光を浴びて輝いている。

櫛に絡まることは、もうない。

「今日は三つ編みにしようかな」

「何でもいい」

「それか、ポニーテールか」

「好きにしろ」

ソファの背もたれに肘が乗っている。最近は凭れることが増えた。裸足の足がフローリ

ングの上でふらふら揺れている。退屈そうだが、機嫌は良さそうだ。

「ねえ」

「何？」

「いや、何でもない」

「変な奴」

一つに集めた髪は頭頂まで持ち上げられるほど長い。もう、こんなに経ったんだ。

「…子どもを、生んだらさ」

「…」

スレインは前を向いたまま。気配だけがこちらを向いた。

「君の髪を切りたいな」

「…なんで？」

「なんだか、髪が長くなるほどに君を遠く感じるんだ」

窓の外、朔風に木の葉が舞い散り、光が笑った。

「馬鹿だな。僕はどこにもいかないし、何も変わらない」

こんな声をしていたっけ。陽だまりのような声。暖かくて柔らかくて、翳りのない声。

「そうかな」

「そうだ。変わらない」

「そうか」

伸びる髪を切ってきた。

何度も何度も座る彼の後ろに立った。

薄暗い部屋で初めて鉄を入れた時。彼の一部を切り取った瞬間。

下から現れた項があまりに頼りなくて。

染み一つ、傷一つない首の後ろ。

白い肌に産毛があって。

切った髪が張り付いて。

その下の襟ぐりからは、背中のひどい傷痕が覗いて。

白い項が。

あんまり弱く清らかに見えたから。

触れたら壊れてしまうと思った。

そこに、ある日包帯が巻かれた。

ぐるぐると巻き付けられた、血の滲んだ長い布。

光源のない暗い独房で見た彼の姿は首を落とされた亡霊のようにも見え。

硬いベッドの端と端に座り。

声は深く沈み。

目は暗く光り。

理不尽な暴力に晒され続けた体は壊れかけていて。

それなのに。僕は手を握ることも、肩を抱くこともできなくて。

さようなら、なんて言わせてしまつて。

体も、心も。

もう、治らないと思った。

「ポニーテールにしようかな」

生返事が聞こえる。何かを考えているか、眠いか、どっちかだ。

どこか遠くで鳥が鳴く。室内の空気は暖かい。

櫛と手で髪を上げる。項が露わになる。

白くて細くて、少し汗ばんでいる。

ほら、やっぱり頼りない。

この皮膚の下に、骨があり、血が通い、神経が奔っている。頸椎の中ほどに、触らなければわからないしこりのような部分がある。

ここがオメガのもう一つの心臓。

この器官が命を結ぶ。

滑らかな皮膚に薄っすらと、カーブを描く歯形が残っていた。

お互いがお互いの物になった証。

一つと一つが番となる。

一度だけの儀式。

消えない痕。

この傷が聖者の聖痕のように思えるのは。

そしてそれが嬉しいなんて思うのは、神様に怒られるだろうか。

「もう少し、お前に髪を梳いてもらいたい」

不貞腐れたような声。これは照れ隠しだ。

「うん」

スレインが自分の手を日にかざした。節の目立つ細い指が光を受けるのを、伊奈帆は神聖な気持ちで見つめた。

「その間は、その両手は僕の物じゃないか。悪くない」

光る手に手を伸ばす。届いた。温かい。手のひらをくつつけて握るとすぐに握り返された。

「スレイン。全部だよ」

彼の背筋が震えた。薄手のセーターの下で美しいスロープを描く脊椎。その四番目から香る冬の森の匂い。

「両手だけじゃなくて。全部、君のだよ」

「…そうか」

「もっと独り占めしてもらいたいな」

手を解き、髪を仕上げる。うん。きれいにできたと思う。

「はい、できた」

「…伊奈帆」

馬のしっぽが軽く揺れた。

「…せっかく結ってもらったのに、悪いんだけど」

振り向いた顔は少し赤い。口が笑った。そして目も。

「…今から、その独り占めってやつをしたい」

「…どうぞ」

肩を両手で受け止める。そっと、そっと背中を抱く。あんまり強く抱きしめたら、きつと苦しいだろうから。

髪を切るのもうすぐ。

部下の場合

「おはようございます」

「おはよう」

朝一で仕事をしていると、隣席の上司が出勤した。あれ、と時計を見る。まだ勤務時間よりかなり早い。

「昨日は世話を掛けたね。残業？」

「朝の方が効率がいいかと思ひまして」

「うん、そうだと思う」

自分もそうだが、界塚少佐も時間ぎりぎりに出勤することが多い。今日はお互い珍しい。

「これ」

少佐が紙袋から何かを取り出した。手の平サイズの包みを受け取る。

「何ですか？」

「お菓子だけど」

「いや、そういう意味じゃなくて……」

小綺麗にラッピングされた箱を上から下から眺めた。薄いブルーの包装紙に、光沢のあるシールが貼ってある。見ると、デスクに置かれた紙袋には、同じものが沢山入っているようだ。

「結婚したから。その挨拶」

「け、結婚？」

「うん」

相変わらず表情の変化に乏しいが、機嫌がよさそうだ。さらりと言ったが、結婚とは。何も知らなかった。

「あ、おめでとうございます」

「ありがとう」

返事もそこそこに、少佐はなぜか再び紙袋に手を突っ込んだ。荷物が多いな、と思ったが袋は二つあったのか。

「あとこれ」

「？またお菓子すか？なんで？」

包みが違う。今度は白の包装紙にオレンジ色のリボンが巻かれた小さな箱だった。

「子どもが産まれたから」

「こ、こ、子ども？」

「うん」

「いつ？ですか？」

「昨日」

そういえば、この人昨日は休暇を取っていた。

まじまじと両手に乗せた二つの箱を見比べてしまった。これは内祝いというやつか。そういえば、職場の先輩が何かややこしいことを話していたのを見た気がする。自分からしたら青天の霹靂だが、気づかなかっただけかもしれない。

「お、おめでとうございます」

「ありがとうございます」

少佐が照れくさそうに笑った。相手は噂の年上美人かな。このタイミングなら、聞いてもいいだろうか。

「もう、お付き合いされて長いんですか」

「一緒に暮らして十一年になるかな」

十一年前ならこの人は二十歳前後。噂も結構当たってる。結婚と出産のタイミングが重なったのは、訳ありだろうな。そこはちょっと聞きにくい。

「そうなんすか。おめでとうございます」

「…こんな日が来るなんてね」

少佐にしては珍しく、感情的な言葉と声音だ。この人のことは尊敬していたが、もっと好きになった。背筋を伸ばす。

「おめでとうございます」

「もう三回目だよ。ありがとう。君、いい人だね」

「お子さんは、男の子ですか？ 女の子？」

「女の双子」

「へえ」

「すごくかわいい」

「写真ありますか」

「あるよ。見る？」

スツと差し出された携帯端末を受け取る。ホーム画面がまさにその写真だった。

「目が青？緑？綺麗な色ですね」

「向こうに似たんだ。顔もね」

赤ん坊の見分けなんてつかないが、白い腕に抱かれた二人は可愛らしいと思った。

「奥さん、見切れてますね」

「…あの人、写真が嫌いなんだ」

ちょっと残念。スマートフォンを返そうと差し出すが、持ち主は口を手で覆い、そっぽを向いてしまっていた。

「…あれ、少佐。なんか照れています？」

「奥さんなんて言われたことないから、びっくりして」

「あ、すみません」

「いや…」

案外可愛い人だな。年上の上司に、失礼かもしれないが。

「でも、その呼び方はやめとこう。イメージじゃない」

言われて気づく。そうか。女性とは限らないんだ。失礼だったかも。

「失礼しました。じゃあ、えっと。お連れ合い、さん、は病院ですか？」

「うん。一人だと家にいてもすることないから。早く来ちゃってね」

「だから今日は早いんですね」

「あと一週間の辛抱だ。早く帰ってきてほしいよ」

「…」

惚気を聞かされているのかもしれない。

「君、今度遊びにおいでよ」

「俺が？ いいんですか？」

界塚少佐は椅子に座って頷いた。

「上司らしいこと、あんまりしてないし。ご飯でも食べにおいで」

「ありがとうございます」

笑窪の浮かんだ横顔に面食らう。こんな顔させるなんて、どんな人なんだろう。

後日譚

「いらっしゃい。どうぞ」

「あ、どうも（うわめっちゃイケメン）」

「早いね」

「（エプロン：!?）今日はどうも。あ、これ、お祝いです」

「ああ、ありがとう」

「気を遣わせたかな」

「いえ。あの、お子さんのお名前を聞いていたので」

「先に活けてくるから」

「うん。君もほら、上がって」

「何にしようか、と思ったんですけど」

「嬉しいよ。あの人、花が好きなんだ」

玄関に残った香りを吸い込んで、界塚伊奈帆は笑った。

あとかき

最後まで読んでいただきましてありがとうございます。

Pliv 再録本第一段です。思ったより量が多かったので、内容で分けて全四段くらいになる予定です。楽しみにしていただいた方でお氣に入りのお話が入っていません。つたらごめんなさい。絶対出しますので、ちょっとお時間ください。

「花吐き病」(2016-09-26)

花吐き病って、すごくスレインに似合うなあって思ったのがきっかけです。

◇イメージソング

「カメラリア」天野月子さん

「ヴァンパイアの恋」(2017-10-26)

ハロウィンネタ一回はしたい！と軽い気持ちで書き始めたが難産でした。調べたところによるとヴァンパイアは招かれな
いと部屋に入れないそうで、その設定非常に素晴らしいと思います。スレインがいたら招き入れたくてたまらないですね。

公園で出会った時のスレインはトリルラン(チンピラ)と一緒にいて、その後クルーテオ(大富豪)に飼われてハークライト(マフィア)と住むという話考えてた

んですけど入りませんでした。その後伊奈スレハ―は三人で行動を共にするんですけど最後は伊奈帆が人間のまま二人を看取る感じで終わります。見た目二十八歳伊奈帆×十七歳スレインってやばいな、って思いました。

◇イメージソング

「囚われた光」花江夏樹さん

「Absolute」(2018-3-30)

「Bouquet」(書き下ろし)

ついにうちの伊奈スレにも子どもが産まれました。おめでどう、おめでどう。オメガバースはいいですね。制作中にアルド

ノア香水の発売が発表されて、フェロモンの香りの参考にしたのでした。山あり谷ありを一步一步乗り越えてきた伊奈スレを書くことができて幸せでした。

アブソリュート(Absolute)は香水の抽出法の一つで、この抽出法は薔薇とかオレンジの花でする方法(摘み取った後に香りが失われるから)らしいので、伊奈スレっぱいなあと思いました。

ブーケ(Bouquet)は結婚のシンボルですから、どこかに入れたかったんです。そうしたら「花の香りを混合した香水」って意味もあるそうで、番になった二人と宿った生命に相応しいな、って思いました。

余談ですが「伊奈スレ幸せ家族計画」、

考えちゃいました。二人とも家族団欒なんてしたことないだろうから、オメバ世界では幸せ家族してほしいです。ではいきます。

・ローザ・リリア

女の双子（スレイン似）は三つ編みとポニテ（日替わり）で毎朝伊奈帆がセツトする。顔も性格も似てるけど違う服着て髪型も違う。控えめに言うって天使。

・蜜柑

男（伊奈帆似）は双子より三才年下。凶鑑ばっかり見てる。無口。アニメ一期の伊奈帆から料理成分と萌え袖を引

き算して、ドアを足で開ける、牛乳をパックで直飲みする、服の釦を掛け違える、などのがさつさを足し算した感じ。ザ・理系男子。眼鏡。

・檸檬

男（スレイン似）は兄より五才年下。お兄ちゃんのあとばかりついていく。成長するとまんまアルドノア学園スレインになる。

呼び方はパパ（伊奈帆）とお父さん（スレイン）で伊奈帆はスレインって呼ぶんだけど、スレインは子どもいるとパパって呼ぶもんだから「パパ、醤油取って」（醤油渡しながら）「君にパパって呼ばれるとな

んか。なんか変な気分になってくる」「いい年して大丈夫か」「パパそれ毎日言ってるよね」「朝からやだね」「お父さん、僕も醤油ちょうだい」「本を見ながら食べるのは……」「こぼした、ティッシュ」「座布団の下。踏んでる」ってなります。ランドセルはハッキネンとユキ姉とアセイラムからそれぞれ贈られました。

◇イメージソング

「眩暈」鬼束ちひろさん

「愛のメロディー」KOKIAさん

「赤い糸」Les.Rさん

以前書いた文章を読み返すというのは

気恥ずかしくもあり、再録本を出すって大変なんだな、と実感しました。あと、エログロは読むのは大好物ですが自分では苦手分野で、この本は当社比MAXの大人向けとなっておりそれもちょっと照れます。でも好きなのでまたチャレンジしたいです。

四方山話に最後までお付き合いいただきありがとうございます。楽しんでいただけたら幸いです。

鳴海

せかいのあなた

発行 Scramble/鳴海

発行日 2018.9.23/ZEROの方舟09

印刷所 (株)しまや出版様

Mail jjneg720@yahoo.co.jp

Twitter @narumiblu

PixivID narumi07

本作は制作会社、関係者、及び関係団体とは一切関係ありません。
無断転載、ネットオークションへの出品などはご遠慮ください。